九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[023]報告

斉藤, 信浩
九州大学留学生センター : 准教授

西原, 暁子
九州大学国際交流推進室 : 准助教

大神, 智春
九州大学留学生センター : 准教授

金, 珽実
九州大学留学生センター : 講師

他

https://doi.org/10.15017/4782074

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 23, pp.223-330, 2015-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，223－231
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 223-231

九州大学留学生のための日本語コース（JLCs）

Japanese Language Courses for International Students（JLCs）

斉　藤　信　浩*

１．コース概要

日本語コース（Japanese Language Courses: 以下 JLCs）は九州大学留学生センターに所属する各プログラム（研修コース、日本語日本文化研修コース、日韓理工系プログラム、福岡市広州市交流プログラム、Japan in Today's World Program）の留学生に対して提供する日本語のコースであり、総合（J コース）、漢字（K コース）、会話（S コース）、読解（R コース）、作文（W コース）の５コースで構成されている。平均して80名弱の留学生センター所属の留学生を収容し、クラス定員に余裕がある限りにおいて、九州大学の各部局に在籍する一般の留学生（修士、博士、交換留学生、研究生）の受け入れも行っている。これらの運営管理はオンラインシステムによって、受講申込からプレースメントテスト、成績管理などの一連の教務を補助している。

１－１　コースの編成

今年度、JLCs で開講される日本語授業（J、K、S、R、W）は以下、表１、表２のようになっている。括弧内は週当たりの授業コマ数であり、1コマ90分の構成である。以下、表１と表２は箱崎キャンパスでの開講コースの全体図である。伊都キャンパスで開講される日本語コースは総合コースの J のみであり、J1から J3に限定している。表１は2014年春学期（前期）の授業構成図である。春学期は K-2と K-3の受講者数が例年少ないことから、１つのクラスとし、S-2も受講者数が少ないことから S-3に統合した。

表２は2014年秋学期（後期）の授業構成図である。J1レベルの学生に対して週３の J クラスのみでは学習が少ないということから K1のレベルを設け、K-1と K-2を統合クラスとした。加えて、S-2に該当する学生が多めに来日したことから、S-2を増設した。また、J-4のレベルが大きく膨らんでしまったため、秋学期は J-4を１クラス、緊急に増設した。その一方で、J-7は２クラスを用意していたが、学生数が少ないことから１クラスへと縮小した。他のクラスに関しては通常通り開講をした。

*九州大学留学生センター准教授

表１　JLCs のコース編成（春学期）

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th colspan="5">日 本 語 コ ー ス</th></tr>
<tr><th>総 合</th><th>漢 字</th><th>会 話</th><th>読 解</th><th>作 文</th></tr>
<tr><td>入 門</td><td>J-1（3）</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>初 級 1</td><td>J-2（3）</td><td rowspan="2">K-3（2）</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>初 級 2</td><td>J-3（3）</td><td>S-3（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>中 級 入 門</td><td>J-4（3）</td><td>K-4（2）</td><td>S-4（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>中 級 1</td><td>J-5（2）</td><td>K-5（2）</td><td>S-5（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>中 級 2</td><td>J-6（2）</td><td>K-6（2）</td><td>S-6（2）</td><td>R-6（2）</td><td></td></tr>
<tr><td>上 級 入 門</td><td>J-7（2）</td><td>K-7（2）</td><td>S-7（2）</td><td rowspan="2">R-7（2）</td><td>W-7（2）</td></tr>
<tr><td>上 級</td><td></td><td>K-8（2）</td><td>S-8（2）</td><td>W-8（2）</td></tr>
</table>

表２　JLCs のコース編成（秋学期）

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th colspan="5">日 本 語 コ ー ス</th></tr>
<tr><th>総 合</th><th>漢 字</th><th>会 話</th><th>読 解</th><th>作 文</th></tr>
<tr><td>入 門</td><td>J-1（3）</td><td rowspan="2">K-1+2（2）</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>初 級 1</td><td>J-2（3）</td><td>S-2（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>初 級 2</td><td>J-3（3）</td><td>K-3（2）</td><td>S-3（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>中 級 入 門</td><td>J-4（3）</td><td>K-4（2）</td><td>S-4（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>中 級 1</td><td>J-5（2）</td><td>K-5（2）</td><td>S-5（2）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>中 級 2</td><td>J-6（2）</td><td>K-6（2）</td><td>S-6（2）</td><td>R-6（2）</td><td></td></tr>
<tr><td>上 級 入 門</td><td>J-7（2）</td><td>K-7（2）</td><td>S-7（2）</td><td rowspan="2">R-7（2）</td><td>W-7（2）</td></tr>
<tr><td>上 級</td><td></td><td></td><td>S-8（2）</td><td>W-8（2）</td></tr>
</table>

１－２　使用教材

2014年春学期までは、J-2は『初級日本語げんきⅡ』の15課までを行い、J-3は16課からであったが、J-2はコース後半の３週間が復習や発表等の作業になり、新規項目を扱っていないという問題点があり、また、J-3ではJ-4への橋渡しとなるような読解や作文の作業が不足しているという意見から、J-2へ16課を入れ込み、J-3は17課からという改編を行った。

表３　各クラスでの使用教材

総合	使用教材	読解	使用教材
J-1	『初級日本語げんきⅠ』	R-6	大学生と留学生のための論文ワークブック 読解編
J-2	『初級日本語げんきⅠ、Ⅱ』	R-7	大学生と留学生のための論文ワークブック 論文編
J-3	『初級日本語げんきⅡ』	作文	使用教材
J-4	『中級へ行こう』	W-7	大学生と留学生のための論文ワークブック 作文編
J-5	『中級を学ぼう中級前期』	W-8	『小論文への12のステップ』
J-6	『中級を学ぼう中級中期』		
J-7	『日本語上級への５つの　とびら』		
会話	使用教材	漢字	使用教材
S-2	『聞く・考える・話す　留学生のための初級日本語会話』	K-2	『Basic Kanji Book vol.1』
S-3		K-3	
S-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1、vol.2』
S-5	『聞いて覚える話し方　日本語生中継』	K-5	『Basic Kanji Book vol.2』
S-6	『日本語上級話者への道』	K-6	『Basic Kanji Book vol.2』 『上級へのとびら　きたえよう漢字－上級へつなげる基礎漢字800-』
S-7	自主作成教材を使用	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
S-8		K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』

１－３　開講日程

2014年度（平成26年度）の開講日程は以下の通りである。各学期は２期に分けられており、コース開始時に間に合わなかった来日遅れの学生への対応ができる。また途中でのレベル替えやコース替えにも対応できる。但し、実際のところ、１ラウンドはわずか６週間であり、６週間で学習効果が出るのかという議論もあり、ラウンドと途中のレベル替えやコース替えは極少数に留まっている。

表４　JLCs の開講スケジュール

	学期	開講時期
春学期	第１期	2014年（平成26年）　4月14日～ 2014年（平成26年）　5月30日
	第２期	2014年（平成26年）　6月 9日～ 2014年（平成26年）　7月18日
秋学期	第３期	2014年（平成26年）10月20日～ 2014年（平成26年）12月 1日
	第４期	2014年（平成26年）12月 8日～ 2015年（平成27年）　2月 3日

１－４　プレースメント

2009年度秋学期より、JLCs コースはオンラインによるプレースメントテストの体制へ移行したが、システムエラーやその他の事情などでオンラインテストに失敗した学生のために、紙ベースによる

バックアップテストを箱崎キャンパスで行う体制を取っている。2013年度秋学期のオンラインプレースメントテストでは、Windows8での作動が上手く行かず、ボタンを押すたびに画面が縮小して行くという現象が見られ、登録段階での失敗者やオンラインテスト段階での失敗者が続出し、2013年10月９日に96名という大規模なバックアップテストを行わなければならなかった。その後、Windows8とMac OS への対応作業が行われ、これらの問題は解決された。ところが、2014 年春学期、ラウンド１のオンラインプレースメントにおいては、「NEXT」ボタンが押せないという不具合が発生した。これは画面の設定が小さい場合に下の方でポップアップの画面が切れてしまい「NEXT」ボタンが押せないというものである。これについては、画面の立て幅を縮小して改善を図ったが、2014年度秋学期ラウンド３においても数件の同様なエラーが報告された。

2014年度秋学期ラウンド３では、登録後、選択したコースの情報が消えてしまい、オンラインでプレースメントが受けられなかったという報告が多く寄せられた。そのため、紙ベースのバックアップテストを40名近い学生が受験することとなった。

２． 受講者数、及び、受講者の内訳

２－１ 受講者数

図１に至近13年間の秋学期の受講者数の推移を示した。図２は同様に至近13年間の春学期の受講者数の推移を示した。

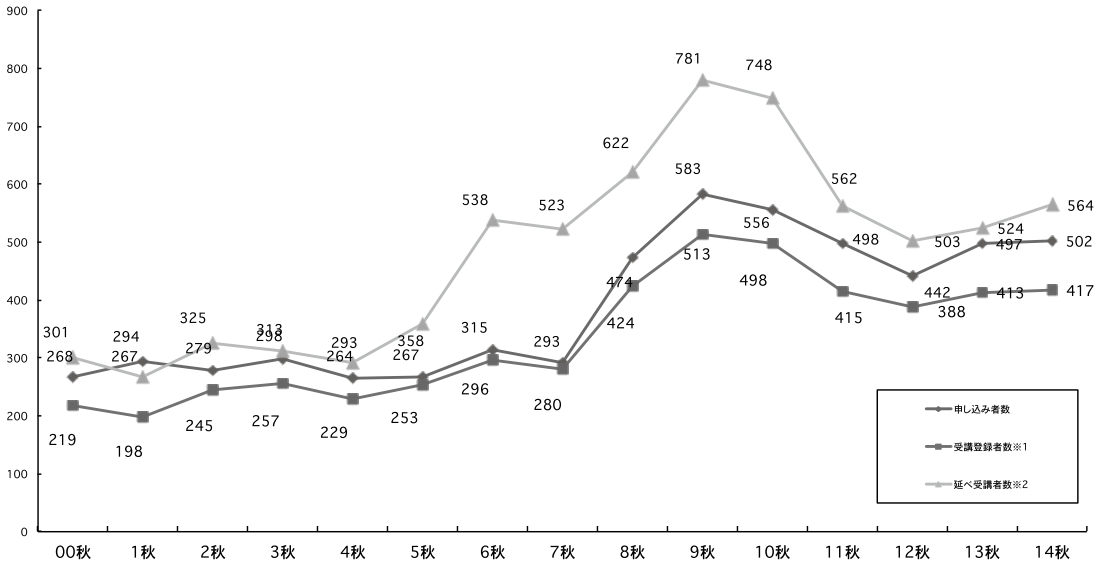


図１ 秋学期の JLCs 受講者の推移

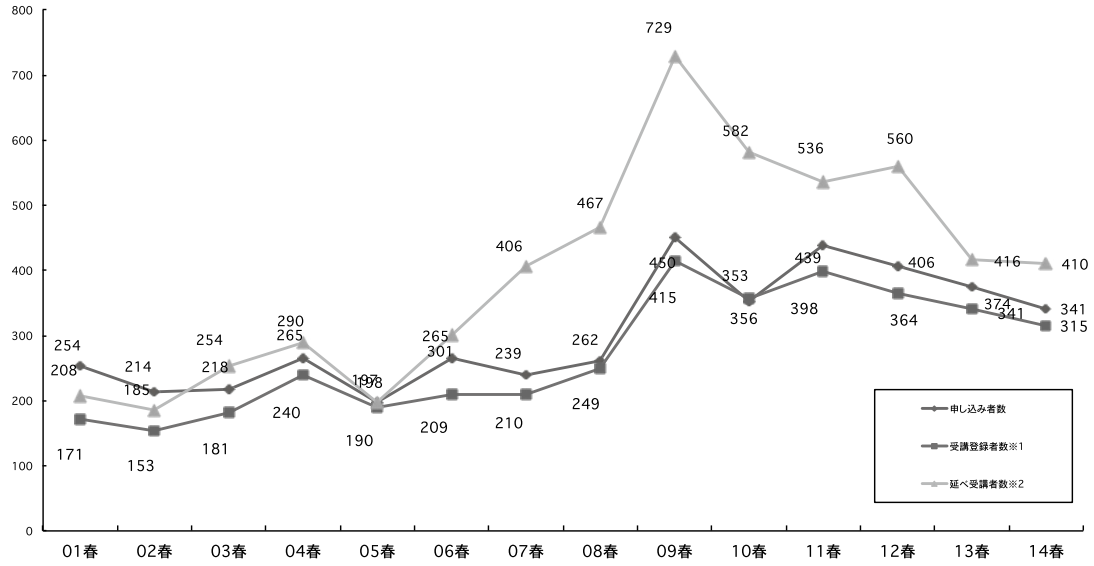


図２　春学期の JLCs 受講者の推移

秋学期は2008年以降学生数の減少傾向が見られ、450～550名程度の学生数が続いていたが、2013年度以降、増加傾向を示しており、2014年秋学期には４年振りに申し込み者数で500名を越えた。春学期は図２にしめしたように、2009年以降、学生数の漸減が続いているが、今期の増加から予測すると、来年度、2015年の春学期には再度増加する可能性がある。

2008年～2010年にかけて爆発的に受講者数が増えたことから、2011年春には入学年度１年以内の学生のみ受講可能という受講制限（年次制限）を設け、受講者数の制限を行い、2011年秋学期には留学生センター所属の学生以外については、選択できるコース数を２コースから１コースのみに制限するという対策を行った。そのため、受講申し込み者数、受講登録者数に比べて、延べ受講者数は大幅に抑制され、2008年～ 2010年にみられたような延べ受講者700名というような事態は回避できている。しかし、2014年秋学期に延べ受講者が2011年秋学期の水準にまで戻っているということは今後の懸念材料であり、留学生センターの学生収容数に収まるような受講者数の交通整理を行っていく必要がある。

２－２　受講者の内訳　―所属別―

受講者の内訳として、所属別に春学期と秋学期の別に表５にまとめた。

表５　2014年度 Round1（春学期）所属別の内訳

	箱崎	伊都
システム情報科学府	1	16
システム生命科学府	5	6
医学部・医学系学府	9	
経済学部・経済学府	23	
芸術工学部・芸術工学府	16	
工学部・工学府	3	37
歯学部・歯学府	4	
人間環境学府	23	
生物資源環境科学府	36	
地球社会統合科学府	1	1
統合新領域学府	12	
統合理工学府		
農学部	7	
比較社会文化学府	3	2
文学部・人文科学府	19	
法学部・法学府	31	
薬学部・薬学府	1	
理学部・理学府	5	
数理学府		3
教育学部	2	
留学生センター	76	
計	277	65
総計	342	

2014年度 Round3（秋学期）所属別の内訳

	箱崎	伊都
システム情報科学府	5	29
システム生命科学府	4	2
医学部・医学系学府	5	
経済学部・経済学府	39	
芸術工学部・芸術工学府	15	
工学部・工学府	3	62
歯学部・歯学府	6	
人間環境学府	30	
生物資源環境科学府	41	
地球社会統合科学府	12	6
統合新領域学府	9	
統合理工学府	2	
農学部	11	
比較社会文化学府	1	
文学部・人文科学府	14	
法学部・法学府	37	
薬学部・薬学府	1	
理学部・理学府	6	
数理学府		6
教育学部		
留学生センター	74	
計	315	105
総計	420	

２－３　受講者の内訳　―身分別―

受講者の内訳として、所属を留学生センター（JTW、JLCC、研修、日韓、広州市）と補講対象の部局学生の２グループに大別し、その身分ごとの数を、春学期と秋学期の別に表６にまとめた。近年、特に伸びが著しいのが各部局が受け入れた研究生である。特に、秋学期は突出して研究生の数が多くなっている。秋に来日し、年末、或いは年明けに大学院等の試験を受け、合格すれば、九州大学か他校へ移っていくため、春学期は秋学期よりも減少するが、全体の流れとしては春学期も増加傾向にある。

表６　2014年度 Round1（春学期）身分別の内訳

	箱崎	伊都
JTW	50	
研修コース	6	
JLCC	20	
日韓プログラム	−	
広州市	1	
交換留学生	28	11
修士	76	11
博士	48	32
研究生	45	10
その他の身分	3	1
計	277	65

2014年度 Round3（秋学期）身分別の内訳

	箱崎	伊都
JTW	39	
研修コース	6	
JLCC	21	
日韓プログラム	7	
広州市	1	
交換留学生	32	18
修士	76	19
博士	40	29
研究生	91	39
その他の身分	2	
計	315	105

２－４　受講者の内訳　―出身地域別―

表７は、受講者を出身地域で大別し、主だった国籍別で分けたものである。中国が圧倒的に多く、常に４割を占めている。しかし、留学生センターの各コース（JTW、JLCC、研修）においては必ずしも中国が多数ではなく、補講生として修士、博士、研究生のうちの中国の比率が非常に高く、以下のような結果になった。

表７　出身地域別の受講者の内訳

国籍（アジア）	春学期	秋学期
中国	113	177
韓国	25	32
インドネシア	25	20
ベトナム	12	14
タイ	9	8
アフガン	3	6
バングラデシュ	6	6
マレーシア	10	6
モンゴル	2	6
カンボジア	5	5
フィリピン	5	5
台湾	5	5
トルコ	1	3
スリランカ	2	3
ミャンマー	4	3
ラオス	2	3
ヨルダン	2	2
ネパール	1	2
インド		2
ウズベク	1	2
香港	3	2
シンガポール	2	1
グルジア		1
アラブ	1	
イラン	1	

国籍（米大陸）	春学期	秋学期
アメリカ	13	13
メキシコ		3
ブラジル	6	11
ペルー	4	2
アルゼンチン	2	1
エルサルバドル		1
チリ	1	1
パラグアイ	1	1
ホンジュラス		1
カナダ	1	
国籍（欧州）	春学期	秋学期
ドイツ	10	14
フランス	20	11
英国	6	8
スウェーデン	8	7
スペイン		3
ロシア	3	3
オランダ	1	2
デンマーク		2
ベルギー	4	2
スロバキア		1
ルーマニア		1
イタリア	2	
オーストリア	1	
スロベニア	1	

チェコ	1	
ポルトガル	1	
国籍（アフリカ）	春学期	秋学期
エジプト	3	4
ケニア		3
モロッコ	1	3
ルワンダ		3
ウガンダ	1	1
ギニア		1
ジンバブエ		1
タンザニア		1
ナイジェリア	3	1
国籍（大洋州）	春学期	秋学期
オーストラリア	3	1
パプアニューギニア		1

3． 今期の改革事項

3－1 補講生に対するコース制限

2011年春学期までは留学生センター所属以外の補講学生が２つの日本語のコースを取ることができたが、延べ受講者数の多さは留学生センターの受容能力を大きく上回っていたことから、2011年秋学期より、留学生センター所属学生以外の補講生については、１コースのみの受講を許可することとした。その結果、延べ受講者数は、2011年秋学期より、500名強に抑えることができ、年次制限よりも、確実な効果が得られた。しかし、補講生の９割がＪコースを取っているという現状から、わずか１割の技能コース（K、S、W、Ｒコース）を受講する補講生に対する作業が、作業の重みに比して成果が少ないことが感じられるようになってきた。また、複雑な受講手順を各部局からの補講生に課すには困難な面が多く、プレースメントテストのたびに多くの問い合わせが事務に寄せられるという状態であった。また、複雑な手順のため、プレースメントテストに失敗する学生も少なくなかった。このような問題点から、2014年秋学期より、補講生はＪコースのみに選択制限を行うこととなった。この結果、従来、W8やR7などの上級クラスを選択しながら、J2判定を受けて全てのクラスを失うようなケース、Ｓコースを希望したのにインタビューテストに来ずにクラスを得られないケース等、様々なプレース漏れの補講生をほぼ全てＪコースで救うことができた。

3－2 コースの改編

コースとしてはここ数年来、初級の方へシフトした改編が続いている。この背景には、予算の縮小から、留学生を支援できる範囲が限られて来ていることがあり、上級についてはJLCsでは補助をせず、留学生センター生の場合は各コースの中の専門科目を中心に受講することによって日本語力を補強することとし、補講生の場合は、元々、日本での最低限度の生活保障という基本ラインに則って、J4以上のクラスへの配置を考慮しないような方向に進んでいる。従って、伊都JLCsについてはJ4が秋学期からなくなっている。

4． まとめ

九州大学留学生センターは来年度の秋学期に伊都キャンパスへのメイン部分の移転を計画している。従って、移転のために現行のコースを大幅に改編する必要性が生じて来る。この移転に関する改編の内容については、積極的に日本語教育部門内で議論が続けられているが、まだ十分に議論が詰まっていない。大きな方向性としては、補講コースのコース内容を簡略化しクラス数を多くするようにすることによって、増加する補講の留学生をコースに受容できるように改編していくこと、恒常的に学生数の少ない技能コースの箇所を改編して行くことは移転とは関係なしに行わなければならない。その中で、移転と組織改編の両方を考慮した改革を進めて行く必要があり、来年度は本格的にその作業に取り組む予定である。

参考文献

大神智春（2010）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第19号、pp.57-70.
大神智春（2011）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第20号、pp.85-96.
斉藤信浩（2012）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第21号、pp.39-51.
斉藤信浩（2013）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第22号、pp.223-233.

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，233－235
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 233-235

ソウル大学校生のための日本語上級集中プログラム

Kyushu University Intensive Japanese Courses for advanced level students from Seoul National University

斉　藤　信　浩*

西　原　暁　子**

１．概要

九州大学で行われているソウル大学校生のための日本語上級集中プログラム（Intensive Japanese Courses for advanced level students from Seoul National University）は通称ソウル大プログラムと呼ばれ、ソウル大学校の要請により2007年度後期の第５週目の１月より始まったプログラムであり、留学生センターの受託事業として同大の日本語上級レベルの学生に対して日本語の集中トレーニングを行うものである。運営事務は国際交流推進室が担当し、日本語の授業は留学生センターの日本語教育部門が担当している。2013年度は2014年１月６日より１月25日までの３週間を受け入れ期間とし実施された。これは韓国の旧正月が2014年は１月31日からであり、その日程と被せることができなかったため、例年は４週間の受け入れであるが、本年度は３週間の受け入れとなった。

このプログラムは日本語上級者が短期の日本滞在によって上級の日本語力の訓練を目的とした日本語上級集中プログラムである。受け入れ学生数は９名（男３名、女６名）であり、ソウル大学アジア言語文明学科から選抜された学生である。

２．簡易オンライン受験システムの実施

2012年度よりプレースメントは九州大学留学生センターが保有する簡易オンラインプレースメントシステムにより行っている。2013年度は12月第一週末に開放した。このシステムにより、来日直後の疲労と逼迫した日程の中、プレースメントテストを受験しなくても済むのである。ところが、2012年度はほぼ成功裏に進めることができたが、2013年度はソウル大学の学生にオンラインテストを受験しなければならないという意識が低く、期限になっても受験を完了させない者が多発し、期限内に受験したのが１名だけという惨憺たる状態であった。そのため、その後、２回にわたってソウル大学へ注

*九州大学留学生センター准教授
**九州大学国際交流推進室准助教

意を促し、９名の受験が完了したのは12月末であった。この簡易オンラインプレースメントテストは短期コースである、ATW、AsTW、ソウル大プログラム、マヒドンプログラムなどで活用され、来日前のレベル判定に大きな力を発揮して来たが、今期のようなことでは、使用せずに来日後、学生に直接紙ベースで受験させた方が効率が良いということになってしまう。来年度以降は紙によるプレースメントに戻すということも計画しなければならない。

３．コース内容

３－１　2013年度のクラス開講にあたって

２クラスを選択無しの必修科目として開講した。それに加えて、JLCsコースで既に開講されている日本語技能コースのK6、K7、K8、W7、W8、R6、R7の７クラスに途中参加として接続する形で、これらの７科目も選択科目として用意した。前年度までは事前にはK6は用意されていなかったが、今年度からは予めK6にもソウル大生を編入させることにした。これはやはり漢字の能力に幅があり、比較的漢字力の低い学生が来ていたことからこのような措置を取った。今年度は、選択科目ではあったが、ソウル大学の引率者の指示で、Kコース、Rコース、Wコースの全てを受講させることとなり、必修科目と合わせて、全ての学生が５科目を履修することになった。

３－２　各クラスの概要

各クラスの概要は以下の通りである。全受講者数はソウル大生を含めた当該クラスの受講者数である。本学の日本語コース（JLCs）は定員18名以内の少人数で運営されており、ソウル大生の参加したコースでも少人数での教育を用意してある。

必修科目

科目名		受講者数
上級日本語	四コマ漫画に見る日本	9名
	人と社会を考える	9名

選択日本語（日本語技能コース）

科目名		ソウル大生数	全受講者数
漢字	K6	4名	12名
	K7	3名	16名
	K8	2名	5名
読解	R6	5名	18名
	R7	4名	14名
作文	W7	7名	17名
	W8	2名	12名

3－3　成績評価

2011度まではソウル大学において単位認定がなされていたが、2012年度より単位認定がなくなった。2012年度は授業担当教員から、2011年度の学生と比べて一部の学生の意欲の減退が明らかに感じられたという報告があったが、今年度、2013年度の学生については学習意欲も学習態度も非常に良く、出席・授業参加共に優秀な成果を収め、９名全員が成績不認定にはならず、B～Aの成績評価を得ることができた。

4．課題について

2011年度から2012年度にかけては、ソウル大学の側で主管する部局の変更と、単位認定が無くなり、引率者も不在になるという大きな変化があり、その後のプログラムに不安があったが、2013年度に新体制で２年目を迎えるにあたって、引率者を要求した結果、引率者が設けられることとなり、学生管理の面における不安は拭われた。今後、引率者が継続的に同伴してもらえるかどうかは不明であるが、九州大学側としてはこの要求は続けて行くつもりである。九州大学がソウル大学プログラムの事業を受諾した背景には、引率業務の一切を九州大学側で担当せず、ソウル大学の側が引率者を用意するという条件があったためである。引率者が不在であった年度のプログラムにおいては、学生の学習意欲、学習態度に他の年度と比べて明らかな差異が見られ、病気等の正統な理由無く授業を欠席するなど、規律の乱れも生じた。ソウル大での単位認定が無くなったこともおそらく影響していると思われるが、学生が旅行気分に流れ、学習に集中しなくなっては、受託プログラムとしての成果に大きく影響する。短期集中のプログラムでは受入側コーディネーター、各クラスの担当教員、オフィス担当者の指導できる範囲は限られており、学生と同じ宿舎に寝起きして生活全般を管理する引率者の存在は大きく、プログラム運営に引率者は必須と認識している。

2012年度に続き、2013年にもJASSOの奨学金を申請したが、同奨学金は単位認定を行うことが採否の大きなポイントであり、本プログラムは単位認定制度がなくなったということが影響してか、2013年度は不採択となった。そこで本学からは、JASSO奨学金の採択を目指し、ソウル大での単位認定について派遣側コーディネーター（ソウル大学校アジア言語文明学科教授）に打診していたが、単位認定を行う可能性は無いとの回答であった。また引率者からの情報により、少なくとも2013年度においては、ソウル大学から本学に納入される受託経費以外の部分（学生の渡航費や福岡での通学費用）も全てソウル大学の予算で運営され、ソウル大生は当プログラム参加にあたって一切の支出がなく、奨学金が不要であったということが分かった。そこで、2014年度以降、JASSO奨学金の申請は不要と判断し、申請は行っていない。

2013年度は前年度まで実施していた社会科見学を行わなかった。これは冒頭でも述べたように、滞在期間が３週間と短くなったため、その間に週末が２回しか無かったため、ソウル大学側との相談の結果、社会科見学は入れないという判断を下した。今後はプログラムで提供される授業をどのようにより良いものにしていくのか、また課外活動などを行うべきかどうかなど、その中身についてソウル大学と共に検討を進め、ソウル大学との信頼関係を維持しながら、プログラムの充実を図っていきたい。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，237－244
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 237-244

日本語研修コース

大　神　智　春*

１．はじめに

日本語研修コース（以下研修コース）は、大学院に進学する予定の国費研究留学生を主な対象として、来日後の半年間日本語予備教育を行うコースである。研修コースでは、初級からの日本語教育、日本事情教育、専門教育の場への適応を促進するための活動、の３点を予備教育として行っている。目標は「会話を中心とした初級日本語を習得させること」、「研究の場において日本人と円滑にコミュニケーションができるようにすること」である。以下に平成25年度（2013年度）の実施状況を報告する。

２．実施概要

平成25年度研修コースの実施時期、主な日程は下記のとおりである。

１）実施期間　前期　４月８日－９月６日（第57期）
　　後期　10月４日－３月７日（第58期）

２）主な日程

①前期

開講式	４月８日
授業開始	４月15日
見学旅行（熊本城・阿蘇山）	４月27日
健康管理についての講義（健康科学センター：丸山徹）	５月15日
見学旅行（太宰府）	６月１日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	７月１日
書道の授業（学外講師）	７月17日
発表会（文集『世界の輪』46号に収録）	８月７日
日本人学生との交流会（留学生センター指導部門：高松里）	８月９日
閉講式	９月６日

*九州大学留学生センター准教授

②後期

開講式	10月４日
授業開始	10月15日
健康管理についての講義（健康科学センター：丸山徹）	11月８日
見学旅行（太宰府）	11月10日
見学旅行（熊本城・阿蘇山）	11月22日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	２月３日
発表会（文集『世界の輪』47号に収録）	２月19日
日本人学生との交流会（留学生センター指導部門：高松里）	２月21日
閉講式	３月７日

３）受講者

受講者は、文科省の国費外国人留学生のうち九州大学および北部九州地区の大学へ配属された研究留学生、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生（後期のみ）、学内募集に応募した九州大学の留学生である。

①前期　16名

全員国費外国人留学生である。前期は初級が14名、中級２名であった。既習者は「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」で３種類のクラスを受講した[1]。

出身：カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、エルサルバドル、パラグアイ、ブラジル、アイスランド、スペイン、イエメン、ケニア、コンゴ、ウガンダ

進学先：九州大学16名

②後期　４名

２名が福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生、２名が学内募集に応募した九州大学の留学生である。

出身：エジプト、中国、マレーシア、チリ

進学先：九州大学２名、福岡教育大学２名

４）時間割

①４月16日～７月19日（第１ラウンド・第２ラウンド）

10月15日～１月31日（第３ラウンド・第４ラウンド）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00		J1		J1	J1
3	13:00-14:30	J1	文化	文化	文化	文化
4	14:50-16:00	J1	S1	K1	S1	K1

1　JLC ホームページ　http://jlc.jimu.kyushu-u.ac.jp/jlc/placement/PCampusSelect.aspx　を参照

第１ラウンド～第４ラウンドはJLCsと同じ日程となっている。開講時期をJLCsに合わせることで、既習者が授業を取る際負担にならないようにするためである。また、JLCsに開講時期を合わせることでフィールドトリップの日程を無理なく組めるようにしている。

②７月22日～８月９日（夏季ラウンド）
　２月３日～２月21日（冬季ラウンド）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00-14:30	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備
4	14:50-16:00	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備

JLC の第２ラウンドおよび第４ラウンド終了後に夏季ラウンドおよび冬季ラウンドを開始し、J2終了程度の内容まで学習した。同時に、最終発表に向けての準備を同時進行で行なった。

３．授業内容

１）授業時間数
前期・後期：全17週間　合計299時間

２）使用教材

J1	：『初級日本語げんきⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき　ワークブックⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
J2	：『初級日本語げんきⅠ』『初級日本語げんきⅡ』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき　ワークブックⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき　ワークブックⅡ』	坂野永理他	The Japan Times
K1	：『初級日本語げんきⅠ　読み書き編』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
S1	：『初級日本語げんきⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
文化	：自習作成教材		

３）授業内容
初心者レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。
J1　：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。教科書の第１課から第８課がJ1に該当する。

J2 ：J1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にJ2に入る。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。教科書の第９課から第15課が学習範囲である。

S1 ：J1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。

K1 ：ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習（J1クラス）の進度の後を追う形ですすめる。

文化：①日本の大学や日本社会での生活に適応できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の３点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や小学校訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。

４．研修生からの評価

毎学期、コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施している。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。

１）研修生による評価

①前期　８月９日実施　　回答者：16名（初心者14名・既習者２名）

a. 日本語のクラスに関して

＊数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	10	5	1	0	0	0
S1	5	10	1	0	0	0
K1	9	6	1	0	0	0
文化	10	5	1	0	0	0

- テストと宿題は十分な量だった。先生方はとても親切で忍耐強く指導してくれた。先生方の授業の準備が完璧だった。
- 授業のスピードが少し速かったように思う。何度か文法と語彙の要点を逃してしまった。

b. もっと勉強したいこと（複数回答可）

文法	会話	漢字	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	発音	単語	読解	筆記	文化	ｽﾋﾟｰﾁ	その他
8	11	4	5	4	2	4	0	4	4	0

c. 授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1）熊本・阿蘇旅行	12	3	0	0	0	1
2）大宰府見学	11	3	1	0	0	1
3）小学校訪問	13	2	0	0	0	1

- 日本文化を知るきっかけとなった。
- 熊本、大宰府見学では、日本の文化やしきたりを多く学んだ。小学校訪問を通して、いかにして日本がこれほど発展したのか理解できた。

d.「最終発表会」について

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
4	8	3	0	0	1

- 最終発表はこのコースの中で最も力がついた。専門用語を学び、今後に役立つと思う。
- 文章の組み立てと日本語でのプレゼン法を学べた。
- 人前に立って日本語でプレゼンしたことは自信になった。
- とても有意義だったが、専門用語を学習するには時間が足りなかったと感じる。結局それらを暗記するか、読むかをしても役立つかはわからない。
- 暗記の時間を他の活動に使ったほうが有意義と感じる学生もいると思う。

e. コースに対する満足度

100%	2	平均88%
90%以上	7	
80%以上	5	
70%以上	1	

f. コースへの提案

- J2の部分がもっとじっくり学べたら良かったと思う。
- 学生に単語や対話を暗記させる方法には疑問を感じた。言語は自然な方法で学ぶべきで、学生が日常生活の中でいろいろな場面に遭遇し解決しながら習得していくのが本来ベストな方法である。
- 日本の生活の中で、色々な手続きや、研究室関連の用事があるので（アドバイザーに会うなどの）、週１日は自由に自分の用事に使える日があれば便利だと思う。

②後期　２月19日実施　　回答者：４名（全員初心者）

質問１：日本語のクラスに関して

a. 日本語のクラスに関して

＊数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	3	1	0	0	0	0
S1	4	0	0	0	0	0
K1	3	1	0	0	0	0
文化	3	1	0	0	0	0

- 日本語は難しい言語だと思う。もっと時間をかけて勉強したかった。
- 会話と漢字の授業がもっと多いほうが良かった。
- 文法の説明がとても良かった。もう少し練習の時間があればなお良かった。

b. もっと勉強したいこと（複数回答可）

文法	会話	漢字	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	発音	単語	読解	筆記	文化	ｽﾋﾟｰﾁ	その他
0	3	2	2	2	1	2	1	1	2	0

c. 授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1）熊本・阿蘇旅行	3	1	0	0	0	0
2）大宰府見学	2	1	1	0	0	0
3）小学校訪問	4	0	0	0	0	0

- 小学校訪問はとても興味深かった。予備校や高校も訪問してみたい。

d.「最終発表会」について

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
2	1	0	1	0	0

- たくさん練習したので、日本語が上手になった。
- ストレスが大きかった。
- 人前で日本語話す度胸がついた。

e. コースに対する満足度

100%	0	平均87.5%
90％以上	2	
80％以上	2	
70％以上	0	

f. コースへの提案

- 会話と漢字の授業がもっと多いほうが良かった。
- 研修コースではどのように日本語を教え、学習者はどのように学ぶのか、一番初めに説明あればよかった。自国でのやり方との差に戸惑うことがしばしあった。

２）評価のまとめ

日本語クラス・授業以外の活動・最終発表会ともに、研修生の評価は高かった。コースに対する満足度も前期・後期ともに90％近いことから、ほぼ研修生の希望に沿う形でコースを展開することができたと言える。

自由記述のコメントについても大多数がコースや教師への感謝や肯定的なものであったが、評価の高低だけでは判断することができないコメントも複数あった。

日本語クラスに関しては、特に文法クラスに関して、授業進度が速いというコメントが見られた。目標とする到達レベルに至るためにはこれ以上進度を遅くすることができないため、今後は十分な時間を取るべき学習内容と理解すればいい程度の学習内容で学習進度を変えるなどしてメリハリをつけ授業を進めていく必要がある。

最終発表会に関しては、「やってよかった」というコメントが大多数であった。しかし一方で、発表原稿を暗記するか読むだけでは今後の役に立たないのではないかという意見や、暗記する時間を他の活動に使ったほうが有意義だという意見も見られた。最終発表会は、研修生の研究テーマについて日本語で説明するというものであり、初級レベルの学習者にとってはかなり難易度の高い課題である。そのため、研修生は教師の力を借りながら未習文法を盛り込んだ原稿を書き上げていく。発表ではこの原稿を見ることなくプレゼンテーションを行うことが求められるため、暗記の必要性が生じる。このとき、自分が十分に意味理解していない文を文字列の集合体として暗記するだけでは確かに効果はないであろう。しかし、内容や文法を理解しながら暗記するのであれば自分の日本語力アップにつながる。今後、学習の段取りと方法を更に丁寧に説明しながら発表準備を進めていく必要があると考える。

この他に、自由記述のコメントには書かれていなかったが、宗教的な信条の違いから、文化クラスにおける日本の伝統文化学習に困難を示す研修生がいた。昨年度まではそのような研修生はいなかったので、改めて、そのような学生に対しどのように対応するべきかを考えさせられるとともに異文化を尊重することの大切さを感じた。

5．今後の課題

今後の課題として、2013年度は以下の２点をあげる。

①前期と後期の研修生数の差について

例年、入学試験の時期の関係で、前期は研修生数が多く後期は少なくなるという傾向がある。そのため後期は学内に所属する私費留学生も受講対象とし幅広く学内募集をかけている。本年度

は前期の研修生は16名、後期は学内募集生も含め４名のみであり、前期と後期の差が顕著に現れる結果となった。例年、後期の受講者数が少なくなるといっても、学内募集生も入れて10名近く研修生が集まっていたことから、４名という数字が意味するものを検討する必要がある。2010年度からG30プログラムが開始し英語による授業の受講および英語論文執筆により学位が取得できるようになったことが影響している可能性もある。あるいは学内募集の通知方法に問題がある可能性もある。学習者数減少の原因と捉えられる要因を慎重に検討したうえで、コース運営をどのようにするべきか適宜対応していく必要がある。

②最終発表について

昨年度からの課題を受けて、今年度は学習者ができるかぎり自力で日本語の原稿を書き上げられる内容および構成にした。その結果、大多数の学生が多少教師の力を借りながらも発表内容を組み立てていくことができるようになった。しかし発表準備は個人作業でありどうしても作業速度に個人差が出るため、早く終わった学生への対応に課題が残った。例えば早く終わった学生たちで発表練習をしたりペアで質問をしあったりするよう指示したが、お互いの発表内容の専門用語が理解できず、学生だけでの練習がスムーズに進まないことがあった。来期に向けては、学生が発表準備でやるべきことを更に明確に指示するとともに、作業が早い学生への指導も十分に行えるよう教員配置や作業内容を検討していく必要がある。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，245－246
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 245-246

広州市研究生プログラム

大　神　智　春*

１．はじめに

広州市研修生プログラムは、福岡市と中国広州市との友好都市交流の一環として1984年度（昭和59年）に開始された。毎年１名の研究生が広州市から派遣され九州大学の留学生センターで日本語を学習するとともに、福岡市の市役所で実務レベルの研修を行っている。

２．概要

２－１　プログラム実施期間

2007年度（平成19年度）までは研修期間は半年間であったが、2008年度より１年間となった。2013年度の研修期間は2013年４月１日から2014年３月31日までである。

２－２　プログラムの内容

派遣される研究生の日本語レベルはゼロ初級から上級レベルまで年によって異なる。そのため、毎年派遣されてきた研究生の日本語レベルを診断し、研究生にあった１年間のカリキュラムを組み立てている。以下は2013年度（平成25年度）の研究生についての報告である。

２－３　2013年度（平成25年度）の広州市研究生プログラム

広州市からの研究生は当センターが提供している Japanese Language Courses (JLCs)[1]から日本語の授業を受講することになっている。

2－3－1　2013年度（平成25年度）春学期

１）受講したコース：J1（初級入門総合日本語コース）

２）①使用教材：『An Integrated Course in Elementary Japanese　げんき　Ⅰ』

②『An Integrated Course in Elementary Japanese　げんき　Workbook Ⅰ』

---

*九州大学留学生センター准教授

1　JLCs は九州大学に所属する留学生であれば受講できる日本語コースである。

2－3－2　2013年度（平成25年度）秋学期

日本語コースの制度上の関係で春学期に１種類の日本語のコースしか受講することができなかったため、より集中的に日本語力を高めることを目的とし、秋学期は日本語研修コースに編入した。

１）受講したコース

①J3　（初級２総合日本語コース）

②S2　（初級２会話コース）

③K3　（初級２漢字コース）

④文化

２）使用教材

①J3　：『An Integrated Course in Elementary Japanese　げんき　Ⅱ』

②S3　：『聞く・考える・話す　留学生のための初級日本語会話』

③K3　：『Basic Kanji Book vol.1』

④文化：自作教材（プリント、DVD など）

2－3－3　学期末のレポート

原則として毎年文献講読を行い、日本語の文献を読むことで日本語力を磨き、日本社会や日本文化への理解を深めている。文献講読においては研究生が自分の興味や関心があるテーマを選び、１年間かけてそのテーマに沿った文献を講読していく。

しかし、2013年度の研究生は日本語未習者で日本語の文献を読むことができなかったため、代替対応として前期と後期の学期末にレポートを提出させた。レポートのテーマは、「日本文化について新しく学んだこと、日本に来て気が付いたこと」である。レポート提出は、研究生が日本の自分の体験をもとに書くことができる内容であるため、経験や出来事を客観的に見つめなおすことができるという点で効果があったと考える。

2－3－4　面談

１か月に１度面談を行い、日本での生活や大学の授業で問題等がないか定期的に確認した。この定期的な面談は研究生の生活状況や日本語学習状況をきめ細かく把握し状況に応じて適切な対応をする上で効果があった。

３．今後の課題

今年度の研究生はそれほど英語ができるわけではなく日本語も未習であったため、指導教員とのコミュニケーションが円滑に進まないことがあった。特に、春学期に所属した Japanese Language Courses（JLCs）と秋学期に参加した日本語研修コースとの違いが十分に伝わらなかった。そのため、両コースの開講期間が違うことを研究生は十分に理解できず、中国の春節の時期に日本語研修コースを欠席して帰国してしまうことがあった。

今後、日本語および英語でのコミュニケーションが困難である研究生を受け入れる場合は、中国語の通訳を準備するなどして適宜対応していく必要がある。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，247－249
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 247-249

基幹教育の日本語

金　　班　実*

鹿　島　英　一**

1．はじめに

平成25年度以前に入学した学生に対する「全学教育」は、平成26年度以降に入学した学生は「基幹教育」に切り替わった。基幹教育では、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養（かんよう）こそが学問追求の基本であるという観点に立ち、自ら問いを立て主体的な学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することを目標として掲げている。基幹教育院のマネジメントのもと、全学出動態勢で教育が行われている。学部留学生が対象の「日本語」は、基幹教育院教員を班長とする日本語班において、留学生センターの日本語教育部門の教員と連携して、授業運営を行っている。

カリキュラム改正の過度期にある本年度は、25年度以前に入学した学生には「全学教育科目」、26年度に入学した学生は「基幹教育科目」が開講されているが、「日本語」は両カリキュラムにおいても、言語文化科目・言語文化基礎科目に分類されている。なお、「日本語」の履修対象となる留学生数は２年生が46名、１年生が44名である。

2．平成26年度の学習内容及び履修方法

今年度は、一年生は「基幹教育科目（日本語Ⅰ～Ⅳ）」、二年生以上は「全学教育科目（日本語Ⅴ～Ⅵ）」となっている。「日本語」を細分類すると以下のようになる。

科目名	単位数	授業概要
日本語Ⅰ	1	日本語の総合基礎を学ぶ。
日本語Ⅱ	1	日本語の聴解・読解
日本語Ⅲ	1	日本語の作文
日本語Ⅳ	1	日本語の会話・発表
日本語Ⅴ	1	長文などを読んで、要約する技法を学ぶ。
日本語Ⅵ	1	専門分野のレポート作成などの技法を学ぶ。
日本語Ⅶ	1	学術的な口頭発表などの技法を学ぶ。

* 九州大学留学生センター講師
**九州大学留学生センター教授

基幹教育科目では、基本的に第１・第２外国語の選択は、従来と大きく変わった。要するに、大半の学部では「日本語」は第２外国語（文科系５単位、理科系４単位）に変わったのである。留学生については、概ね以下のようである。

卒業必要単位数	基本的な単位の取り方		
	１年前期	１年後期	２年前期
２単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから ２単位分履修		
４単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから ２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから ２単位分履修	
５単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから ２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから ２単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから １単位分履修
６単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから ２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから ２単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから ２単位分履修
７単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから ２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから ２単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから ３単位分履修

なお、学部・学科別の第１・第２外国語の指定及び修得単位数は以下のようになっている。

学部	区分	履修言語	１年次	２年次以降	修得単位数
文学部 右の２パターンから選択	第１外国語	英語	4	3	7
	第２外国語	初修外国語	4	1	5
	第１外国語	初修外国語	5	2	7
	第２外国語	英語	4	1	5
教育・法・経済学部	第１外国語	英語	4	3	7
	第２外国語	初修外国語	4	1	5
理・医・工（建築学科以外）・芸術工・農学部	第１外国語	英語	4	4	8
	第２外国語	初修外国語	4	0	4
歯・薬・工学部（建築学科）	第１外国語	英語	4	6	10
	第２外国語	初修外国語	2	0	2
21世紀プログラム	第１外国語	英語	4	2	6
	第２外国語	初修外国語	5	1	6

留学生の第１・第２外国語の選択では、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語・スペイン語の七つの言語と日本語の中から選択できる。なお、日本語を第１・第２外国語に選択した場合は所属学部・学科の卒業単位数を満たすように履修しなければならないとしているが、特例として、所属学部が認める場合は、英語を第１外国語に指定する学部・学科においても英語を第２外国語とし、英語以外の言語を第１外国語にすることができる。また、その場合は、第１外国語と第２外国語のそれぞれの修得単位数を定めず、両者を合わせて12単位を修得することができるとしている。

第１・第２外国語の履修の特例を認める学部は、教育、法、理、医、薬、工、農、21世紀プログラ

ムである。文、経済、芸術工については、特例のケースは認めていない。

このような複雑な履修方法のため、学務部基幹教育課と留学生センターの日本語教育部門・留学生指導部門は共同で従来、新入生オリエンテーションで、留学生のみを集めて履修解説を行っている。

本年度の「日本語」の担当教員は、留学生センターの教員２名と芸術工学部の教員１名、非常勤講師１名（基幹教育院枠）である。

以下は時間割表に基づく、学習内容と受講者（学部別）である。

前期							
１年生対象（基幹教育）				２年生対象（全学教育）			
月	２限	日Ⅱ	農・工学部	月	１限	日Ⅴ	農・理学部
	３限	日Ⅱ	経済・文・理学部	水	４限	日Ⅵ	理学部
火	２限	日Ⅱ	芸術工・医・理・工学部	金	４限	日Ⅶ	文・理・経済・歯学部
	３限	日Ⅱ	歯・工学部				
木	２限	日Ⅰ	農・工学部				
	３限	日Ⅰ	経済・文・理学部				
金	２限	日Ⅰ	芸術工・医・工学部				
	３限	日Ⅰ	歯・工学部				

後期			
１年生対象（基幹教育）			
月	２限	日Ⅲ	農・工学部
	３限	日Ⅲ	文・経済・理学部
火	２限	日Ⅲ	芸術工・医・工学部
	３限	日Ⅲ	工学部
木	５限	日Ⅳ	文・理・工・芸術工・農学部
金	５限	日Ⅳ	経済・工・芸術工・農・医・理学部

本年度の講義の場所は、基幹教育と全学教育は共に伊都キャンパスであり、「日本語」は延べ148名が受講している。１年生においては、前期に総合と聴解、後期に作文と会話・発表が、２年生以上においては、要約、レポート作成、口頭発表が履修できるように、カリキュラムを組んでいる。

３．おわりに

留学生の中には、様々な理由で日本語の聴く力、話す力、読む力、書く力のバランスがよくない学生が少なくない。授業などでの課題レポートを書く能力に問題がある学生が散見される。また、「日本語」を第２外国語とした場合、大半は２単位或いは４単位しか必要がなくなる。卒業に向けての専門科目の学習は、日本語の力、特に聴く力と書く力がないとかなり難しいため、現段階のカリキュラムでどのようにしたら日本語の力を集中して強化していくことができるのかが、大きな課題となる可能性がある。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，251－259
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 251-259

学士課程国際コースにおける日本語教育

― 2014年度秋学期の報告 ―

山　田　明　子*

1．コースの概要

文部科学省の「国際化拠点整備事業（グローバル30）」の採択により、本学において、英語のみで学位が取得できる国際コースが、2010年に工学部と農学部に開設された（学士課程国際コース；International Undergraduate Program in English）。留学生センター日本語教育部門は、この学士課程国際コースにおける「基幹教育科目」のうち、「言語文化科目」である「Japanese（日本語）[1]」及び「Business Japanese（ビジネス日本語）」を担当している[2]。本稿では、当国際コースにおける日本語教育の概要、及び、2014年度秋学期における日本語教育の取り組みについて報告する。

1.1．学年暦

学士課程国際コースは、秋入学制度を採用しており、新入生の授業は10月から開始する。学年暦は、基幹教育及び工学部・農学部に従う。

1.2．履修単位

学士課程国際コースにおける「Japanese」と「Business Japanese」の各学部の履修概要は表１の通りである。

表１　「Japanese Ⅰ～Ⅲ」「Business Japanese Ⅰ～Ⅳ」履修概要

	工学部	農学部
１年前期	Japanese Ⅰ A～D（４科目４単位）【必修】	
１年後期	Japanese Ⅱ A～C（３科目３単位）【必修】	
２年前期	(Japanese Ⅲ A～C)	Japanese Ⅲ A～C　（３科目３単位）【必修】
２年後期	Business Japanese Ⅰ（１科目１単位）【選択】	Business Japanese Ⅰ・Ⅱ（２科目２単位）【必修】
３年前期	Business Japanese Ⅱ（１科目１単位）【選択】	Business Japanese Ⅲ・Ⅳ（２科目２単位）【必修】
３年後期	Business Japanese Ⅲ（１科目１単位）【選択】	
４年前期	Business Japanese Ⅳ（１科目１単位）【選択】	

*九州大学留学生センター講師

1　2014年度春学期までの科目名は「Basic Japanese（基礎日本語）」であったが、「Basic Japanese」には中上級レベルの授業も含まれており、「Basic」という科目名と実情が合わないことから、2014年度秋学期より「Japanese」とした。

2　農学部の高年次開講科目に「科学技術日本語」があるが、この科目は留学生センターでは担当していない。

「Japanese」は、工学部・農学部共に低年次必修科目となっており、１年前期に「Japanese Ⅰ」、１年後期に「Japanese Ⅱ」、２年前期に「Japanese Ⅲ」が開講される。「Japanese Ⅰ」では、「Japanese Ⅰ A」～「Japanese Ⅰ D」の４科目、「Japanese Ⅱ」および「Japanese Ⅲ」では、「Japanese Ⅱ・Ⅲ A」～「Japanese Ⅱ・Ⅲ C」の３科目が各学期で開講される。卒業要件に関わる単位数は、学部によって異なる。工学部では「Japanese Ⅰ」および「Japanese Ⅱ」の７科目７単位が必修となっており、「Japanese Ⅲ」は卒業要件には含まれない科目である。農学部においては、「Japanese Ⅰ」、「Japanese Ⅱ」、「Japanese Ⅲ」の10科目10単位が必修となっている。

「Business Japanese」の開講状況は、各学部によって異なる。工学部においては２年後期から４年前期までの学生を対象に開講し、選択必修科目である。科目数は「Business Japanese Ⅰ」～「Business Japanese Ⅳ」の４科目４単位である。授業は週に１コマで、２年前期で受講した学生は「Business Japanese Ⅰ」、３年前期で受講した学生は「Business Japanese Ⅱ」というように、受講する学期によって科目名が決まっている。農学部においては、２年後期から３年前期までの学生を対象に開講し、必修科目となっている。科目数は「Business Japanese Ⅰ」～「Business Japanese Ⅳ」の４科目４単位である。授業は週に２コマで、２年後期で「Business Japanese Ⅰ・Ⅱ」を、３年前期で「Business Japanese Ⅱ・Ⅳ」を履修する。

以上から分かるように、留学生センターは、学士課程国際コースにおける日本語教育を低年次から高年次まで縦断的に担当しており、入学後３年ないし３年半の学生の日本語力の伸びを見据えたカリキュラム及びシラバスを設計している。

1.3. 学生のレベル差への対応

例年、学士課程国際コースの学生の入学時における日本語のレベルは、ゼロ初級レベルから中上級レベルまでと幅広い。その幅広いレベルに対応したコース運営を行うために、表２のような対応を行っている。

表２　日本語のレベル差への運営上の対応

来日前（１年生対象）	・日本語学習歴の把握 ・ゼロ初級者への自習サポート（「ひらがな」「カタカナ」）
来日後（１年生対象）	・プレースメントテストの実施
各学期開始前後（各学年）	・レベルチェック ・個別の学習相談

学生の大まかなレベルを把握するため、入学決定者に対し、事務を通して「日本語学習歴の有無・学習期間・使用テキスト・JLPT 受験歴及び得点」を記入するアンケートを送付してもらい、事前調査を行っている。事前調査の回答を得た後、ゼロ初級者に対しては、授業開始前に実施するプレースメントテストまでに、最低でも「ひらがな」、できれば「カタカナ」まで覚えてくるように連絡をしている[3]。2014年度秋学期に関しては、ゼロ初級者のクラスで使用する教科書、『げんき』の自習用オンライ

3　１期生は「ひらがな」だけを学習してくるようにしていたが、２期生から「ひらがな」と「カタカナ」を学習しておくように連絡をしている。

ンである『げんきオンライン（http://genki.japantimes.co.jp/）』を紹介し、その中の「げんきな自習室」を参考に、プレースメントテストに向けて自分で学習しておくように指示を行った。

そして、来日後の学期開始前に、新入生全員に対してプレースメントテストを実施している。プレースメントテストは、ゼロ初級者と既習者に分け、行っている。2014年度秋学期は、ゼロ初級の学生には「ひらがなテスト（50音を書くテスト）」を実施した後、「カタカナシート」「ひらがな語彙シート（『げんき』Ｌ１の新出語彙を使用）」を配布し、自習をさせた。既習者の学生には、「文法テスト」および「漢字・作文テスト」を実施し、同時進行で個別にインタビューテストを行った。

また、入学時のプレースメントテストによるレベル判定を基準として、学期ごとにクラスのレベルが上がって行くという体制を整えている。しかし、学期間にレベルの変更を希望する学生、また、レベルを変更したほうがよいと教師側が判断した学生、そして、継続的に日本語のクラスを受講しなかった学生には、学期開始前にレベルチェックや個人面談を実施し、できる限り学生の意向・レベルに合わせた授業が受けられるよう対応している。

２．2014年度秋学期、日本語教育・授業実施概要

２.１． 時間割および受講者数

2014年度秋学期に留学生センターが担当している授業は、「Japanese Ⅰ・Ⅲ」および工学部・農学部「Business Japanese Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」である。秋学期の日本語教育の時間割と、2014年10月に入学した５期生を加えた受講者数を表３に示す[4]。

表３　2014年度秋学期 時間割（日本語教育）及び受講者数

	月	火	木
１限目	Japanese Ⅰ・Ⅲ－A（44）	工学部　Business Japanese Ⅱ・Ⅳ（14）	Japanese Ⅰ・Ⅲ－B（44）
２限目	Japanese Ⅰ－D（39）		Japanese Ⅰ・Ⅲ－C（44）
５限目	農学部　Business Japanese Ⅲ（10）		農学部　Business Japanese Ⅳ（９）

※（　）は受講者数を示す。

２.２． 各授業の概要及び、報告と課題

次に、科目・学部ごとに、授業概要、授業の報告と今後の課題について説明する。なお、学生向けのシラバスは、基幹教育のホームページ（「学士課程国際コース・基幹教育科目」: http://syllabus.kyushu-u.ac.jp/907/index_iupe.php）に載せている。

2.2.1. 「Japanese Ⅰ・Ⅲ」

【授業概要】

まず、受講者の内訳について説明する。「Japanese Ⅰ」の受講対象者は１年生26名で、「Japanese Ⅲ」

4　ここで示す受講者数には、受講登録者と聴講生の両方が含まれている。また、農学部の受講者数には、大学院生も含まれている。

の受講対象者は２年生23名である。１年生は全員必修科目であり、２年生も農学部の６名が必修科目となっている。工学部２年生17名は、本学期の授業は卒業要件には含まれないが、12名が受講している。

次に、レベルによるクラス分けについて説明する。本学期は、ゼロ初級レベル（A クラス）・初級後半レベル（B クラス）・中級レベル（C クラス）、中上級レベル（D クラス）の４レベルを開講している。各クラスの受講者数及び使用教科書を、表４に示す。

表４　2014年度秋学期 Japanese Ⅰ・Ⅲ概要

レベル（クラス名）	受講者		主教材 / 学習項目
ゼロ初級レベル（A クラス）	18名	１年生：18名 （ベトナム、インドネシア、タイ、インド、韓国、中国、台湾、フィリピン）	・Japanese Ⅰ A ～ C：『初級日本語 げんきⅠ』、L１～ L12 ・Japanese Ⅰ D：『Basic Kanji Book vol.1』、L １～ L11
初級後半レベル（B クラス）	17名	１年生：３名 （スリランカ、中国、インドネシア） ２年生【農】：４名 （ベトナム、インドネシア） ２年生【工】：10名 （インドネシア、インド、ベトナム、エジプト、中国） ※「Japanese Ⅰ D」の受講者は15名。	・Japanese Ⅰ A ～ C：『初級日本語 げんきⅡ』、L13 ～ L23 ・Japanese Ⅰ D：『初級日本語 げんきⅡ（読み書き編）』、L13・14・17・18・23
中級レベル（C クラス）	6名	１年生：５名 （韓国、中国、インドネシア） ２年生【工】：１名 （インドネシア）	・Japanese Ⅰ A：なし ・Japanese Ⅰ B：『聞いて覚える話し方　日本語生中継 初中級編①』、L１～ L４・L８ ・Japanese Ⅰ C：『中級を学ぼう　中級前期』、L１～ L４ ・Japanese Ⅰ D：『Intermediate Kanji Book vol.1』、L１～ L５
中上級レベル（D クラス）	3名	２年生【農】：２名 （シンガポール、タイ） ２年生【工】：１名 （インドネシア）	・Japanese Ⅰ A：なし ・Japanese Ⅰ B：『日本語上級話者への道－きちんと伝える技術と表現』 ・Japanese Ⅰ C：『留学生のためのストラテジーを使って学ぶ文章の読み方』、L１～ L５

ゼロ初級レベル及び初級後半レベルは、ブロック制を採用しており、週３回×５週（15回分）を１ブロックとしてチームティーチングによる運営を行い、ブロックごとに期末テストを実施し、成績を出している。科目名と対応させるため、ブロック１を「Japanese Ⅰ・Ⅲ A」、ブロック２「Japanese Ⅰ・Ⅲ B」、ブロック３を「Japanese Ⅰ・Ⅲ C」として、単位認定をしている。「Japanese Ⅰ D」は漢字クラスとして独立させ、週１回×15週で授業を行っている。「Japanese Ⅰ D」は１年生を対象とした開講科目であり、２年生は聴講生として受講することになる。

中級レベルは、技能・内容別の授業を４種類開講している。「Japanese Ⅰ A」は、プレゼンテーションやレポートを通して自分の経験・考えを発信し、それをクラスで共有しながら思考を深め、多角的視点を身に付けるという授業である。「Japanese Ⅰ B」は「会話クラス」として位置づけ、機能・場面別会話練習により日本での生活で様々な問題を解決できる日本語力を身に付けることを目標としている。「Japanese Ⅰ C」は「文法クラス」として位置づけ、日本語の表現・文型の運用力・正確さを高めつつ、自分の意見を正確に相手に伝えられるようになることを目標としている。「Japanese Ⅰ D」

は「漢字クラス」として位置づけ、漢字語彙を増やすとともに、漢字語彙学習のストラテジーを身に付け、語彙の運用力を高めることを目標としている。

中上級クラスも、中級レベル同様、技能・内容別の授業を３種類開講している。「Japanese Ⅰ A」は中級レベルと合同で授業を行っている。「Japanese Ⅰ B」では、相手に分かりやすく説明したり、ポイントを簡潔にまとめて話したりする練習を通して、「伝える力」の育成を目指した授業を行っている。「Japanese Ⅰ C」では、日本語の文章を分析し、背景知識を使って文章を理解するという練習を通して、「読む力」の育成を目指した授業を行っている。

また、「Japanese Ⅰ・Ⅲ」では、玄洋小学校の５・６年生との交流学習を行っている。2014年度は、６月に玄洋小学校を訪問し、小学生による日本紹介のワークショップを実施した。また７月には小学生の伊都キャンパス訪問を実施し、留学生側が留学生活・大学生活に関するプレゼンテーションを行った。来年度は今年度の反省を踏まえ、留学生・小学生双方の学びが深まるような交流学習になるよう、引き続き小学校側と打ち合わせを行いながら、活動内容の検討を行っていく予定である。

【報告及び課題】

１年生・２年生の様子を見ていると、サークルや部活に参加したり、アルバイトをしたり、様々なイベントに参加したり、日本人のルームメートとコミュニケーションを取ったりと、教室の外において、日本語に触れ日本語を話す機会を持っていることが分かる。また、日本で生活をする上で、やはり日本語が分からないことに不便を感じ、日本語を勉強する必要性を感じているようである。これらが直接の要因であるかどうかは分からないが、特にゼロ初級レベル・初級後半レベルの学生は、非常に熱心に授業に取り組んでおり、授業中でも休み時間でも、積極的に日本語を話そうとしている様子を目にする。漢字も、興味のある学生は、授業外でも自分で勉強しているようで、宿題にも積極的に漢字を使用している。必修ではなくても２年生のほとんどの学生が漢字の授業を受けに来ていることからも、漢字学習にはニーズがあると言える。

また、中級レベル以上の学生も、はじめて日本で生活する学生にとっては場面・機能別会話の練習に必要性を感じているようである。また、語彙・文法の知識はあるが運用力が低い学生や、カジュアルな会話はできるが、書き言葉や漢字語彙、パラグラフライティングなどに難しさを感じる学生もおり、語彙・文型を使った文完成や作文の練習には必要性を感じているようである。さらに、日本に住んだ経験がある学生や、様々な国や地域で生活した経験を持つ学生もいることから、授業中にお互いの経験を話し合ったり、各自の考えや意見を交換したりする中で、お互いに興味を持つとともに、日本だけでなく他の国のことも知ることで視野を広げる機会となっている様子が窺える。

以上より、本コースにおける低年次開講科目としての日本語教育では、初級レベルでは生活支援のため、また、日本での留学生活を通して様々なことを学び日本人と人間関係を築いていくための日本語コミュニケーション能力の育成を目指した授業が求められると言える。また、中級レベル以上では、各自が自分自身の各技能レベルを伸ばしつつ、学生同士の相互作用を活かし、視野を広げ思考を深めていけるような授業が求められると言える。

今後の課題としては、主に２つ挙げられる。１つ目の課題は、初級レベルの漢字学習のサポートで

ある。初級レベルでは非漢字圏の学生が多く、学生からも漢字を学びたいという声が上がっているが、漢字学習に費やせる時間が限られていることや、初級レベルが終わるまでにどの程度の漢字語彙とどのようなストラテジーを身に付けていれば中級レベル以上の授業にスムーズに移行できるのか、まだ正確な分析ができていない。したがって、漢字学習について、今後学生の様子を見ながら、カリキュラムを練っていく必要がある。２つ目の課題は、中級以上のレベルへの対応である。中級レベル以上の学生は、初級の学生に比べ人数は少ないが、運用力には個人差がある。今回技能・内容別によるコース編成を行ったことから、各学生の技能バランスの差にある程度配慮した対応ができたが、今後入学してくる中級レベル以上の学生の運用力の差に対しても、本学期のコース編成で対応していけるかどうかは分からない。したがって、中上級レベルについては、学年に関わらず各自の技能のレベル・バランスに合った授業を展開するなど、多様な背景・学習歴を持つ学生の個人差に対応できるようなカリキュラムを練っていく必要がある。

2.2.2. 工学部「Business Japanese Ⅱ・Ⅳ」

【授業概要】

本学期の受講者は、３年生（「Business Japanese Ⅱ」）が５名、４年生（「Business Japanese Ⅳ」）が９名である。工学部の受講者は、学年に関係なく、日本語のレベルにより、初級レベルと中級レベルに分かれて受講している。表５に本学期の受講者及び授業内容を示す。

表５　2014年度秋学期 工学部「Business Japanese Ⅱ・Ⅳ」概要

レベル	受講者		主教材 / 授業内容
初級レベル	9名	３年生：４名（中国、タイ、インドネシア） ４年生：５名（中国、タイ）	・『初級日本語 げんきⅡ』、L20 ～ L22 ・就職活動のための練習：敬語、メールの書き方、履歴書の書き方など
中級レベル	5名	３年生：１名（中国） ４年生：４名（韓国、ベトナム、タイ、中国）	※「アジア人財プログラム」との合同授業。 ・面接の練習、グループディスカッション、スピーチ、ケーススタディーなど

本学期は、初級レベルでは『げんきⅡ』の表現・文型をベースに、自分の経験を説明できるようになることを目指しつつ、敬語の基本的な使い方・メールの書き方・履歴書の書き方など、フォーマルな場面・就職活動を想定した練習を取り入れている。中級レベルでは、日本企業に就職を希望する学生もいることから、同じ時間に開講されている、日本企業への就職を目指す工学系大学院留学生を対象とした「アジア人財プログラム（産業工学コース）」の「日本ビジネス研修A」が受講できるようにしている。

【報告及び課題】

工学部の「Business Japanese」は2013年10月から開講し、また、アジア人財プログラムとの合併も、2014年４月から始めた試みである。アジア人財プログラムとの合同授業を行うにあたり、2014年４月の授業開始前に、受講希望者を全員集め、オリエンテーション、ニーズ調査、及びレベルチェックテ

ストを実施した。ニーズ調査の結果、生活のために日本語が必要であるが学校生活で日本語を使う機会が少なく日本語がなかなかうまくならないことや、敬語がうまく使えないことに問題を感じていることが分かった。また、初級レベルの学生は日常生活場面でうまく日本人とコミュニケーションができるようになりたいという希望を持っており、中級レベルの学生は就職や将来役に立つ日本語を学びたいという希望を持っていることが分かった。この結果を踏まえ、今学期も初級レベルでは留学生活場面でのコミュニケーションを想定した練習を、中級レベルでは日本企業就職及び社会で必要となる日本語力を育成することを目標とした授業内容を実施している。

また、工学部は１年次の「Japanese Ⅰ・Ⅱ」が必修となっており、その後の授業は選択科目となっていることから、日本語の授業を１度も受けずに、３年生・４年生になってから受講しに来る学生もいる。したがって、「Business Japanese」を受講しに来た段階で、１年次での日本語運用力が上がっている学生もいれば、下がっている学生もいる。また、2014年春学期と本秋学期の受講者数を比べると、４年生はさほど減っていないものの、３年生は専門科目の授業との兼ね合いで少し減っているという状況になっている。そして、本学期の受講状況と学生のニーズから考え、現３年生が４年生になって、また再び日本語を受講しに来る可能性もある。これらのことから、工学部の日本語教育に求められるのは、２年次以降、学生が自分の状況・レベルに合わせて、自分自身で４年間の日本語の学習計画を立て、着実に日本語運用力を上げていけるような学習環境づくりをすることであると考える。したがって、今後も学生のニーズ調査及び学習相談を続けながら、学生が必要な時期に必要な授業内容を学べるような環境づくりを、各関係者と相談しながら進めていきたい。

2.2.3. 農学部「Business Japanese Ⅲ・Ⅳ」

【授業概要】

農学部の「Business Japanese」は、学生間の日本語のレベル差が大きいことと、日本語のレベルで受講者を分けると受講者が少ないクラスができてしまうことから、２レベル・２クラス編成にし、農学部の大学院（生物資源環境科学府）に在籍している大学院生にも授業を開講している。大学院生の募集の手順は、農学部学生係を通して大学院に在籍する留学生全員にメールを送って通知をし、受講希望者に対して学期開始前にオリエンテーション及びプレースメントテスト（作文・インタビュー）を実施するという流れになっている。本学期は、学士課程国際コースの学生のレベルに合わせ、初級レベルと中上級レベルの２レベル・２クラスを開講した。「Business Japanese Ⅲ」ではスピーキング能力を、「Business Japanese Ⅳ」では読み書き能力を育成することを目標としている。各クラスの概要及び受講者は表６のとおりである。

表６　2014年度秋学期　農学部「Business Japanese Ⅲ・Ⅳ」概要

レベル	科目名	受講者		主教材 / 授業内容
初級レベル	Business Japanese Ⅲ（スピーキング）	4名	学部生：２名（韓国、ベトナム） 大学院生：２名（ミャンマー、モンゴル）	・『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』、L1、8、9、11-13、16、18、20、22
	Business Japanese Ⅳ（読み書き）	3名	学部生：２名（韓国、ベトナム） 大学院生：１名（ミャンマー）	・『初級日本語 げんきⅡ』、L20 ～ L22 ・『初級日本語 げんきⅡ』（読み書き編） ※適宜課を選んで漢字学習を行う。
中上級レベル	Business Japanese Ⅲ（スピーキング）	6名	学部生：２名（中国） 大学院生：４名（中国、タイ）	・ロールプレイ（『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』から課を選んで使用） ・CD を聞いて内容を簡潔にまとめる練習 ・プレゼンテーション
	Business Japanese Ⅳ（読み書き）	6名	学部生：２名（中国） 大学院生：４名（中国、タイ）	・日本企業文化に関する読み物を読み、内容をまとめる練習。また、その内容に関して自分の意見を論理的に表す練習。 ・企業分析 ・ケーススタディー

初級レベルは、「Business Japanese」という科目名ではあるが、まだ基礎的な日本語力を身に付ける必要があることから、研究室に入った時に日本人学生と日本語でコミュニケーションが取れ、研究室の環境に適応できることを目標にカリキュラム・シラバスを設計している。したがって、表現・文型の積み上げに加え、場面・機能別会話や漢字、日本語でのメールの書き方などを取り入れている。

中上級レベルでは、日本企業への就職を視野に入れた授業内容に加え、社会で求められる日本語能力の育成を目指した授業を行っている。日本企業への就職を視野に入れた授業内容としては、履歴書・エントリーシートの書き方、メールの書き方、面接の練習、プレゼンテーション、日本企業文化の理解などを取り入れている。社会で求められる能力の育成としては、相手や状況に合わせて表現・行動を選択する練習、読んだり聞いたりした情報を簡潔にまとめる練習、自分の意見を根拠を踏まえて論理的に説明する練習などを行っている[5]。

【報告及び課題】

農学部は、学部生と大学院生が共に学ぶという形態を開講当初から続けているが、特に中上級レベルの授業で社会的な話題に関する意見交換をすると、大学院生から様々な観点からの意見が出て来て、意見交換が活性化するという場面が見られる。初級レベルにおいても、大学院生が研究室での日本人とのかかわりから得た語彙や表現、そして、研究室で見る日本人学生の様子などをもとにした話題を提供してくれることがあり、学部生にはよい刺激となっているようである。これらのことから、学部生と大学院生が共に学ぶという授業には、研究室に関する情報収集という面も含め、特に学部生にとって意味があると考える。

5 「メールの書き方、履歴書・エントリーシートの書き方、メールの書き方、面接の練習」は、春学期に実施した。

次に、課題について述べる。初級レベルにおいては、昨年度まで漢字学習をスケジュールに組み込んではおらず、時間の余裕があれば挟む程度であったが、本学期はスケジュールの中に「漢字」の時間を組み込んだ。学生からの要望があったこともあるが、やはり研究室での生活や各種申請書の作成などを行う上で、初級レベルでは継続的な漢字学習のサポートが必要である。

中上級レベルに関しては、本学期から「アジア人財プログラム」で使用している教材を用いた授業を実施している。この教材を使用して授業が進められるのは、本学期の学生の日本語レベルが教材に耐えうるものであったためであるが、今後も継続的にこの教材を使用していくためには、「Japanese」の段階で「Business Japanese」につながるような日本語力及び思考力を育成しておくことが必要である。これは、「アジア人財プログラム」の科目を受講している工学部の学生にも言えることである。ただし、学士課程国際コースの学生は、全員が日本企業への就職を目指しているわけではなく、学部段階の「Business Japanese」でどのような授業を実施するか、今後も引き続き検討が必要である。

3．まとめ

以上、「Japanese」から「Business Japanese」の授業概要及び報告と課題について述べてきたが、全体に共通する今後の課題を、以下にまとめる。

1）学生自身が日本語の学習を自分でデザインできるような学習環境を整えつつ、1年次から3年次・4年次までの日本語能力の伸びを見据えたカリキュラム及び支援体制を整備して行く必要がある。

2）学生の学生生活また卒業後の進路選択をサポートできるような授業活動・授業内容を取り入れていく必要がある。

これらの課題に対応していくため、今後も学生のニーズ調査や学習調査を進めながら、引き続き本学における学士課程国際コースの学生の状況に即したカリキュラムを設計・整備していきたい。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，261－266
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 261-266

平成26年度アジア人財プログラム（産業工学コース）におけるビジネス日本語教育

山　田　明　子*

1．プログラムの概要

経済産業省・文部科学省の「アジア人財資金構想」に基づき、「エネルギーと環境を考えたモノづくり」をキーコンセプトにした産業工学コースが、平成20年度に本学工学府において設置された。産業工学コースが対象とするのは、工学府・システム情報科学府・総合理工学府・システム生命科学府・統合新領域学府オートモーティブサイエンス専攻に在籍する大学院生（修士課程・博士課程）である。産業工学コースの位置付けは副専攻であり、産業工学コースの科目は関連授業科目として認定を行う。平成26年度における、本コースの受講科目は、表１の通りである。

表１　アジア人財プログラム（産業工学コース）授業科目一覧

産業工学コース授業科目一覧 （※下記科目から、最低10単位取得すること）	
授業科目	単位
エネルギー・環境工学特論第一	2
日本ビジネス研修	2
ビジネス日本語・科学技術日本語演習	2
企業連携インターンシップ	2
日本産業特論	2
工学解析・計測特論第一	2
工学解析・計測特論第二	2
IT 応用特論第一	2
IT 応用特論第二	2
技術開発マネジメント	2
Intercultural Communication	2

留学生センターの日本語教育部門では、ビジネス日本語教育として、「日本ビジネス研修（２単位）」及び「ビジネス日本語（２単位）[1]」を担当している。本稿では、平成26年度の「日本ビジネス研修」及び「ビジネス日本語」の実施状況について報告する。

*九州大学留学生センター講師

1　平成20年度のコース開設時に、本学では「ビジネス日本語・科学技術日本語演習」として科目名を設定した。しかし、「科学技術日本語」に関しては、特に授業で取り扱っていないため、来年度より科目名を「ビジネス日本語」と変更する予定である。

２．ビジネス日本語教育の概要

「アジア人財資金構想」では、大学におけるビジネス日本語教育の内容を、ビジネスに関する背景知識・文化・経済的知識などの学習を目的とする「日本ビジネス教育」と、ビジネスに必要な４技能（話す・聴く・読む・書く）の習得・情報収集や情報発信スキルの学習を目的とする「ビジネス日本語教育」の２つに分けている。そこで、平成20年度のコース開始時に、「日本ビジネス教育」として「日本ビジネス研修Ａ」「日本ビジネス研修Ｂ」という２つの科目を、「ビジネス日本語教育」として「ビジネス日本語Ａ」「ビジネス日本語Ｂ」という２つの科目を設置し、平成23年の自立化後も、この科目名で引き続き授業を行っている。各科目の開講状況は表２のとおりである。

表２　産業工学コースにおけるビジネス日本語教育（年間スケジュール）

前期	〈夏季集中〉	後期
日本ビジネス研修Ａ（１単位／週１回）		日本ビジネス研修Ａ（１単位／週１回）
	日本ビジネス研修Ｂ(１単位／４日間・15回)	
ビジネス日本語Ａ（１単位／週１回）		
ビジネス日本語Ｂ（１単位／週１回）		ビジネス日本語Ｂ（１単位／週１回）

産業工学コースにおけるビジネス日本語教育は、通年でカリキュラムを設計しており、インターンシップや就職活動の時期に合わせ、授業を展開している。前期は主に基礎日本語力向上及び日本文化・日本社会の理解が中心である。そして、夏季休暇中に実施されるインターンシップの事前準備として、８月にビジネスマナーの集中講義を行っている。また、後期は就職活動及び就職後を目指した授業内容となっている。

履修の仕方は、「日本ビジネス研修Ａ」と「日本ビジネス研修Ｂ」の２科目を履修して２単位を、「ビジネス日本語Ａ」と「ビジネス日本語Ｂ」の２科目を履修して２単位を認定するという形になっている。ただし、「日本ビジネス研修Ａ」「ビジネス日本語Ｂ」は、前期も後期も開講しているが、前期と後期では授業内容が異なる。そのため、例年ほとんどの学生が、同じ科目名であっても前期・後期ともに履修をしている。

なお、例年４月の授業開始時に、受講者全員に対してオリエンテーション及びレベルチェックテスト（読解・作文）、個人面談を実施し、各学生の日本語レベル及び学習歴などを把握している。この情報は担当教師間で共有し、その後の授業・指導を行う上での基礎データとしている。

次に、科目別の授業内容を表３に示す。

表３　産業工学コースにおけるビジネス日本語教育（科目別の内容）

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>日本ビジネス研修Ａ
【会話】</th><th>日本ビジネス研修Ｂ
【ビジネスマナー】</th><th>ビジネス日本語Ａ
【基礎日本語 / 日本事情】</th><th>ビジネス日本語Ｂ
【読み書き】</th></tr>
<tr><td colspan="2">共通の目標</td><td colspan="4">社会人基礎力に裏打ちされたコミュニケーション能力の育成</td></tr>
<tr><td colspan="2">個別の目標</td><td>・場面や相手に応じた表現が選べる
・相手の話の意図が理解できる
・自分の意見を簡潔に述べられる</td><td>・ビジネスマナーを身に付ける
・学生と社会人の違いを知る</td><td>・日本語運用力の向上
・社会的な問題を理解するための下地作り</td><td>・情報収集力を高める
・得た情報を簡潔にまとめられる
・論理的な文章が書ける</td></tr>
<tr><td rowspan="2">授業内容</td><td>前期</td><td>・待遇表現
・スピーチ
・プレゼンテーション
・ディスカッション等</td><td rowspan="2">〈夏季集中〉
・日本企業が求める人材像の理解
・エチケットマナーの基本スキル
・基本マナー（来客対応、電話対応等）
・仕事の仕方の基本（職場でのマナー等）</td><td>【基礎日本語】
・表現、文型の正確さを高める練習
・日本と自国について深く考える
【日本事情】
・日本の四季、歴史、地理 等
・社会問題、時事問題
・グループワーク（協働作業）</td><td>・メールの書き方
・プレゼンテーション資料の作成
・企業文化、日本文化に関する読み物を読み、意見文を書く練習
・ビジネス用語</td></tr>
<tr><td>後期</td><td>・グループディスカッション
・ケーススタディー
・面接の練習等</td><td></td><td>・履歴書、送付状の書き方
・ES の書き方
・報告書の書き方等</td></tr>
</table>

本コースにおけるビジネス日本語教育の目標は、社会人基礎力に裏打ちされたコミュニケーション能力を育成することにある。授業を担当する教員は、下記の３つを共通の指導方針とし、科目間で連携しながら授業を行っている。

- 表現を覚えさせるのではなく、なぜその表現になるのかを考えさせる。
- 状況判断のための判断材料として、一般常識、日本文化・社会に関する知識を身につけさせる。
- 物事を多角的に見る視点を身につけさせる。

次に、科目ごとの授業内容について説明する。

「日本ビジネス研修」では、「会話（「日本ビジネス研修Ａ」）」と「ビジネスマナー（「日本ビジネス研修Ｂ」）」の２つのクラスを開講している。「会話」では、敬意表現の習得、また、スピーチやプレゼンテーション、ディスカッションといった日本語の運用力を育成するとともに、発信力や傾聴力などの社会人基礎力の育成も目指す。「ビジネスマナー」では、実際のビジネス場面を想定した実践的な模擬練習を通して、日本の企業文化に対する理解を深めることを目指す。

「ビジネス日本語」では、「基礎日本語（「ビジネス日本語Ａ」）」と「日本事情（「ビジネス日本語Ａ」）」、「読み書き（「ビジネス日本語Ｂ」）」の実質３つのクラスを開講している。「基礎日本語」では、『中級を学ぼう－中級前期－（スリーエーネットワーク）』を使用し、表現・文型の正確さを高めると

ともに、自分の考えや知っていることを正確に相手に伝えられる力を育成する。「日本事情」では、日本の四季や歴史などを通して日本・日本人に対する理解を深めつつ、時事問題や経済報道番組（「ガイアの夜明け」「カンブリア宮殿」等）の視聴を通して、社会で起きていることを多角的に分析できる視点を養う。また、チームで働く力を育成するために、グループワークも実施している。「読み書き」では、日本社会・日本企業に関する読み物を読んで意見文を書くという練習を通して、日本語のテキストから必要な情報を取ってまとめられるようになること、また、根拠を提示し論理的な文章が書けるようになることを目指す。そして、メールの書き方やエントリーシートの書き方、報告書の書き方など就職活動や入社後に活かせる実践的な練習も行う。

「ビジネス日本語Ａ（基礎日本語）」以外は、担当教師が作成したものや生教材（新聞記事、テレビ番組の録画等）を教材として使用している。「日本ビジネス研修Ａ」では、副教材として市販のテキスト（『ビジネスのための日本語 初中級（米田他, 2006)』、『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習：職場のダイバーシティで学び合う【教材編】（近藤他, 2013)』）を一部使用している。評価方法は、各科目によって異なるが、社会人基礎力の育成及びコミュニケーション力を評価の対象とするため、授業活動、授業後の振り返り、学生自身による学期末自己評価、学期を通しての変化も評価の対象としている。

３．平成26年度「ビジネス日本語教育」実施報告

３.１　受講者

産業工学コースでは、平成23年度の自立化後、学内募集により受講者を募り、書類審査及び面接を経てコース受講者を決定している。日本語に関しては、応募の条件として日本語能力試験N2以上を要求している。本コースでは、修了要件である単位を取得するために２年間を設定していることから、平成26年度におけるビジネス日本語教育科目の受講対象者は、平成25年度に受講が決定した６期生17名と、平成26年度に受講が決定した７期生16名である。

表４　６期生・７期生の概要

	学位区分			出身国
	修士	博士	計	
６期生	16名	１名	17名	・中国15名 ・マレーシア１名 ・フランス１名
７期生	13名	３名	16名	・中国14名 ・台湾１名 ・ベトナム１名

本コースにおけるビジネス日本語教育は１年間でカリキュラムを設計しているため、平成26年度の受講者は、主に７期生である。平成26年度前期は、すでに内定を取得している第６期生１名が再履修という形で「ビジネス日本語Ａ」を受講した。再履修の理由は、内定は取れたもののまだ自分の日本

語力に不安があるということであった。また、平成26年度から、「日本ビジネス研修Ａ」を学士課程国際コースの工学部の学生（２年生～４年生）が受講できるようにした。

3.2　時間割

平成26年度の科目ごとの開講状況は、表５の通りである。

表５　平成26年度「ビジネス日本語教育」時間割

開講時期	曜日	開講時間	
		１限目	２限目
前期	火	ビジネス日本語Ｂ【読み書き】（８）	ビジネス日本語Ｂ【読み書き】（７）
	木	日本ビジネス研修Ａ【会話】(11)	日本ビジネス研修Ａ【会話】(12) ※うち７名は学士課程国際コースの学生。
	金	ビジネス日本語Ａ【基礎日本語】(13)	ビジネス日本語Ａ【日本事情・時事問題】（７）
夏季集中		８月５日～８月８日：日本ビジネス研修Ｂ【ビジネスマナー】(15)	
後期	火	日本ビジネス研修Ａ【会話】（９） ※うち５名は学士課程国際コースの学生。	日本ビジネス研修Ａ【会話】（９）
	金	ビジネス日本語Ｂ【読み書き】(15)	

※（　　）内は受講者数

産業工学コースに在籍している学生は、専門科目との兼ね合いで受講ができない時間があることから、「日本ビジネス研修Ａ」「ビジネス日本語Ｂ」では、１限目と２限目に同じ内容の授業を開講し、どの学生も１年間でインターンシップ、そして就職活動にスムーズに入っていけるような体制を整えている。また、本年度も、前期は日本語運用力を高めることに重点を置き、学生のレベル差を考慮しつつ、週３日・４種類（読み書き、会話、基礎日本語、日本事情）の授業を開講した。そして、夏休み中のインターンシップの前にビジネスマナーの集中講義を実施し、後期は就職活動及び就職後に向けた授業を週２日・２種類（会話、読み書き）開講した。

本年度新たに変更した点は、学士課程国際コースの学部生にも授業を開講したこと、後期の「ビジネス日本語Ｂ」を１限目のみの開講にしたことの２点である。「ビジネス日本語Ｂ」の開講を１限目のみにしたのは、例年後期は受講者が減ること、また、主にグループやペアでの活動を行うため、少人数では授業が進めにくいためである。ただし、開講時間を決定する際に、学生の状況を聞き、１限目と２限目でより多くの学生が参加できる時間帯を選んだ。

3.3　報告及び課題

コース開設時からのビジネス日本語教育の課題は、学生の日本語運用力の差である。これまで、個人面談や個人課題の添削など、学生個々人のレベルに応じた指導や、できる限り学生のレベル差に配慮したクラス編成などを試みてきた。平成26年度に入った７期生も、例年通り漢字圏の学生が多く、日本語能力試験のＮ２・Ｎ１を取得しているものの、４月の段階でまだ運用力が十分でない学生が半数ほどいた。本年度に関しては、本コースの日本語の開講時間が、運用力が低い学生の専攻の授業と

それほど重ならず、例年に比べ、重点的に運用力の底上げを行う体制を整えやすかったと言える。しかし、非漢字圏の学生に関しては、十分に漢字学習のフォローを行うことができなかった。例年非漢字圏の学生が数名入ってくるが、やはり新聞記事などの生教材の読解、作文課題には配慮が必要となる。今後も、引き続き非漢字圏の学生への対応を検討していく必要がある。

また、本年度より、「日本ビジネス研修A」において、学士課程国際コースとの合同授業を開始した。学部生と大学院生という身分の違いはあったが、学士課程国際コースの学生は東南アジアやアメリカなど国籍が多様であったこと、そして、大学院生の様々な経歴や経験にもとづいた発言により、ディスカッションが活性化し、授業を通してお互いに刺激を受けていたようである。本年度は「日本ビジネス研修A」のみを合同授業としたが、来年度以降は、他の科目においても合同授業を開講したいと考えている。合同授業に関しては、運営上そして教育上、まだ検討すべき課題があるが、双方の学生の相互作用を活かした授業運営・授業活動が行えるように工夫していきたい。

4．今後の課題

平成27年度を以って大学を卒業する新卒者から、企業の採用スケジュールが変更されることになり、エントリーや企業説明会は平成27年３月から、面接や試験は平成27年８月から開始される。また、インターンシップも夏季だけではなく、冬季の実施も検討されている。これまで、本コースにおけるビジネス日本語教育では、学生の就職活動スケジュールに合わせたカリキュラム・シラバスを設計してきた。また、インターンシップや就職活動など、学生の実質的な行動・活動をサポートする授業内容を展開することで、教室の内と外を結んだ日本語教育が提供でき、受講者のモチベーションを高め、ニーズに応じた授業が展開できていると考える。したがって、本年度から来年度にかけては、社会の動向及び学生の実際の就職活動状況を見ながら、就職活動の時期に合わせたカリキュラム及びシラバスを再編していくことが、大きな課題である。

参考文献

・アジア人財資金構想プロジェクトサポートセンター編集（2011）「教育機関のための外国人留学生ビジネス日本語教育ガイド」経済産業省（http://www.meti.go.jp/policy/asia_jinzai_shikin/studybusinessjapaneseguide.pdf：2014年10月31日）
・一般社団法人 日本経済団体連合会「採用選考に関する指針」（http://www.keidanren.or.jp/policy/2013/081.html：2014年10月31日）
・太田秀和、北条純一、平田実、山田明子（2013）「日本企業に就職を希望する留学生に対する特別プログラム」日本機械学会 Dynamics and Design Conference 2013 USB 論文集 No.13-18、507.
・西頭由紀子、川邊理恵、山田明子（2010）「日本企業への就職をめざす留学生のための日本語教育－学生の社会人基礎力の自己評価をとおして－」、『日本語教育論集』国際シンポジウム編 第７号、中国赴日本国留学生予備学校日本語教育研究会、pp.101-120.

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，267－273
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 267-273

日本語・日本文化研修コース（14期生）報告

Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2013-2014)

郭　　俊　海*

1．はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース（JLCC: Japanese Language and Culture Course）は、海外の大学で日本語や日本文化に関する分野を専攻している学生を対象とし、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることを目的とした１年間の短期留学コースである。

2．概要

平成12年度から、日本語・日本文化研修生は一括して留学生センターが受け入れ主体となっており、最近までの受け入れ人数の推移は次のとおりである[1]。

平成16−17（04−05）年度５期生	15名	平成17−18（05−06）年度６期生	10名
平成18−19（06−07）年度７期生	21名	平成19−20（07−08）年度８期生	20名
平成20−21（08−09）年度９期生	26名	平成21−22（09−10）年度10期生	29名
平成22−23（10−11）年度11期生	29名	平成23−24（11−12）年度12期生	44名
平成24−25（12−13）年度13期生	34名	平成25−26（13−14）年度14期生	26名

2.1　受け入れ期間

その年の10月１日から翌年の９月30日まで

2.2　14期生の国籍と出身大学

14期生は、13カ国・地域の21大学から計26名が参加している。うち、奨学金受給者は、国費が10名（大使館推薦８名、大学推薦２名）、JASSO が８名である。表１は14期生の国籍と出身大学を示す。

*九州大学留学生センター准教授

1　平成12～23年度の受入人数は清水（2007，2011）によるものである（『九州大学留学生センター紀要』第16、19号）。

表１　14期生の国籍と出身大学

国・地域		大学名	人数
アジア	韓国	慶尚大学校	1
		忠南大学校	2
		東亜大学校	1
		慶北大学校	1
	マレーシア	マラヤ大学	1
	台湾	台湾大学	1
	中国	北京大学	2
		清華大学（韓国人留学生）	2
		人民大学	1
		東華大学	1
	ベトナム	ハノイ国家大学外国語大学	1
	イタリア	トリノ大学	1
	オーストリア	ウィーン大学	1
	オランダ	ライデン大学	1
	カナダ	ハーバード大学	1
	スロベニア	リュブヤナ大学	1
	チェコ	マサリク大学	1
	ドイツ	ハイデルベルク大学	1
		ミュンヘン大学	1
	フランス	国立東洋言語文化大学（INALCO）	2
		プロヴァンス大学	2
計			26

2.3　コースの内容

JLCC のコースは、必修科目、選択必修科目そして選択科目から構成される。コースを修了するには、年間30単位（450時間）の履修が必要である。詳しくは表２のとおりである。

１）　必修科目（２単位　30時間）と選択必修科目（24単位　360時間）

留学生センター開講の「自主研究」、「日本語論（JL: Japanese Language and Linguistics）」、「日本社会文化論（JC: Japanese Culture and Society）」。「自主研究」が２単位、「日本語論」と「日本社会文化論」がそれぞれ年間12単位以上の履修が必要である。

２）　選択科目　４単位（60時間）

基幹教育院や各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目を年間２科目（４単位）以上の履修が必要である。

表２　JLCC の14期生のカリキュラム

（修了所要単位数：30単位 /450時間）

	秋学期（10月-３月）	曜日＆担当者	春学期（４月-９月）	曜日＆担当者
選択必修科目	日本語論（Japanese Language and Linguistics）　通年12単位（180時間）			
	JL 101　日本語言語文化論 JL 102　日本語演習 A JL 103　日本語・日本文化概論 A JL 104　日本映像文化論 A JL 105　日本語総合力をつけよう	金３岡崎 木３斎藤 水１郭 木５川邊 金１疋田	JL 201　日本語現代文読解 JL 202　日本語演習 B JL 203　日本語・日本文化概論 B JL 204　日本映像文化論 B JL 205　日本語教育学	金３岡崎 木３斎藤 水３郭 木５川邊 水３小山
	日本社会文化論（Japanese Culture and Society）　通年12単位（180時間）			
	JC 101　現代日本における若者論 JC 102　社会問題に見る日本社会① JC 103　現代日本の姿 JC 104　ドラマで学ぶ日本の歴史 JC 105　４コマ漫画にみる日本①* JC 106　人と社会を考える*	火１大神 火２鹿島 木１西頭 水３小山 火木３和田 火金５西頭	JC 201　日本人論と日本社会の変化 JC 202　社会問題に見る日本社会② JC 203　私のための社会学 JC 204　現代の小説を読む JC 205　４コマ漫画にみる日本②	木１大神 水２鹿島 火１西頭 金１疋田 火５和田
必修科目			自主研究　２単位（30時間） ISP (Independent Study Project)	火３水５郭
選択科目	基幹教育院や各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目 通年４単位（60時間）以上			

* １月開講

表３　秋学期の時間割

時限	時間	火	水	木	金
1	08：40 -10：10	JC101 大神	JL103 郭	JC103 西頭	JL105 疋田
2	10：30 -12：00	JC102 鹿島			
3	13：00 -14：30	JC105 和田	JC104 小山	JC105 和田 JL102 斉藤	JL101 岡崎
4	14：50 -16：30				
5	16：40 -18：10	JC106 西頭		JL104 川邊	JC106 西頭

表４　春学期の時間割

時限	時間	火	水	木	金
1	08：40 -10：10	JC203 西頭	JL205 小山	JC201 大神	JC204 疋田
2	10：30 -12：00		JC202 鹿島		
3	13：00 -14：30	JL204 岡崎 ISP　郭	JL203 郭	JL202 斉藤	JL201 岡崎
4	14：50 -16：30				
5	16：40 -18：10	JC205 和田	ISP　郭	JL204 川邊	

2.4　単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される、また単位互換に応じることができる。

2.5　第14期生の年間主要行事

日にち	行事内容
９月24日（月）～26日（木）	JLCC 生来日
27日（金）	オリエンテーション
28日（土）～29日（日）	JLCC 秋学期見学旅行（国立阿蘇青少年交流の家）＆三者面談
30日（月）	新入留学生オリエンテーション
９月30日（月）～10月７日（月）	JLCs オンライン・プレースメントテスト
10月１日（月）	全学授業開始
	平成25年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開校式
	JLCC・JTW 合同図書館ツアー＆合同懇親会
４日（金）	福岡市防災センター体験学習
15日（火）	JLCC 授業開始
11月11日（月）	太宰府戒壇院坐禅体験
12月８日（日）～９日（月）	JLCC・JTW 長崎原爆見学
14日（土）	糸島東風公民館交流会
2014年	
１月７日（火）	JLCC １月開講の授業開始
15日（火）	二回目の三者面談
20日（月）	JLCC・JTW・研修コース「長崎原爆シンポジウム」
２月３日（月）	東長寺節分祭七福神仮装体験
28日（火）	１月開講の JLCC 授業終了
４月４日（金）	大分・日田市日見学旅行
15日（火）	春学期の JLCC の授業開始
５月31日（日）	吉野ヶ里見学
６月23日（月）	ゲストレクチャー（１）「日本のメディアと新聞」
30日（月）	ゲストレクチャー（２）「日本のポピュラー・カルチャー」
８月５日（火）	JLCC の授業終了
７日（木）	閉講式・パーテイー
９月４日（木）	留学報告会（国費学生対象）

2.6　自主研究

春学期の必修科目の「自主研究」は、各自が興味のある本（日本に関する内容）を一冊選び読み通

し、２週間に一回読書レポートを書く。提出したレポートをもとに口頭報告を行い、そして学期末に最終的なレポートを提出する。以下は、学生たちのレポートのテーマ（提出順）である。

1	ダン・ムカン	日中漢字の特徴の比較
2	マリーニ・リッカルド	絵本における「死」
3	ソン・ナヨン	日本は本当に変わった文化の国か
4	イ・ユジン	日本の婚活とアメリカの婚活の比較― 類似点と相違点 ―
5	イ・ビョンフン	日本の集団主義と世間の関係
6	キム・ソリ	孤立無業に対する疑問
7	シン・ヨンジュ	日本と桜
8	許彩誠	きものの歴史から見る日本人の服装価値観の変化
9	ムン・ボギョン	現代日本社会が直面している「論理の喪失」について
10	シューマッハー・ケビン	日本の建築における「美」― 都市の美学
11	高坂・カレン	だから日本はズレている― ノマドワークスタイルの現状 ―
12	アリア・ビンディ・アブドラ	なぜ関西人は日本人ではないとよく言われているか？
13	グエン・ティ・ホア	日本の学校給食
14	ダン・ゼン	日本の茶道を形成させる条件― 家元制度を中心に ―
15	レデール・マリオン	裏千家流派に基づいた茶道の思想とその実践
16	ケビン・ペルがー	現代の日本人の人生設計
17	ルー・エリザベス	日本の刺青と英国王室― 明治期から第一次世界大戦まで ―
18	リュ・ヒョビン	無縁社会― 誰のための孤独か？
19	フシェ・ステファン・エマニヌエル	現代日本の女性の親子の関係の状態
20	ブレジェック・ミハル	日本人の法意識
21	ライト・ディビット	日本地理― 後藤武士「読むだけでスッキリ分かる日本地理」
22	チョウ・カズイ	日本の環境問題史
23	ディン・ジイ	著作権の前世と来世
24	ガーニョスト・ヤン	日韓関係の問題と問題解決のアプローチ
25	ガスパーケン	日中問題について
26	マリ・イブライム	格差社会

3．第14期で行った改良

3.1　授業の取り方

授業の取りかたについては、従来通り、秋学期に留学生センターが開講する各種のスキル別コース（会話、漢字、読解、作文など）を受講させるとともに、選択必修の「日本社会文化論（JC)」の一部の開講時期を遅らせ（１月開講、週２回行う方法)、10月来日からの３か月は、足りない日本語の力をつける猶予期間を設けた。これによって、非漢字圏学習者はもちろん、漢字圏学習者にも留学生センターが開講する多くの読み書きの授業に慣れさせ、日本語力を伸ばせるのに効果的であった。

3.2　カリキュラムの再編

これまで必修科目としていた「日本語（上級)」及び「日本文化論」について、授業内容・形態の整理見直しを行い、「日本語論」及び「日本社会文化論」として再編した。

授業内容については、主に日本語の言語としての知識・理論の習得等を目的とする講義を「日本語論」とし、日本の社会・文化に関する理解の深化を目的とする講義を「日本社会文化論」として開講した。また「日本語論」及び「日本社会文化論」はともに各期に５～６科目の開講をし、年間でそれぞれ６科目（12単位）を履修とした。

授業形態については、「日本語論」及び「日本社会文化論」で開講する科目すべてを講義扱いとし、各学期15週（30時間）の履修により１科目（２単位）とした。また、「文献講読」については、授業科目名をより実態に則した科目名称である「自主研究」に名称変更を行った。

今回のカリキュラムの再編に至った経緯は以下のとおりである。昨年度のカリキュラム改訂においては、学生のニーズに応えつつ授業の質を担保するため、必修科目を従来の「日本語（上級)」と、それまで必修科目としていた「日本語・日本文化概論」、「日本語学」及び「日本語演習」を新たに開講する日本の社会や文化（言語を含む）に関する授業とともに「日本文化論」として再編し、その授業を選択制とした。だが、「日本語（上級)」として開講する科目に、日本社会・文化に関する講義を主な内容とするものがある一方で、「日本文化論」として開講する科目では言語としての日本語に焦点を当てた講義が４科目中３科目を占めるなど、カテゴリ名称（授業科目）と授業内容が必ずしも一致しない面があった。このカリキュラムの再編は「文献講読」の名称変更を含め、このカテゴライズを明確にし、学生の授業選択に資することを目的の一つとした。

3.3　エクストラ・カリキュラムの開発

近年、JLCC 生の関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつある傾向である。修了生からは「日本文化を体験できる機会を増やしてほしい」「見学旅行や日本人との交流活動をもっと多く行ってほしい」等の声が上がってきている。こういった修了生のフィードバックを踏まえ、体で日本文化を体験できる活動を増やすことを目的とし、ゲストレクチャーや課外活動を含むエクストラ・カリキュラムの開発に着手し始めた。ゲストレクチャーの詳細は以下のとおりである。

１回目　「日本のメディアと新聞」（30年以上第一線で活躍される西日本新聞編集委員・九州大学客員教授）
２回目　「日本のポピュラー・カルチャー」（他大学非常勤講師・社会学専門）

3.4　その他

12、13期の試みを踏襲し、一部の授業で iPad の導入を継続した。グループディスカッションやハンズオンタスクの実施において、学生が言葉や漢字などを互いに教えあったり、iPad の Wifi やカメラ機能を使って情報を即時に共有したりすることで、学生間の交流やコミュニケーションが促進できて、教室活動も効果的であった。

学生の指導においては、授業が始まる前（10月１週目）と秋学期の終わる前（１月３週目）に、２回にわたって JLCC 生全員を対象に一人ずつ三者面談を行った。面談を通じて、学生の来日後の適応状況や生活上・勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズな問題解決につながった。

4．コースに対する評価

春学期の「自主研究」の最後の授業時と９月の初めに、JLCC 生によるプログラム評価の報告会を行い、カリキュラムの構成、授業内容、見学旅行及び今後の改善点等の面から、「非常に良い」「良い」「どちらとも言えない」「あまり良くない」「良くない」と５段階評価で評価してもらった（回答者19人）。カリキュラムの構成、授業内容について、「非常に良い」「良い」と回答した人が17人（90％）だった。ゲストレクチャーに関しては、「日本の新聞の現状を知るようになってよかった」「面白かった」「画像などがあって分かりやすかった」「楽しかった」など、ポジティブな評価がほとんどだった。

しかし、必修科目の「自主研究」について、授業の難易度や課題の量が多かった割りに、「単位数が少なすぎる」「負担が重すぎる」との指摘が多かった。見学旅行などについては、以前と比べて回数やバリエーションを増やしたにも関わらず、「もっと日本文化の体験をさせてほしい」「見学が少ない」「日本人学生との交流機会を増やしてほしい」との指摘があった。

5．今後の課題

前述のとおり、近年、日本語・日本文化研修コース生のニーズは多様化し、その関心や興味は日本文化や日本社会一般に移りつつあるようである。こういったニーズに応えるために、いかにカリキュラムの継続的な開発・改善を行っていくべきかが、重要である。

14期生には、プログラム期間中に、積極的に就職活動を行い、日本の複数大手企業から内定を獲得した学生もいた。今後も、このような日本での就職のニーズが高まってくるだろうと思われる。そのために、日本での就職を希望する学生に対するアドバイスや就職活動へのサポートをどう提供すべきかが、新たな課題となっている。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，275－283
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 275-283

マヒドン大学（タイ）との教育連携プログラムの実践

― 2014年度プログラムの実施概要 ―

岡　崎　智　己*

0．はじめに

本プログラムは教員交流・学生交流を行うことを目的に本学とマヒドン大学との間で2007年（平成19年度）から実施されているもので、教員交流では相互に教員を派遣して集中講義を行い、学生交流では選抜された学生を相互に受け入れて互いの社会・文化を学ぶ２週間の短期研修を実施している。なお、昨年度より教員交流と学生交流の全てが留学生センターと国際交流推進室の所管で行われるようになった。[1]

1．プログラムの内容

マヒドン大学における学年歴が変更されたため、今年度よりすべての交流プログラムは７月～９月に集中して行われることになった。以下、今年度実施したプログラム項目を実施順に一覧にして示す。

プログラム項目	実施先	実施期間	参加者
日本語集中講義	マヒドン大学	７月28日～８月１日	マヒドン大生（７名）
日本現地研修	九州大学	８月10日～８月23日	マヒドン大生（15名）
タイ語集中講義	九州大学	８月18日～８月22日	九大生（17名）
タイ現地研修	マヒドン大学	８月24日～９月６日	九大生（15名）

1.1　日本語・日本文化集中講義（於マヒドン大学）

例年通り５日間で30時間（２単位相当分）の授業を「Intensive Japanese Course for Communication Skills」と題してマヒドン大学サラヤキャンパスで行った。受講者（７名）は全員 Faculty of Liberal Arts 所属の英語専攻の学生で、日本語は選択外国語として学んでいる。今年は男子学生２名に対し女子学生５名の構成だった。

---

*九州大学留学生センター教授

1　詳しくは昨年度の報告「マヒドン大学（タイ）との教育連携プログラムの実践－2013年度プログラムの実施報告」九州大学留学生センター紀要第22号を参照されたい。

	9 : 00 - 10 : 30	10 : 30 - 12 : 00	13 : 00 - 14 : 30
July 28	Introducing oneself	Asking someone to repeat something	Asking where places and things are
July 29	Inviting people to do things and turning down invitations		Continuing a conversation
July 30	Ordering food	Japanese Cooking: Demonstration and Tasting	Introduction to Japanese Culture: Tea & Kimono
July 31	Making inquiries about lost articles		Explaining things and asking favors
Aug. 1	Showing modesty and paying compliments	Apologizing	Final presentations

1.2　日本現地研修（於九州大学）

タイで起きた洪水被害の影響で一昨年度は全員が Faculty of Liberal Arts（LA）の学生、昨年度が全員 Mahidol University International College（MUIC）所属の学生といった具合に変則的な受入れ（マヒドン大側からすれば送出し）が続いていたが、今年度からは本来の受入れ（送出し）体制に戻り、LA と MUIC のそれぞれから７名（男子学生２名＋女子学生５名）、及び８名（男子学生３名＋女子学生５名）の学生が選抜され、計15名のマヒドン大生が来日した。なお、MUIC 派遣の女子学生の内１名はミャンマーから（マヒドン大学へ）の留学生であった。

来日したマヒドン大生の補佐役・案内役となるチューターのほとんどは昨年度のプログラムに参加し、タイ現地研修に赴いた九大生が当たったが、今年は今年度のプログラムでこれからタイ現地研修に赴く九大生も数名、チューターとして活動した。九大生にとってはちょうど前期試験の行われる多忙な時期であったが、各自が時間の許す限りマヒドン大生と一緒の時間を過ごし、密度の濃い「学生交流」が行われた。

以下に今年度の受入れプログラム「日本現地研修」の実施スケジュールを示す。なお、今回は学生からの希望を取り入れ、日本の社会や文化を英語で紹介するセミナー（＝座学）を減らし、工場見学等、日本の今を実際に見聞する機会を増やした。

	Date	Activities			
1	Aug. 10 Sun	8:00 10:00 12:00	Arrive at Fukuoka (TG648) Check-in at International House in Kashiihama Shopping at AEON Mall and City Tour with KU students		
2	Aug. 11 Mon	10:20 - 11:30	Orientation & Campus Tour(Int. Hall)	13:00 - 15:00	Cultural Experience 1: Yukata Fitting (ISC404, ISC403)
3	Aug. 12 Tue	10:20 - 12:00	Japanese language class 1 (ISC303, ISC304)	13:00 - 15:00	Presentation in English/Japanese : My Country - Thailand (Int. Hall)
4	Aug. 13 Wed	9:00 - 17:00	Study Trip 1: Kyushu National Museum + Dazaifu Tenmangu Shinto Shrine		
5	Aug. 14 Th	10:20 - 12:00	Japanese language class 2 (ISC303, ISC304)	13:00 - 15:00	Seminar: Becoming Japanese (ISC404)

	Date	Activities			
6	Aug. 15 Fri	10:20 - 12:00	Japanese language class 3 (ISC303, ISC304)		Study Trip 2: Karatsu Castle + Hikiyama Museum
7	Aug. 16 Sat	Free day			
8	Aug. 17 Sun	Free day			
9	Aug. 18 Mon	10:20 -12:00	Japanese language class 4 (ISC303, ISC304)	13:00 - 15:00	Cultural Experience 2: Traditional Japanese Music (Int. Hall)
10	Aug. 19 Tue	10:20 -12:00	Japanese language class 5 (ISC303, ISC304)	13:40 - 18:00	Study Trip 3: NIPPON STEEL & SUMITOMO METAL
11	Aug. 20 Wed	10:30 -12:30	Interaction & Activities with KU students: Thai cooking	12:40 - 16:00	Study Trip 4: TOYOTA MOTOR KYUSHU
12	Aug. 21 Th	10:20 -12:00	Japanese language class 6 (ISC303, ISC304)	13:00 - 16:00	Cultural Experience 3: Tea Ceremony at Rakusuien Japanese garden
13	Aug. 22 Fri	10:20 -12:00	Japanese language class 7 (ISC303, ISC304)	13:00 - 14:50 15:00 - 16:00	Presentation in Japanese: Japan I discovered (Int.Hall) Certificate Ceremony + Farewell Party (Int. Hall & Lobby)
14	Aug. 23 Sat	9:00 11:35	Meet at International House in Kashihama to depart for Fukuoka Airport Departing from Fukuoka (TG649)		

1.3　タイ語・タイ文化集中講義（於九州大学）

今年も全学教育・総合科目「タイの言語と文化」（２単位）として開講され、マヒドン大学からタイ人講師を迎えて実施された。受講者はタイ現地研修に参加が決まった15名に加え集中講義のみの受講希望者２名の計17名で、今回は大学院生はおらず、全員が学部の学生であった。在籍学部の内訳を以下に示す。

21世紀プログラム（１名）	歯学部（１名）	教育学部（３名）
工学部（２名）	農学部（２名）	法学部（５名）
理学部（１名）	経済学部（２名）	

集中講義の内容は以下の通りである。なお、３日目に行われたDemonstration of Thai Cooking では、日本現地研修に来ていたマヒドン大生も加わって、タイ人講師の指導の下、日・タイの学生が一緒になってタイ料理（グリーンカレーと豚肉の炒め料理とサラダ）を作り、皆で食した。

	10 : 30 - 12 : 00	13 : 00 - 14 : 30	14 : 50 - 16 : 20
Aug. 18	Introduction to Thailand and Mahidol Univ.	Introduction to Thai Language	- L.1 Introducing oneself and others - Assignment to be presented on day 5
Aug. 19	- Test 1 -L. 2 Asking question to describe things	- L. 2 (review) - Numbers 1-100	- L. 3 Telling the Time -Introducing Thai Food to be cooked on day 3

Aug. 20	Demonstration of Thai Cooking	- Test 2 - Thai holidays - Thai traditional Festivals - Buddhism	- L. 3 (review) - L. 4 Direction and destination
Aug. 21	- Test 3 - L. 4 (review)	- L. 5 Asking price / Adj.	-Writing Thai Alphabet and students'name - Group meeting / Search Information for presentation and report
Aug. 22	- Vocabulary Test - Preparation for 2-page report,oral Presentaion and Introducing oneself (using advanced language form)	- Introducing oneself (using advanced language form) - Role Play - Oral Presentation	- Thai Manners (Do and Don't) - Conclusion

1.4　タイ現地研修（於マヒドン大学）

例年に比べ19名と今回は応募者が少なめだったが、それでも定員（15名）を超える応募があったので書類選考を行い、今年の参加者を決定した。内訳は以下の通りである。

21世紀プログラム（１名）　教育学部（２名）　工学部（２名）
農学部（２名）　法学部（５名）　経済学部（３名）

昨年同様、旅行保険の加入を義務付け、出発前（於本学）と現地到着後（於マヒドン大）の２回、本プログラムのためのオリエンテーションを行ったほか、出発前（７月25日）には九州大学主催で派遣される他の海外派遣プログラムの参加者とも合同で、専門家を招いて海外における注意事項や危険回避方法について、危機管理オリエンテーションを実施、安全管理の徹底をはかった。

また、事前課題として各自の興味・関心に応じてタイに関する本を一冊読んで読書ノートを作成、提出してもらい、本プログラムへの参加の意義・目的についても十分に考えたうえでタイへ出発してもらうようにした。

今年の現地研修の実施期間は８月24日～９月６日で、本学でのタイ語・タイ文化の集中講義の受講を終え、その週末にはタイへ飛んで研修を開始した。なお、改修のため昨年度は使えなかったキャンパス内の学生寮の工事が終わり、今年からは再びキャンパス内に宿泊できるようになった。九大生に与えられたのは、出入り口にセキュリティーガードが常駐し、ビジネスホテル並みの設備（含 WiFi）が整った外国人留学生用の高層タイプの宿舎で、全員が２人部屋に入室した。

今年のプログラムの内容を以下に示す。これまで同様、日本語を学んでいるマヒドン大の学生が中心となってタイ語の学習の手助けや現地見学旅行に付き添ってくれ、とても親身になって九大生の世話をしてくれた。今年も参加者にケガをしたり事故にあったりといったアクシデントはなく、全員が元気で無事に２週間間の研修を終えて帰国した。

	Date	Time	Activities
1	**Sun. 24 Aug. 14**		**Arrival & Shopping at Tesco Lotus**
		16:00 hrs.	* Arrive at the Suvarnabhumi Airport by CI 835
		17:15-17:30 hrs.	* Meet MU staff and students at Exit No.3, Suvarnabhumi Airport * Depart for Tesco Lotus
		18:30-20:00 hrs.	* Arrive at Tesco Lotus * Shopping & dinner * Depart for Condo D (Accommodation), Mahidol University, Salaya Campus
		20:15 hrs.	* Arrive at Condo D
2	**Mon. 25 Aug.14**		**Orientation & Language Class**
		7:30 hrs.	* Take a tram from Condo D to Mahidol Learning Center (MLC) for breakfast
		7:40 - 8:40 hrs.	* Arrive at MLC and meet with MU students * Breakfast
		8:40 hrs.	* Take tram to the Office of the President (OP)
		9:00 - 10:30 hrs.	* Orientation Session Venue: Meeting Room 530, 5th floor, OP - Introduction to Mahidol University - Multimedia Presentation - Self Introduction - General Information and Program Overview - Summary (in Japanese)
		10:30 - 12:00 hrs.	* Tour of Salaya Campus
		12:00 - 13:30 hrs.	* Lunch Venue: Faculty of Liberal Arts (LA)
		13:30 - 16:30 hrs.	* Thai Language Class 1
		16:30 - 17:00 hrs.	* Time on your own
		17:00 - 19:00 hrs.	* Welcome Dinner Venue: Ground Floor, Mahidol University International College (MUIC)
3	**Tue. 26 Aug. 14**		**Temple Tour**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		8:30 hrs.	* Depart for the Temple of the Emerald Buddha and the Grand Palace
		9:00 - 11:30 hrs.	* Visit & tour of Temple of the Emerald Buddha and the Grand Palace
		11:30 - 13:00 hrs.	* Lunch
		13:00 - 14:30 hrs.	* Visit & tour of Wat Pho
		14.30 hrs.	* Depart for the Temple of Dawn (Wat Arun)
		15:00 - 16:30	* Visit & tour of Temple of Dawn
		16:30 hrs.	* Depart for Condo D
		17:30 hrs.	* Arrive at Condo D
		Evening	* Time on your own * Dinner

4	**Wed. 27 Aug.14**		**Visit to the Bangkok National Museum and Language Class**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		8:30 hrs.	* Meet together in front of the LA Building * Depart for Bangkok National Museum
		9:15 - 11:00 hrs.	* Visit & tour of Bangkok National Museum
		11:15 hrs.	* Depart for Salaya Campus
		12:00 hrs.	* Arrive at Salaya Campus
		12:00 - 13:00 hrs.	* Lunch
		13:30 - 16:30	* Thai Language Class 3
		Evening	* Time on your own * Dinner
5	**Thu. 28 Aug. 14**		**Language Class and Japanese Cultural Presentation**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		9:00 - 12.00 hrs.	* Thai Language Class 2
		12:00 - 13:30 hrs.	* Lunch
		13:30 - 16:00 hrs.	* Japanese Cultural Presentation by Japanese students * Interaction and Activities with Thai students
		Evening	* Time on your own * Dinner
6	**Fri. 29 Aug. 14**		**Language Class and Thai Dancing Class**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		9:00 - 12:00 hrs.	* Thai Language Class 4
		12:00 - 13:30	* Lunch
		13:30 hrs.	* Walk or take tram to MUIC
		13:45 hrs.	* Meet MU staff at the Information Counter, Ground Floor, MUIC
		14.00 - 16:00 hrs.	* Thai Dancing Class Venue: MUIC
		Evening	* Time on your own * Dinner
7	**Sat. 30 Aug. 14**		**Free Day** (lunch and dinner on your own)
8	**Sun. 31 Aug. 14**		**Free Day** (lunch and dinner on your own)
9	**Mon. 1 Sep. 13**		**Language Class and Thai Cooking Class**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		9:00 - 12:00 hrs.	* Thai Language Class 5
		12:00 - 13:15 hrs.	* Lunch
		13:15 hrs.	* Walk or take tram to MUIC
		13:30 hrs.	* Meet MU staff at the Information Counter, Ground Floor, MUIC

		13:30 - 14:30 hrs.	* Thai Cooking Theory Venue: MUIC
		14.45 - 17.00 hrs.	* Cooking Class Venue: MUIC
		17.00 - 18.00 hrs.	* Dinner (cooked in class)
		Evening	* Time on your own
10	**Tue. 2 Sep. 14**		**Language and Visit the Jim Thompson House**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		9:00 - 12:00 hrs.	* Thai Language Class 6
		12:00 - 13:00 hrs.	* Lunch
		13:00 hrs.	* Depart for the Jim Thompson House
		14:00 - 16:30 hrs.	* Tour of the Jim Thompson House
		16:30 hrs.	* Depart for Condo D
		17:30 hrs.	* Arrive at Condo D
		Evening	* Time on your own * Dinner
11	**Wed. 3 Sep. 14**		**Language Class and Cultural Demonstration**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		9:00 - 12:00 hrs.	* Thai Language Class 7
		12:00 - 13:30 hrs.	* Lunch
		13:30 - 16:30 hrs.	* Cultural Demonstration Venue: Faculty of Liberal Arts (LA)
		Evening	* Time on your own * Dinner
12	**Thu. 4 Sep. 14**		**Language Class and Visit & Tour of Museum Siam**
		Morning	* Take a tram from Condo D to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		09:00 - 12:00 hrs.	* Thai Language Class 8
		12:00 - 13:00 hrs.	* Lunch
		13:00	* Depart for Museum Siam
		14:00 - 16:00 hrs.	* Visit & Tour of Museum Siam
		16:00	* Depart for Condo-D
		17:00	* Arrive at Condo-D
		Evening	* Time on your own * Dinner
13	**Fri. 5 Sep. 14**		**Final Exam and Farewell Dinner**
		Morning	* Take a tram from Bandit Home to MLC for breakfast * Walk or take tram to LA
		9:00 - 12:00 hrs.	* Final Exam
		12:00 - 13:30 hrs.	* Lunch

		13:30 - 16:30 hrs.	* Presentation in Thai * Interaction and activities with Thai students
		17:00 - 19:00 hrs.	* Certificate Ceremony & Farewell Dinner Venue: Herb Garden Restaurant, MUIC
14	**Sat. 6 Sept. 14**		**Departure for Fukuoka**
		7:00 hrs.	* Meet in front of Condo D building * Depart for Suvarnabhumi Airport
		8:30 hrs.	* Arrive at Suvarnabhumi Airport * Airport check - in

2．参加学生によるプログラムの評価

研修終了後に日・タイ双方の学生に対して本学が実施したアンケート調査の結果の概要を以下に示す。

2.1　日本現地研修（於九州大学）に対する学生の評価

参加者15名・回答者15名

Japanese Language Course	Excellent	Good	Fair	Poor
Content	9	5	1	nil

	Too many	Many	Appropriate	Few	Too few
Class hours	nil	1	13	nil	1

Seminars Cultural Experiences & Study Trips	Excellent	Good	Fair	Poor
Cultural Experience: Kimono-fitting	7	8	nil	nil
Study Trip: Kyushu National Museum & Dazaifu shrine	12	3	nil	nil
Seminar: Becoming Japanese	7	7	1	nil
Study Trip: Karatsu Castle & Hikiyama Musueum	5	8	2	nil
Cultural Experience: Traditional Japanese Music	11	4	nil	nil
Study Trip: Nippon Steel & Sumitomo Metal	4	7	4	nil
Study Trip: Toyota Motor Kyushu	12	2	1	nil
Cultural Experience: Tea Ceremoney	14	1	nil	nil

その他	Excellent	Good	Fair	Poor
Tutors	14	nil	1	nil
Overall satisfaction	15	nil	nil	nil

プログラム全体への評価（Overall satisfaction）が全員一致で「Excellent」であったことが如実に示す通り、参加学生にとって十二分に満足のいく日本研修であったようだ。学生からのコメント（自由記述）を見ると「完ぺきでーす（原文のまま）」「very very good exchange program」「I've gain many experiences and knowledge far beyond I imagined（原文のまま）」「really interesting and exciting (program)」といったプラスの評価が多く寄せられており、来日前に学生たちが考えていた以上に日本と日本人について多くのことを学ぶ機会を提供できたようである。プログラムの運営に関わった教員やスタッフ、チューターに対する感謝の言葉も多く寄せられ、「one of the best exchange program I have ever been」と本プログラムを高く評価する学生もいた。そして「It made me wanna study here for one or two semesters（原文のまま）」といった希望をもらす参加者もいて、本プログラムへの参加が将来の本学への留学の契機となりうる可能性を伺わせた。[2]

2.2　タイ現地研修（於マヒドン大学）に対する学生の評価

参加者15名・回答者15名

	とても良かった	良かった	どちらとも言えない	良くなかった	まったく良くなかった
研修全体	14	1	nil	nil	nil
タイ語クラス	9	6	nil	nil	nil
Study tours	14	1	nil	nil	nil
Cultural classes	10	5	nil	nil	nil
寮・生活一般	9	5	1	nil	nil
実施時期・期間	11	3	1	nil	nil
事前集中講義	14	1	nil	nil	nil

「当初の期待を大きく超える内容」「何回でも参加したいと思えるプログラム」「忘れることのできない大事な経験となりました」といったコメント（自由記述）から明らかなように、タイ現地研修に参加した本学の学生たちもとても充実した２週間を過ごすことができたようである。しかし、その満足感、充実感は決して海外で異文化に触れたという表面的な興奮に起因するのではなく、「国籍を超えた人とのつながりを感じた」「自分がなさけなく勉強不足を痛感させられた」「自分の今後の生き方を考えさせる経験になった」といったコメントが示すように、人と人のつながり、人の優しさについて思いを馳せ、また自らの在り方や勉学に対する態度について深く考える機会を得たようで、プログラムの運営に関わる教員としては嬉しい限りである。

2　事実、昨年本プログラムに参加した学生のうち３名がその後、本学の短期留学プログラム（Japan in Today's World）に申請し、来学している。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，285－292
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 285-292

アセアン・プログラム（2014 AsTW）の実践[1]

Report on the ASEAN in Today's World (AsTW) 2014

岡　崎　智　己*

高　原　芳　枝**

0．はじめに

AsTW は九州大学の国際戦略の一つの柱である「アジア重視とアジアから発信する世界的知の拠点形成」の一環として ASEAN 域内の有力大学と連携して展開する国際連携教育プログラムで、2008年より実施している。当時の ASEAN 事務総長（Surin Pitsuwan 氏）の依頼により留学生センターがプログラムの開発に当たった経緯があり、開始当初より ASEAN 事務局と ASEAN University Network（AUN）の承認・協賛を得ている。本学の学生を含む、ASEAN 地域内外の学生が ASEAN 域内の有力大学に集結し、学習と生活の場を共有して交流を深めることにより、参加学生のアジアと世界に対するビジョン形成を促し、世界的な国際化の流れの中でアジア理解を深めた人材を育成することを目標としている。最初の３回（2008 年～ 2010 年）はタイのマヒドン大学と、次の３回（2011年～ 2014年）はフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学との共同開催でプログラムを実施した。なお、来年（2015年）からはベトナム国家大学ハノイ校との共同実施が決定している。

本稿では、今年、アテネオ・デ・マニラ大学と共同開催した第６回（2014年）プログラムについて報告する。

1．概要

1．1　プログラム実施期間

２月28日（金）～３月２日（日）の週末を利用して行ったオリエンテーションとスタディトリップを経て、３月３日（月）から ASEAN 研究コースとアジア言語・文化コースの授業を開始し、３月14日で全課程を終了した。

---

*九州大学留学生センター教授
**九州大学国際交流推進室准助教

1　これまで「春季プログラム」という名称で報告記録が掲載されてきたが、今年からはプログラムの内容を直接反映させた名称に変更して実施概要を報告する。

1．2　対象と募集方法

日本からは本学と福岡女子大学、海外からはASEAN域内の大学の学部生と大学院生が原則参加対象となるが、その他の国・地域の大学の学生にも広く門戸を開いている。募集は、共同実施先であるアテネオ・デ・マニラ大学と本学が其々のルートを通じて行い、参加者の選考は両校合同で行った。

1．3　参加者

今年のプログラム参加者の出身国と大学の内訳は表１の通りである。なお、プログラム参加者によって形成されるグループダイナミズムを考慮し、ASEAN域内から参加する学生と人数的にある程度均衡の取れるよう日本（＝本学と福岡女子大学）からの参加者の数を調整、選抜している。

表１

日本（14名）	ASEAN諸国（19名）						
日本	インドネシア	カンボジア	タイ	フィリピン	ベトナム	マレーシア	ミャンマー
14	3	2	3	4	2	2	3
福岡女子大学 九州大学	University of Gadjah Mada Binus University of Indonesia Sepuluh Nopember Institute of Technology	Royal University of Phnom penh	Mahidol University Mahidol University International College	Ateneo de Manila University University of Baguio	Vietnam National University, Ho Chi Minh	Universiti Putra Malaysia Universiti Kebangsaan Malaysia	Yangon University of Foreign Languages Maritime University Human Resource Management Institute

1．4　宿舎、参加料金と奨学金

宿舎は、本プログラムが実施されるキャンパスに隣接するアテネオ・デ・マニラ大学指定の民間学生寮を利用した。[2]

2　男女別のフロアで部屋のタイプにより１室２名～４名で入室。日本人学生とASEAN各国から参加した学生が部屋を共にし、交流が促進されるよう配慮した。

本学以外の参加者からは九州大学への授業料として59,200円、及び宿舎費とフィールドスタディに要する実費の88,000円を徴収したが、共同実施校のアテネオ・デ・マニラ大学と大学間包括連携協定締結校となっている福岡女子大学の学生は授業料不徴収としている。なお、本学の学生からは宿舎費とスタディトリップ費のみを徴収した。

また、九州大学奨学金として、本学独自の資金から一人14万円の奨学金を ASEAN 加盟国から参加した学生15名に支給した。日本国内から参加した学生に関しては、九州大学の学生３名に対し、成績と英語力が優れていた点が評価され、一人７万円の奨学金が支給された。[3]

２．開講コースの概要

本プログラムは、① ASEAN 研究コース（ASC: ASEAN Studies Courses）、②アジア言語・文化コース（ALC: Asian Languages & Cultures Courses）、及び③スタディトリップから構成されており、今年は ASC を３科目、ALC を４科目、開講した。① ASC と② ALC はそれぞれ１科目２単位とし、参加者は計４単位相当（＝ ASC １科目＋ ALC １科目＝計２科目）を履修することがプログラムの修了要件となっている。

① ASEAN 研究コース／ ASEAN Studies Courses（ASC）
- ◇ ASEAN・東アジア事情／ Current Affairs of ASEAN and East Asia
- ◇ ASEAN 経済／ ASEAN Economics
- ◇ アジアの異文化コミュニケーション ／ Cross-Cultural Communication in Asia

② アジア言語・文化コース／ Asian Languages & Cultures Courses（ALC）
- ◇ 初級日本語・文化／ Basic Japanese Language and Culture
- ◇ 初級タガログ語・文化／ Basic Tagalog and Culture
- ◇ 初級タイ語・文化／ Basic Thai Language and Culture
- ◇ 初級中国語・文化／ Basic Chinese Language and Culture

③ スタディトリップ
- ◇ Villa Escudero Resort, San Pablo City
- ◇ Subic, Zambales/Pampanga
- ◇ フィリピン伝統工芸体験

④ 特別講演会

ASEAN 事務局・社会文化協力部長　Mr. Edgar G. Pato

3　今年は JASSO の奨学金を得ることができなかったので、本学独自の資金から提供される奨学金のみの支給となった。

表２　時間割

9:30-11:45	Asian Languages & Cultures
11:45-13:00	Lunch Break
13:00-15:15	ASEAN Studies Courses

表３　科目担当教員・受講者数

ASEAN 研究コース科目名・担当講師 （　）内は担当コマ数（1コマ＝180分）	受講者数
ASEAN・東アジア事情／ Current Affairs of ASEAN and East Asia ◇ Assoc. Prof. Mark Fenwick, Faculty of Law, Kyushu University（4） ◇ Mr. Richard Heydarian, Ateneo de Manila University（5）	10
ASEAN 経済／ ASEAN Economics ◇ Assoc. Prof. Shoji Shinkai, Fukuoka Women's University　（4） ◇ Prof. Victor S. Venida, Ateneo University de Manila University（5）	9
異文化コミュニケーション ／ Cross-Cultural Communication ◇ Prof. Jordan Pollack, International Student Center, Kyushu University（4） ◇ Assoc. Prof. Violet B. Valdez, Ateneo University de Manila University（5）	14
アジア言語・文化コース科目名・講師	**受講者数**
初級日本語・文化／ Basic Japanese & Culture ◇ Ms. Kyoko Takada, International Student Center, Kyushu University（10）	9
初級タガログ語・文化／ Basic Tagalog & Culture ◇ Mrs. Maricar Delos Santos-Pulvera, Ateneo de Manila University（10）	10
初級タイ語・文化／ Basic Thai Language & Culture ◇ Mr. Yoht Manasan Wongvarn, Ateneo de Manila University（10）	7
初級中国語・文化／ Basic Chinese & Culture ◇ Dr. Daisy C. See, Ateneo de Manila University（10）	7

３．参加者の評価

プログラムに参加した学生からの評価は高く、以下に示す感想・意見を見ても分かるように、「アジアと世界に対するビジョン形成を促し、世界的な国際化の流れの中でアジア理解を深めた人材を育成する」という本プログラムの掲げる当初の目標を、殊に ASEAN 域内から参加した学生については、十分に達成できたものと考える。日本から参加した学生については、自らも述べているように、英語力の養成が課題となっている。

3．1　ASEAN からの参加者による評価（回答数：15 ／ 19）

（1）プログラム全般評価

（とてもよかった）　→　→　→　（つまらなかった）

5	4	3	2	1
60% 9	40% 6	0.0%	0.0%	0.0%

（2）ASEAN から参加した学生の感想・意見（アンケート回答より抜粋して原文のまま掲載）

• Personally a two week program is short for me, and I think the schedule is quite packed with activity, classes, assignment as well as studies. It is a bit tiring for us to rush everything in two weeks of time and can't learnt much. However, I am happy because I get to know the participants from ASEAN countries. The idea of this program is very good and interesting.
• Having participation in such incredibly spectacular program gave me another insight of how we as the next leader should take action for our own nations before stepping further in ASEAN scope, and I was very satisfied the AsTW Program provided all delegates with such splendid package. The program isn't only how we study in the class regarding on the topic related, but also we work with others, make everlasting friendship, spending time together and thus what the young delegates should do as well since a good diplomacy started by a great friendship among the future leaders of their country. Further, the program let me to obtain as much as knowledge by providing ASEAN Studies class and Language courses which I could expand my horizons, extend the links, experiencing to learn another language and the outbound or field trip which take us further to dig deeper about history of Philippines itself by visiting some historical sites. All the sweetest things, togetherness, a new family, perhaps will be something we need to resolve bilateral conflicts, no matter where we're from.
• AsTW had given me an opportunity to grow, both academically and mentally. Through this program, I was able to learn new skills, meet many great and inspiring people as well exploring the many exciting locations.
• I am very lucky that I got to the AsTW program. I learned a lot through the great teachers and the trips. I also gained more friends all over Asia and I am sure this will be a lasting one.

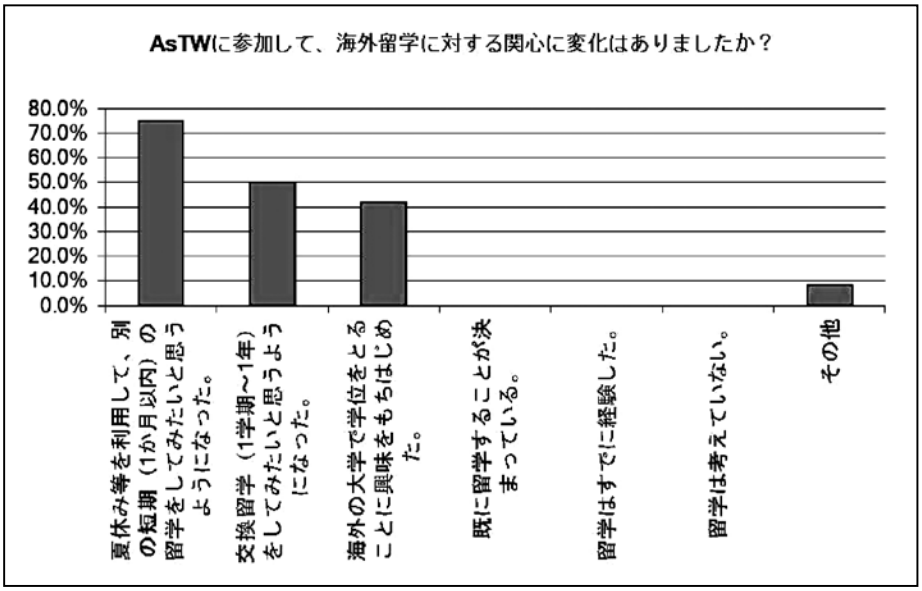
3．2　日本人学生に見られるプログラム参加の意義・成果（回答数：13 ／ 14）

（1）プログラム全般評価

（とてもよかった）　→　→　→　（つまらなかった）

5	4	3	2	1
100% 13	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

（2）海外留学に対する関心の変化



（3）日本から参加した学生の感想・意見（アンケート回答より抜粋して原文のまま掲載）

- これほど異国の同年代の学生と密に関わりあうことができるのはこのプログラムだけだと思います。今回私はASEAN 諸国に親友ができました。文化や言語の障壁を乗り越えてこのような素晴らしい友人を持つことができて本当に良かったです。 また、私自身が将来やりたいことのビジョンが見えてきました。これまではただ人のためになりたいと考えていたのですが、今回ASEAN 諸国の実情について話を聞いているうちに、将来は海外、それも ASEAN 諸国に出て行って活躍したいと思うようになりました。

• 日本語に興味がある ASEAN 諸国の学生と部屋を共有できた点、一緒にフィールドワークできた点がよかった。英語を教えてもらえるし、同時に日本語を教える機会ももてて、とても多くの言葉を覚えることができた。また、部屋が一緒だと、夜遅くまで語り合うことができるので、夢やこれまでやってきたこと、悩み、人生観など日本人の友達とも話したことがないような自分のコアの部分まで話しあえ、熟考できた。そのような会話を通して、これから自分は何ができるのか、やっていきたいのかということを考えることができた。また、彼らともっと話したいという気持ちが、これから英語を学んでいくモチベーションとなり、帰国してからも SNS を使って連絡をとることで学び続けることができている。
• 自分の英語力のなさや社交性のなさを再認識できたこと。そして日本に帰ってからのやる気につながった。いろんな国の人と交流して友達になれたこと。同じような興味関心を持つ人と出会えた。自分と同年代のすごい人たちからの刺激をもらえた。フィリピンを自分の目で見れた。
• 新しい、いくつもの価値観に出会えたこと。日本にいただけでは、絶対に知れない世界を知ることができた。大学生活残り２年間、ひとつひとつ徹底的に取り組んでいこうというモチベーション向上のきっかけになったのはとても嬉しい。
• さまざまな国からやってきた学生たちと、24時間ずっと過ごせたことだと思います。ただ一緒に授業を受けるだけでなく、同じ部屋の友達と夜中までおしゃべりしたり、ときには夜中まで英語でディスカッションしたりと、楽しみつつも、常に英語を使う環境に身を置けたことがよかったと思う点です。密度の濃い時間をすごせた分、別れはとてもつらかったですが、AsTW を通して、国籍関係なく、一生仲良くしたいと思う友人に巡り合うことができました。
• 外国の学生が半数を占めていて、必ず英語を話さなければならない状況にあることは、私にとってかなりプラスだった。英語を話そうとチャレンジする精神を身に付けることができたし、このプログラムのおかげで、より一層英語に励もうと思った。 また、タイ語や中国語、フィリピン語など、英語以外の言語を習うことで、今まで英語しか興味がなかったけれど、他の言語に興味を持つことができた。 いろんな国の学生があつまっているので、いろんな文化に触れることができ、それも日本と比較し考えられるきっかけとなった。
• アジア各国からさまざまな国籍を持った留学生が集っており、英語以外にもたくさんの言語が飛び交っており、そんな環境で英語の能力に自信が持てない日本人が半数という割合で参加できたことが一番良かった点で、海外での留学や海外に関心をもちはじめたような学生にとってはハードルが高すぎずまた低すぎずちょうど良い期間で自分に挑戦できる機会であったように感じた。

4．今後の課題と改善策

前項で触れた日本人学生の英語力の養成・強化を今後の課題の第一に挙げたい。本プログラムは本学を含む日本人学生がASEAN現地で、ASEAN域内から参加する学生と学習と生活の場を共有することで、アジアと世界に対するビジョンの形成を促し、世界的な国際化の流れの中でアジア理解を深めた人材を育成することを目標としていることはすでに述べた通りである。しかしながら共同生活の場で「共通語」として使われるのは英語であり、またASEANに関する学習（ASCやALCの授業）で教育言語として使われるのも英語である。「共通語」である英語の力が足りず、十分に情報収集や情報発信ができなければ、本プログラムに参加する意義も半減し、ASEAN理解も進まず、ASEANからの学生との交流も深まらないという現実がここにある。前項で示した日本人学生からのコメントに見るように、日本から参加した学生は本プログムに参加して初めてその現実を目の当たりにし、英語学習についての決意を新たにするのだが、国際連携教育プログラムである本プログラムの中で、英語力の不足する学生の英語習得を支援し、そうすることで学生間の交流やASEANに関する学習・理解をも促進する工夫はできないものかと考えた。その結果、来年度のプログラムではASCとリンクし、ASCの学習支援となるような形で英語力を強化するコース、'English as a Communication Tool in the ASEAN context' をALCコースの中に設けることにした。ここでもし「英語はアジア言語ではない。どうしてASEAN理解を標榜するプログラムのALCに英語コースを設けるのか」といった疑問を抱く人がいるとすれば、それはAsTWでの学びの現場を知らない（あるいは知ろうとしない）人の意見であると言わざるをえない。世界共通語としての英語は国際的なビジネスや政治、教育・研究の現場では、その活動を下支えする「基礎語」となっている。もしこの「基礎語」力が不十分なままで本プログラムのような国際連携プログラムに参加しても、所期の目的は達成されず、プログラムに参加する意義も有用性も結局「絵に描いた餅」になってしまう。本プログラムに応募して来た学生を選抜する段階で英語力の十分に備わった、即ち本プログラムに参加する準備のできている学生だけを選抜するという選択肢もあるが、残念ながら現時点ではそうしたレベルの英語力に達している日本人学生（九大生・福岡女子大生）は少なく、「やる気」と「意気込み」だけを頼りにプログラムに応募する学生が大半である。では、そうした「現実」を踏まえて、どうしたら腹の足しにならない「絵に描いた餅」ではなく、参加した学生の腹に入り、その身の力となって活用されるような教育プログラムの運営が可能か。来年度のプログラムでALCの中に'English as a Communication Tool in the ASEAN context' を設ける理由がここにある。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，293－306
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 293-306

AsTW（ASEAN in Today's World）プログラムにおける「初級日本語・文化」授業の実践報告 2009-2014

Report on the "Basic Japanese Language & Culture" Course in the AsTW（ASEAN in Today's World）Program 2009-2014

高　田　恭　子*

はじめに

ASEAN in Today's World プログラム（以下 AsTW と記す）は九州大学が開発した ASEAN ＋３（日本、韓国、中国）の主要大学の学生が参加する春季短期国際教育プログラムである。[1] このプログラムでは「アジアと世界に対するビジョン形成」と「アジア理解を深めた人材養成」を目標に、九州大学との共同実施に同意した ASEAN 諸国の有力大学が３年ごとに順にホスト校としてコースを主催することになっている。プログラムは2008年度から発足し、2009年から2011年まではタイのマヒドン大学インターナショナルカレッジで、2012年から2014年まではフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学において実施された。約２週間のプログラム期間中、参加した学生たちは基本的に同じ宿舎で寝食を共にしながら、午前中はアジア言語・文化の授業（ASEAN Language & Culture Courses）を、午後は ASEAN 研究の授業（ASEAN Studies Courses）を各１科目（２単位）ずつ英語で履修し、計４単位を取得する。コースには通常の授業以外にも ASEAN 事務局のゲストスピーカーによる特別講義や文化体験、泊まりがけのフィールドトリップ等も盛り込まれており、参加者達は共に様々な体験をしながら学び合い、相互理解を深めてゆく。

筆者はこのプログラムが発足した2009年から2014年までの６年間、"Basic Japanese Language & Culture"（「初級日本語・日本文化」）コースを担当してきた。約２週間の短期語学コースで何を目標にし、どんなカリキュラムを立てるべきか、限られた授業数でどれだけの成果があげられるのか、実際、筆者自身試行錯誤の繰り返しであったが、本稿では６年間の取り組みを総括して報告する。

Ⅰ．語学プログラムの詳細

2009年から2014年までの AsTW プログラムの実施期間と授業時間、参加者学生数、提供された言語コースとその受講者数の詳細は次頁の表１に示す通りである。

---

*九州大学留学生センター非常勤講師

1　AsTW の詳細は、郭淳海・高原芳枝（「九州大学留学生センター紀要」2010・2011・2012・2013）に詳しい。なお AsTW プログラムの参加対象者は原則として ASEAN 域内の学生となっているが、その他の国、地域の大学の学生も応募できる。2012年からは福岡女子大も AsTW の協力大学に加わっている。

（表１）AsTW の実施期間・授業時間・参加者学生数・提供された言語コース・受講者数

＊ ASEAN は ASEAN ＋の学生 JAP. は日本人学生を表す。

	AsTW 実施期間 授業時間	参加人数合計		開講された言語コース	受講者数
		ASEAN	JAP. *		
マヒドン大	2009年３月12日～４月２日 8:50 ～ 11:00	24人		初級日本語・文化 （ビジネス日本語）[2] 初級タイ語・文化 初級インドネシア語・文化	13人 （４人） ９人 ２人
		ASEAN	JAP.		
		15人	９人		
	2010年２月26日～３月13日 8:50 ～ 11:50	51人		初級日本語・文化 中級日本語・文化 初級タイ語・文化	17人 ５人 29人
		ASEAN	JAP.		
		32人	19人		
	2011年３月11日～３月25日 9:30 ～ 11:50	39人		初級日本語・文化 初級タイ語・文化 初級インドネシア語・文化 初級中国語	12人 16人 ２人 ９人
		ASEAN	JAP.		
		28人	11人		
アテネオ大	2012年２月24日～３月９日 9:30 ～ 11:45	50人		初級日本語・文化 初級タガログ語・文化 初級タイ語・文化 初級スペイン語・文化 初級中国語・文化	10人 ８人 ７人 13人 12人
		ASEAN	JAP.		
		28人	22人		
	2013年２月22日～３月８日 9:30 ～ 11:45	41人		初級日本語・文化 中級日本語・文化 初級タガログ語・文化 初級インドネシア語・文化 初級中国語・文化	９人 ３人 14人 ４人 11人
		ASEAN	JAP.		
		17人	24人		
	2014年２月28日～３月14日 9:30 ～ 11:45	33人		初級日本語・文化 初級タガログ語・文化 初級中国語 初級タイ語	９人 10人 ７人 ７人
		ASEAN	JAP.		
		19人	14人		

AsTW の実施期間はプログラムが発足した2009年は３週間であったが、協定校の学期等の事情により2010年からは２週間に短縮され、授業時間も2011年からは途中の休憩を含め１日135 ～ 140分、通常60分Ｘ２コマの授業となった。提供された語学コースは、2009年の時点ではタイ語とインドネシア語と日本語の３言語しかなかったが、その後2011年からは選択できる言語が増え、中国語やタガログ語のクラスも開設された。ただしプログラム申し込み時点で受講希望者がいなかった場合、クラスは開設されない。AsTW プログラムの開始以来、日本語コースは九大の留学生センターの教員が担当し、

2　2009年の“Business Japanese”のクラスは AsTW の学生に受講可能なレベルの日本語既習者がいなかったため、マヒドン大学（MUIC）の日本語専攻の学生が受講した。“Business Japanese”のクラスは翌年度からは廃止された。

日本語以外の言語は基本的にホスト大学の教員が担当した。[3] 筆者が担当した "Basic Japanese Language & Culture" のクラスは、6年間を通じASEANからの学生の受講数が最も多いクラスであった。

Ⅱ．Basic Japanese & Culture（初級日本語・文化）コースの授業内容

Ⅱ．1　目標

"Basic Japanese & Culture" クラスでは、大きな柱として、

1．コミュニケーションのための日本語会話
2．文字（ひらがな・カタカナ）の導入
3．日本文化紹介

の3つを掲げた。実はコースの準備段階では、授業時間が限られていることを考慮し、文字の導入はせずに実践的な会話を中心にカリキュラムを組むことを検討していた。しかし、コース開始前に行うオリエンテーション時に、毎年日本語の文字を勉強したいという希望を述べる学生が多かったため、文字に関しては漢字は扱わず、ひらがなとカタカナの読み方だけを中心に授業に組み入れることにした。授業内容の詳細は後述するが、コースの具体的な到達目標は次ページの表2に示す15項目である。このシートは、授業開始時のコース開始時に予定表や教材と共に配布し、コースの最後に自分の到達度を確認させる際にも使用した。

Ⅱ．2　教科書・教材

教科書を選択する際の条件は、ローマ字表記であること、英語で文法説明があること、場面会話があること、できればCDもついていること、そしてある程度文化的要素も盛り込んであることであった。しかし、実際問題としてわずか2週間足らずの短期コースにちょうど合う市販の教科書など存在しない。どの教科書を使っても通常の授業ペースなら2週間ではせいぜい動詞文の導入までしかたどり着かず、教科書の半分もカバーできない。そこでクラスでは配布教科書としては『はじめのいっぽ First Steps in Japanese』（スリーエーネットワーク）を選んだが、大半は自作プリントを用い授業を行い、教科書は文法説明や追加語彙の導入の際にのみ使用することにした。配布テキストを『はじめのいっぽ』に決めた理由は、先述した条件を備えているのに加え、比較的薄く持ち運びやすい割に初級全般の文型をカバーしていること、テキストが "Introducing Yourself" "Shopping" "Eating" など場面、機能別に構成されており実践的であること、そしてそれほど高価でないことによる。学生がコース期間中に授業内容以上のものを勉強したい、あるいは終了後にも日本語の勉強を続けたいと思えば、テキストがあれば自習できる。そういう意味でも、市販の教科書と自作プリントとの併用は有効であったと思う。

3　2012年度のタイ語はマヒドン大のタイ語講師が派遣されたが、翌年度からは予算の関係でマヒドン大からの派遣は中止され、タイ語のクラスは現地校の教員が担当した。

（表２）“Basic Japanese & Culture”クラスの到達目標

Goals

After completing the “Basic Japanese & Culture” course, you should be able to do the following things in Japanese:

1. read Hiragana and Katakana & write your own name in Katakana
2. greet others
3. introduce yourself
4. give simple comments
5. ask about locations
6. count up to 1,000,000
7. do shopping
8. order at restaurants
9. say what you like and dislike
10. say what you are going to do & what you did
11. say what you want to do
12. suggest to go somewhere or do something
13. make requests
14. ask & give permissions
15. sing a Japanese song

Ⅱ．３　シラバス・予定表

授業は毎回、会話、文字導入・文化紹介の３本立てで行ない、毎回文字の読みと、会話表現、文法項目をチェックするミニクイズも課した。コースの最終日前日には筆記試験を、最終日にはスピーチと寸劇発表、そして茶道、書道などの日本の伝統文化の紹介の時間を設けた。授業の予定表は、毎回、前年度の反省をもとに微調整を繰り返したが、ここでは2014年度の授業の予定表を次頁に示す。

Ⅱ．４．１　文法・会話

会話のシラバスを組み立てる際に最優先したことは、すぐに使える実践的な日本語であることである。AsTW のプログラムは海外での実施であったが、幸いなことに周りには日本人学生が大勢いる。そこで日本語の授業では、クラス外でも積極的に日本人と話せるような場面会話を多く導入し、宿題にもインタビューなど日本人と話さなければできないものを課すことにした。

自作教材を作る際に重視したことは、通常の教科書の文型提出順序にこだわらず、使用場面の多い項目をできるだけ多く入れることである。具体的には、まず動詞、形容詞の導入順序を入れ替えてみた。一般的な教科書の場合、形容詞は動詞導入の後に入っている。しかし日常生活では「暑い」「おいしい」などの簡単なコメントを述べる場面が非常に多い。そこで、形容詞は初日の挨拶表現と同時に

（表３）“Basic Japanese & Culture”クラスの予定表

		Class Activities	Quiz	Homework
1	3/3（Mon）	Introduction to Japanese sounds & writing system Writing system Hiragana & Katakana a ～ ko・ga ～ go・n Greetings and Set Phrases, Adjectives ① Introducing yourself ①		HW1 Writing ①② adjective sentences greeting
2	3/4（Tue）	writing system sa ～ to・za ～ do・n・long sound Introducing yourself ② Saying your hobby & what you like・Numbers 1 ～ 100, Asking time	Quiz ①	HW2 Writing ③④ interview・mini speech
3	3/5（Wed）	Writing system na ～ ho・ba ～ bo・ double consonant L1 introducting yourself ③ *mini speech L2 Shopping ① Asking locations, Numbers ～ 10000 Asking prices	Quiz ②	HW3 Writing ⑤⑥
4	3/6（Thu）	Writing system ma ～ yo・contracted sound Ordering at a restaurant Giving comments, Adjectives ②	Quiz ③	HW4 Writing ⑦⑧
5	3/7（Fri）	Writing system ra ～（w） Verbs ① Talking about your plan	Quiz ④	HW5 Writing ⑨
6	3/10（Mon）	Writing system rules Verbs ② Arranging to do something together & Talking about what you did	Quiz ⑤	HW6 Writing ⑩
7	3/11（Tue）	Writing system review Verbs ③ Stating what you want to do *Introduction to Japanese songs*	Quiz ⑥	
8	3/12（Wed）	Verbs ④ Making requests, Asking for permissions Review	Quiz ⑦	
9	3/13（Thu）	Writing Test Preparation for skit presentation & demonstration		
10	3/14（Fri）	Skit presentation, speech, Japanese songs Demonstration of Japanese Culture		

導入することにし、自作プリントの挨拶モデル会話の中に食事の後やプレゼントをもらった後に「おいしい」「からい」「かわいい」等のコメントを言うダイアログを加えた。そしてその日の宿題には、自分が言いたいコメントに必要な形容詞を日本語で何と言うのか、日本人学生に３つ聞いてくること、さらに教えてもらった形容詞を使い「～は～です。」という文を１つ作ってくるというものを出した。翌日の宿題チェックの時間に学生が聞いて来た形容詞を確認したところ、「チャラい」や「イケメン」など、おおよそ教科書には出てこないような言葉も飛び出し驚いたが、実際に日本人学生と話したからこそ得られた語彙であり、それはそれで良しとした。また、「～が好きです・嫌いです」の表現も２日目に導入し、前日の項目であった自己紹介の復習の際に自分が好きなことも加えて発表させた。また形容詞の過去形の作り方も動詞の導入前に教え、授業中も積極的に使わせるようにした。

動詞文に関しても、出来るだけ多くの場面で使える日本語であることを意識し、通常授業の文法の

提出順序や学習範囲にこだわらず、活用を含め、勧誘、自分の希望を述べる、依頼、許可を求める場面に必要な文型である「～ませんか」「～ましょう」「～たいです」「～てください」「～てもいいですか」を短期間でカバーした。しかし、詰め込み過ぎによる学生の混乱を避けるため、導入する文型が多い分、クラス内で扱う語彙は使用頻度の高いものに極端に限定することにした。自主教材に使った動詞は、「行く」「食べる」「飲む」「見る」「勉強する」など最も使用頻度の高いと思われる10の動詞だけである。実際に授業で扱った語彙の数はどの品詞も限られていたが、学習者達は日本人学生と親しくなるにつれ授業外で新しいことばをどんどん覚え、積極的に使用していた。

その他、授業に飽きさせないようにゲーム的要素も随時盛り込んでいく工夫もした。例えば買い物場面の練習では、文型やモデル会話導入の後、日本から持って行った絵はがきやお菓子、カップ麺などを用い、買い物ごっこをさせた。そして後日、それらの品物を景品に、数字の復習も兼ねてビンゴを行った。学生達の中にはビンゴそのものが初体験の学生も多く、この時間は非常に盛り上がった。

Ⅱ．４．２　文字導入

文字の導入に関しては、通常の授業ではひらがなを終えてからカタカナを導入するのが一般的であるが、あえてひらがなとカタカナの導入を同時進行で行った。例えばコース第一日目には日本語には漢字、ひらがな、カタカナの３つの文字体系があることを説明した後に、ひらがなとカタカナの「あ」「ア」から「こ」「コ」までを導入した。ひらがなとカタカナを並行して教えたのは、学生達の国や名前はカタカナ表記であり、カタカナ習得の必要度が高いこと、ひらがなとカタカナの形を同時に見せることでより覚えやすくなるのではないか、と考えたことによる。授業では文字導入に多くの時間を費やすことはできなかったので、文字を覚えてくるのは宿題にし、授業中は宿題にしていた範囲のひらがなとカタカナの読みをチェックした。文字の時間はともすれば単調になりがちであるが、読みのチェックにもゲーム的要素を盛りこみ、日本語の教科書『げんき』のオンライン「げんきな自習室」のフラッシュカードを用いて個人やチームでカードを読み終える時間を競わせたり、ことばの読み方の確認にコースに参加している日本人やASEANの学生達の名前を書いたカードを使用したりした。自分や友だちの名前を日本語で読めたという達成感は「ほん」や「ペン」といったことばを読んだ時とは異なるようで、読んだ後に歓声が沸くこともしばしばであった。なお、自分の国と名前に関しては、書き方も覚えさせ、国と名前を書く問題をコース終了時の試験に出題した。

Ⅱ．４．３　日本文化紹介

文化紹介の時間は、学生たちが最も楽しみにしている時間でもある。しかし、海外における授業では、紹介しても実際には体験できないことが多いのでなかなか難しい。AsTWプログラムでは環境や設備面で様々な制約があったが、文化紹介はDVDとデモンストレーションで行うことにした。

DVDは毎回授業最後に10～15分ほど時間をとり、NHKの『Trad Japan』から学生が興味を持ちそうなテーマを選んで見せた。そして、その後に内容に関するクイズを出したり、学生からの質問に答えたりした。実際に見せたテーマは、「富士山」「桜」「侍」「はし」「そば」「お弁当」「すし」「洋食」「抹茶」「茶道」「筆」「結婚」などである。学生達の日本文化に対する関心は非常に高く、授業終了後

にも授業で見せることができなかったトピックを続けて見たいという要望も出るほどであった。

また、コースの最終日には文化体験の時間を設け、同行した九大のスタッフや先生、日本人学生達に協力してもらい、実際に、茶道、書道、折り紙のデモンストレーションを行なった。学生達は実際に茶道のお手前を習い薄茶を点てたり、筆で自分の名前を書いたり、日本人学生に好きなことばを筆で書いてもらったりして大喜びであった。見るだけの DVD とは異なり、海外で日本文化に触れることのできる貴重な時間であったと思う。

その他、日本料理とマナーの紹介も授業外の時間に行った。マヒドン大学における３年間は「日本料理の夕べ」の時を設け、キャンパス内のキッチンを借りて九大のスタッフや日本人学生達に手伝ってもらい、ざるそば、ちらし寿司、白玉ぜんざいを作った。これは、マヒドン大学が AsTW の課外活動に「タイ料理の夕べ」を企画していたのに便乗したもので、食材の調達や料理の準備は大変であったが、AsTW 参加者全員やマヒドンのスタッフの方々と、タイと日本の食を通じ楽しく交流を深めることができた。アテネオ大学においては設備の関係で実際に料理を作ることはできなかったが、学生からの要望で、夜、マニラの中心にある日本人街のレストランに日本人学生達も誘って一緒に出向いたり、大学の近くにある日本食のレストランに行ったりした。このような授業外の時間は文化紹介のためだけでなく、学生間や学生と教師間の相互理解に非常に有益であったと思う。

さらに、日本語のクラスでは、日本の歌も１曲教え、歌う練習をした。AsTW プログラムでは、かなり大掛かりに開講式と閉講式が催される。最終日に行われる閉講式では、学生達は言語クラス単位で歌や踊りのパフォーマンスを披露することになっている。その準備も兼ね、授業では日本の歌も扱うことにした。歌詞やメロディーが簡単で別れの場にあうことから、初年度には“花＊花”の「さよなら大好きな人」を選んだ。学生達は授業後にも随分練習を重ねたらしく、閉講式ではフォーメーションを組んだり、途中にスピーチを挟んだりしながら素晴らしいパフォーマンスを見せたが、この歌を聞き泣き出してしまう日本人学生が出てしまった。それで翌年度からは他の元気の出る歌を提案したが、結局どの歌もむずかしいと却下され、「さよなら大好きな人」が６年間を通じ日本語クラスの歌となった。やはり毎年涙を誘うことになってしまったが、歌の余韻はいつまでも続き、このプログラムを通じて生まれた国境を越えた絆を皆が実感する最後の特別な時間となった。

Ⅱ．５　アセスメント

学生の成績は、出席20％、ミニクイズ20％、宿題提出10％、コース修了試験20％、スピーチ10％、平常点（寸劇を含む）20％で算出し、90％以上 A、80％以上 B、70％以上 C、60％以上 D、それ以下は F で評価した。出席の20％はどのクラスも共通である。

Ⅱ．５．１　ミニクイズ

ミニクイズは10点満点で、基本的にディクテーション形式で教師が言ったことばや数字、表現を聞き取り、その意味を選ぶ問題と、ひらがなとカタカナの読み取り問題を出した。例えば、クイズ１（表

4）の問題Ⅰでは、教師が「おはようございます」と言い、学生が“Good morning.”を選ぶ。問題Ⅱは同じ音のひらがなとカタカナを選ぶ問題で、Ⅲはひらがなとカタカナのディクテーションである。他の言語コースにはクイズを実施しないクラスもあり、毎日のクイズに学生からは不満の声が上がることもしばしばあったが、学習内容の定着と成績評価にはクイズも必要ではないかと思い、実施し続けた。ここでは1回目のミニクイズの例を次の表4に示す。

（表4）ミニクイズ　Quiz 1

Quiz 1　　/10　　name:

Ⅰ. Listen and choose the right expression.

①（　　）②（　　）③（　　）④（　　）⑤（　　）

A. Good morning.　B. I shall eat.　C. Thank you.　D. Good afternoon.

E. Good bye.　F. Good evening.　G. Good night.　H. I'm sorry.

Ⅱ. Match the Hiragana and Katakana.

Eg.　あ（ a ）　①い（　　）　②う（　　）　③え（　　）

a. ア ・	b. オ ・	c. エ ・	d. イ ・	e. ウ

Ⅲ. Listen and choose the right answer.

Eg.　あい ・ ~~うい~~　①　いえ ・ おえ　②　エイ ・ エオ

Ⅱ. 5.2　コース修了試験

コース修了試験は、100点満点で作成し、ミニクイズと同じディクテーション形式の問題に加え、動詞や形容詞の活用を問う問題や会話を完成させる穴埋め問題などを出題した。また、自分の名前と国をカタカナで書く問題も出した。毎回のクイズの内容を消化していれば難易度はさほど高くない試験であり、ほとんどの学生は70％以上の点をとることができていた。

Ⅱ. 5.3　スピーチ・寸劇発表

最終日には、一人一人のスピーチと、グループによる寸劇の発表もさせ、それも成績評価の対象とした。スピーチは、コース内で学んだ文型や表現をフルに使い、自己紹介と AsTW のコースについての感想を述べる内容のものである。日本語で挨拶も言えなかった学生達が、最終日には曲がりなりにも日本語でスピーチをするわけで、学生達はかなり緊張するが達成感も味わえる。学生がしたスピーチは以下のようなものである。

「みなさん、おはようございます。わたしは○○です。国はインドネシアです。
わたしは AsTW のプログラムで、いろいろなことをしました。Villa Escudero にいきました。
Villa Escudero はきれいでした。おもしろかったです。日本レストランにいきました。ラーメン

をたべました。ラーメンはおいしかったです。日本語をべんきょうしました。おもしろかったです。
AsTW のプログラムはとてもたのしかったです。わたしは AsTW のせんせいと友だちがだいすきです。日本にいきたいです。せんせいと友だちにあいたいです。どうもありがとうございました。」

寸劇発表は、3～4人のグループでいくつかの場面をクラスで勉強した会話表現をフルに使って10分程度で演じさせるものである。発表日の2日前に、国籍、性別、日本語能力が均等になるように学生を3、4人のグループに分けて、グループ内で寸劇の筋、配役を話し合い、せりふを準備し、練習するように言っておく。せりふは、授業中に作ったものは教師がチェックするが、授業外の時間に日本人学生に手伝ってもらうグループも多い。たいていどのグループも自分たちの劇を発表当日まで秘密にしており、授業後に練習をしている。劇の筋は、例えば、空港でぶつかったのがきっかけで自己紹介したら、お互いにAsTWの学生であることがわかり友だちになる。一緒にレストランに行ったり、カラオケに行ったりするうちに愛が芽生えるが、やがて別れの時がやってきて…、といった具合で、どのグループも衣装を準備したり、途中で歌やダンスを盛り込んだりして抱腹絶倒の劇を披露する。寸劇発表の後には、見学のためクラスに入っていたホスト大学のスタッフに審査員になってもらい、ベストアクター、ベストアクトレスを選んでもらい表彰したりもした。ASEAN の学生達の物怖じしない積極性と表現力の豊かさは、他のコースの教師も称賛しており、日本人学生も大いに学ぶべき点であると思う。

Ⅲ．学生のクラス評価

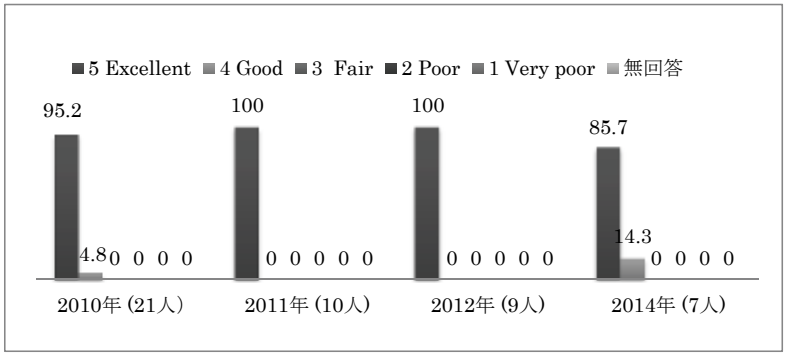
この項ではプログラム終了時に実施されたアンケート調査の結果に基づき、初級日本語のクラスに関する学生からの評価をまとめる。アンケートは2010年と2011年はタイのマヒドン大学、2012年と2014年はフィリピンのアテネオ大学により実施、集計されたが、2009年と2013年には言語コース全般に関するデータだけで各授業に関する結果は出されなかったため、ここでは4年分の報告をする。

アンケートの項目は（1）授業の質（2）教師の学生のニーズへの対応（3）教師の授業準備、（4）コースの大変さ（5）コース全般の質に関して、5段階で評価する質問[4]と、自由記述と選択形式で（6）授業で一番良かった点（7）改良点と要望（8）上達したかった技能（9）日本語のクラスを選んだ理由（10）コース終了後にも日本語を続けて勉強したいか、という質問が設けられている。なお、2012年の自由記述に関しては、各学生のコメントをアテネオ大学側がまとめて総評している。どの年度にも共通する学生の意見が的確にまとめられているので、全文を紹介する。各項目の結果は以下の通りである。[5]

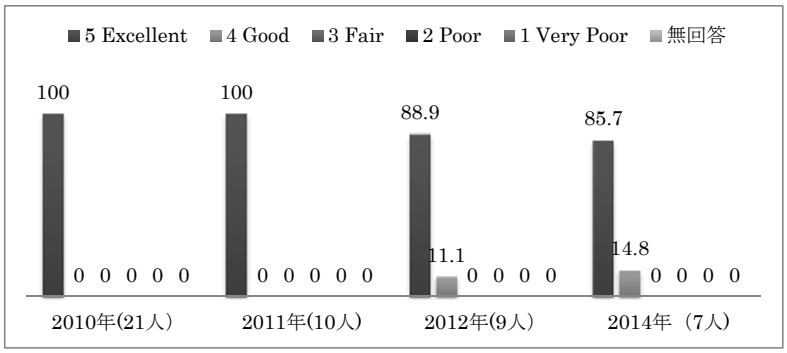
4　実際のアンケートには、5段階評価の質問に、課題の読み物の質に関するものも含まれ6項目となっていたが、日本語の授業には関係ないのでその結果は割愛した。

5　2014年の回答者は8人であったが、自由記述の内容から、1人は明らかに日本語コースではなく AsTW 全般について間違って回答していたため回答者数から除外し、全7人とした。

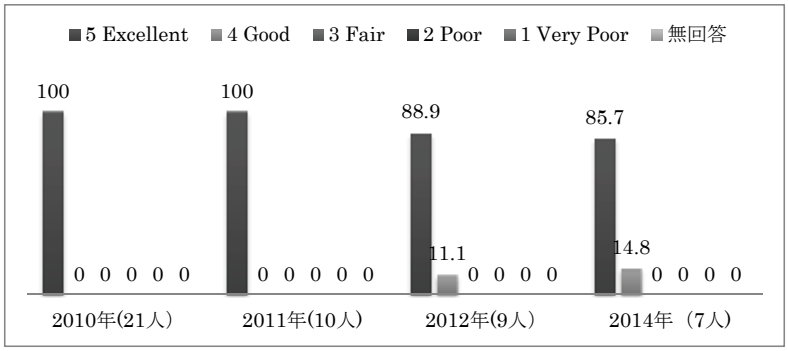
（1）Average quality of lecture（授業の質）



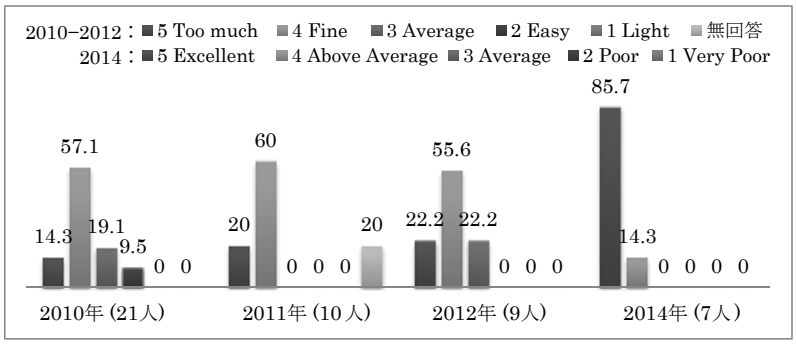
（2）Teacher's responsiveness to student needs（教師の要望への学生への対応）



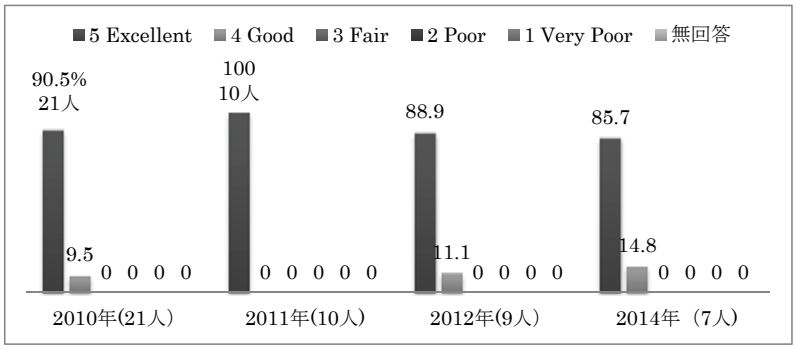
（3）Teacher's level of preparation（教師の授業準備）



（4）Workload　（授業、宿題の大変さ）



（5）Overall quality of course（コース全般の質）



（6）最も良かった点

最も良かった点として一番多かった回答は「教師」であった。その他、コースすべてが良かったという回答も多かった。日本文化の紹介や、授業中にやったビンゴが楽しかったと述べている学生も複数いる。実際の学生のコメントには以下のようなものがある。（原文のまま）

- I enjoyed conversation time & lecture on Japanese culture.
- I really enjoyed everything in the class. Even though it was a bit difficult. But I think it was fun. I really learned a lot more about Japanese Culture, food.
- I am really proud that I can introduce myself in Japanese language and talk with others easily.
- Learning Japanese but watching Japanese cultural documents in the mean time. It was awesome because that was the best way to build mutual understanding between the two countries.
- The teacher is patient, kind and friendly. She always helps us whenever we need. I like the teacher very much.

アテネオ大によるサマリーは以下の通りである。

The students were most fond of the teacher Mrs. Takada because of her gift of making the

classes a true learning experience. She would use role-playing, prizes, and interactive discussions and lectures to gauge the students' interest. Because of this, all her classes were highly enjoyable. Likewise, the content learned in the class was practical and applicable in real life situations.

(7) 改良すべき点

どの年も改良すべき点は特にないという回答が大多数を占めていたが、コースの期間と授業時間をもっと長くしてほしいという要望がかなり見られた。また、文化紹介の時間をもっと増やしてほしいという要望も少数だが見られた。宿題に関しては、もっと少なくしてほしいという回答が３人からあった一方で、もっと宿題がほしかいという回答も１人からあり、意見が分かれている。また、毎回のクイズが大変であったと書いている学生も１人いた。アンケートの項目（4）の授業の大変さで、“too much”という回答がやや多かったことからも、授業内容に満足してはいるものの、コース自体はハードであったことがわかる。

- I enjoyed the whole course. I have nothing to complain about.
- More time if possible, but of course I understand it's an intensive program.
- Generally it's good but it should reduce the workload.（homework, test, etc.）

アテネオ大のサマリーは以下の通り。

Not many students had complaints. The few that were made were about the homework and quizzes that were given every day. Some students wish that the course was longer so that they could memorize the Katakana and Hiragana lessons. One student thinks the class should watch a Japanese movie or TV show to get more cultural information on Japan.

The students think highly of their teacher. They also wish that the program would be extended. It was clear that they really appreciated the course.

(8) どの言語技能を伸ばしたかったか（回答はひとつだけを選択）

a. 読むこと　b. 話すこと・聞くこと　c. 書くこと　d. ４技能全部

2010年はｂが14人、ｄが６人、ａとｃが１人で圧倒的に会話力を伸ばしたいという希望が多かった。しかし、その後の３年間の回答を総計すると、ｂの話すこと、聞くことが14人、ｄの４技能全部が12人おり、会話だけでなく４技能習得の希望が多くなっていることがわかる。前述した通り、コース中の授業では会話中心の活動をやり、読み書きに関してはひらがなとカタカナの読み方を導入することしかできなかった。限られた授業時間で４技能の習得を目標にすることは可能なのか。もし可能なら、どのようなシラバスを組み、時間配分をどうすればいいのか、今後の課題として考えなければならない。

(9) なぜ日本語を選んだのか

ほぼ全員が日本と日本文化に興味があるから、というものである。日本食やアニメが好きだからと

いう回答も多い。アテネオ大のサマリーは以下の通りである。

Basically, what prompted students to choose this course was their love for Japan.
Some students have immense interest in Japan and its culture and language.
Some students who already had a background in Japanese took it as a refresher course.

（10）コース終了後も日本語の勉強を続けるか

2010年は18人が「はい」と答え、１人が「たぶん」、２人が無回答、2011年は10人全員が「はい」、2012年も９人全員が「はい」、2014年は５人が「はい」、３人が「まだわからない」と答えている。４年間の回答を総計すると、48人中、勉強を続けると答えた学生が42人で圧倒的に多く、勉強しないと答えた学生は１人もいない。学生の中には「実は以前日本語を勉強したことがあったが、むずかしかったのでやめてしまった。AsTW の日本語の授業を受け、日本語は決してむずかしい言語ではなく楽しいということがわかった。」と述べた学生がいた。彼女はこの秋から九大に留学生として来日している。AsTW の日本語の授業が日本語を好きになり日本留学への出発点となったのであれば、非常に嬉しい。

Ⅳ．考察

どの年度も学生から良い授業評価を得ることが出来た。これは、以下の３点が評価されたことによると思う。ひとつは、日本語と日本文化をバランス良く授業に取り入れたこと、２点目は語彙数をコントロールし難易度が高くなりすぎないように留意しつつ、実践的な場面会話を多く取り入れた自主教材を作成したこと、そして３点目はゲーム的要素を盛り込み、授業にメリハリをつけ楽しんで学べる工夫をしたことである。短期語学研修では市販の教材に頼らず、その研修期間や学習環境に合う独自の教材を使用することが望ましい。短期研修用の適切な教材開発は今後も引き続き行うべき大きな課題である。また、授業内容の定着のため宿題やミニクイズを毎回課してきたが、午後の授業や課外活動でも忙しい学生達の状況に配慮し、学生の負担を軽減しつつ、学習効果を最大にあげる方法も今後新たに工夫してゆく必要があると思う。

Ⅴ．最後に

「海外における短期間の日本語プログラムで、どこまで本格的に日本語が学べるのか」といった声を聞くことがある。確かに授業時間や学習環境には制約があり、授業内容も限られてくる。しかし、短期であるからこそ与えられた学習環境を最大限に生かし、適切な教材を用い、密度の濃い授業を提供することは可能である。AsTW の日本語の授業は、短期間であったからこそより強く鮮明に、日本語の面白さや上達の達成感を感じてもらうことができたのではないかと思う。

さらに短期研修プログラムの重要な点として強調したいのは、それが学習者の日本語学習の出発点になりうるという点である。最初に接する日本語クラスの印象がその後の日本語学習の継続に繋が

る。その点で、たとえ短期であってもプログラムの意義と教師の責任は極めて大きい。AsTW プログラムに参加した学生達は、プログラム終了後も FB などのソーシャルメディアを通じ、活発に交流を続けている。一部では、同窓会をしようという声も持ち上がっている。プログラム自体は閉講式で終わっても、友情や学びは継続するのである。

AsTW の日本語クラスを受講した学生達の多くはコース終了後も日本語の勉強を続けたいという希望を述べ、実際その中の数名は来日し、九大で実施されるサマーコースに参加したり、交換留学生として九大や福岡女子大に入学したりしている。しかし、ひとつ残念な点は、日本留学を希望していながら韓国や他の国に留学する学生も多いことである。留学の条件や奨学金などで条件の良い国に学生は流れる。将来性のある非常に優秀な学生が他の国に留学してしまうのは残念でならない。AsTW プログラムの２週間という期間は、学生の資質や人間性を審査するには充分である。そこで提案したいのだが、日本留学を希望する学生を選別する手段として、AsTW のプログラムを活用できないだろうか。AsTW が九大への留学の奨学金が出るプログラムになれば、より多くの学生が応募してくるであろうし、参加した学生達もより切磋琢磨しながら積極的に授業に取り組み、プログラム自体もさらに活性化するだろう。何より九大にとっても、確実に優秀な学生を獲得するチャンスとなる。優秀な留学生の存在は、九大のレベルアップにも貢献するに違いない。AsTW プログラムが素晴らしいプログラムであるだけに、それを基盤とした新たなプログラムの開発を提唱したい。

九州大学は、今後も留学する九大生や留学生の受け入れを積極的に拡大してゆく方針を打ち出している。AsTW のような質の高い学びと相互交流の場になる短期国際プログラムが、今後多く開発されることを切望する。

最後に、このプログラムを通じ、タイのマヒドン大学、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学において、多くの素晴らしい出会いに恵まれ、貴重な体験をすることができた。このプログラムに関わらせていただいたことに、心から感謝の意を表したい。

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，307－312
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 307-312

九州大学におけるサマーコースの実践（2014 ATW）

Report on the 2014 Asia in Today's World (ATW) Program

岡　崎　智　己*

高　原　芳　枝**

西　原　暁　子**

0．はじめに

Asia in Today's World（ATW）は、今年で14回目のプログラムを開講・実施し、東アジア［7］、東南アジア［10］、北米［7］、ヨーロッパ［7］から、合計31名の参加者を受入れた。（［ ］内は地域別受入れ数。）

なお、本年で本プログラム開始以来の通算受講者受入れ実績は19カ国93大学511人となった。

1．2014年 ATW プログラムの概要

実施期間	2014年６月24日（火）～８月８日（金）
対象者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で以下の条件を満たすもの （1）学業及び人格が優れており原則として在籍している大学の推薦を受けた者 （2）留学の目的及び計画が明確で日本への留学の成果が期待できる者 （3）日本での留学期間終了後在籍大学において学業を継続する者 英語を母国語としない者については、TOEFL550点以上の英語能力を有する者
定　員	30 ～ 40名
開講科目	1）人文・社会科学系「アジア研究コース」全４科目（教育言語：英語） 2）日本語（初級前半～中級後半・全４レベル５クラス）
奨学金	日本学生支援機構（JASSO）による奨学金16万円／人を26人に支給
見学旅行 （登録制）	1）赤米田植体験（糸島市日帰り）　参加料 2,500円 2）厳島神社と広島平和記念公園（１泊）　参加料25,000円 3）日本文化体験（茶会・座禅）（半日）　参加料 各500円

*九州大学留学生センター教授
**九州大学国際交流推進室准助教

宿　　舎	以下の組み合わせから希望をとり、調整して割り当てた。 1）４週間ホテル＋３週間ホームステイ；2）全期間ホテル；3）４週間民間学生寮＋３週間ホームステイ；4）全期間民間学生寮
参 加 費	授業料88,800円（６単位相当）、宿舎費 117,000円～ 230,000円（宿舎タイプにより異なる） 見学旅行費（見学旅行欄参照）

受講者数

2014年の応募者、並びに受講者（＝受講許可者の内、実際にプログラムに参加した者）の国別内訳人数は以下のとおりである。

応募者総数	受入許可者総数	受講者総数
50人	39人	31人

（単位：人）

アメリカ	カナダ	イギリス	フランス	中国	台湾	香港	韓国	シンガポール	フィリピン	マレーシア	計
6	1	6	1	2	1	3	1	4	4	2	31

開講科目

人文・社会科学系「アジア研究コース」４科目と「日本語コース」を開講した。

①「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況

各科目とも、２単位相当の授業（計30時間）を行った。ATW の規定に従い、「アジア研究コース」を選択した学生は以下に挙げる開講科目から２コースを選択し受講した。

開講科目・授業担当	受講生数
1. Psychology in Asian Context: Theory and Practice Chun Hong Gan（マレーシア国立大学講師）	12人
2. Mangamania and Japan Ulrich Heinze（イーストアングリア大学講師）	19人
3. Japan in East-Asia: the Dynamics of Politics and Society Dimitri Vanoverbeke（レウヴェン・カトリック大学教授）	16人
4. Death in Traditional Japanese Literature in the Asian Context Noel J. Pinnington（アリゾナ大学准教授）	15人

②日本語コースの受講状況

初級と中級で５クラスを開講し、各クラスで２単位相当（計60時間）の授業を行った。

ゼロ初級	初級１	初級２	中級１	中級２	計
13人	４人	４人	６人	４人	31人

２．受講者の評価

本年の参加者による本プログラムの評価は例年どおり極めて良好であった。

- プログラムの総合的な評価（有効回答者数：28人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	19人	9人	0人	0人	0人	4.68 ／ 5.0

- 「アジア研究コース」について（有効回答者数：28人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	12人	12人	3人	2人	0人	4.17 ／ 5.0

- 「日本語クラス」と「アジア研究」とのバランスについて（有効回答者数：29人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	9人	11人	6人	3人	0人	3.9 ／ 5.0

- 「日本語コース」（有効回答者数：28人）

満足度平均数（%）	85.6

- ホームステイについて（有効回答者数：15人）

満足度平均数（%）	94.0

全般	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	11人	4人	1人	0人	0人	4.73 ／ 5.0

- チューターについて（有効回答者数：28人）

全般	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	11人	16人	0人	1人	0人	4.32 ／ 5.0

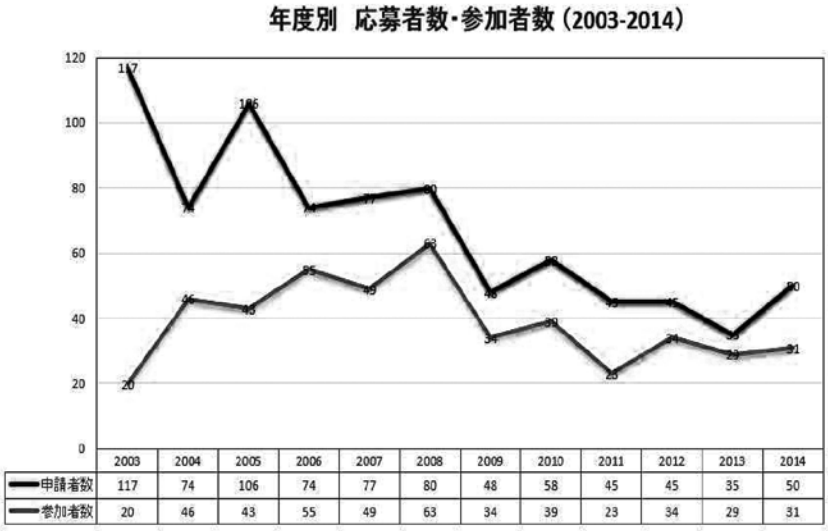
担当チューター	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	10人	9人	4人	3人	2人	3.79 ／ 5.0

「日本語クラス」と「アジア研究」とのバランスについて意見が分かれるのは例年のことであるが、

これは日本語の学習を主目的にプログラムに参加した学生とアジア研究コースに惹かれてプログラムに参加した学生の間で意見が分かれるためである。各自が出席した日本語クラス、アジア研究コースについては「大変によい」「よい」という評価を下した学生が大半で、プログラム全体については「ATW is a great program to experience Japan」「I will always remember this as a life-changing experience」「My ATW experience was one of the best times in my life」「ATW is a life-changing experience for me」「I had the best 7 weeks of my life in Japan because of the ATW Summer program experience」「the courses that being offered were great enough compare to the other summer school programs」「ATW has been a fantastic experience, the classes have been very interesting and I have learnt a lot about Japanese culture」「The program is almost perfect」といった具合に非常に高い評価を得ている。（以上、すべて参加者から寄せられたコメントは原文のまま引用）

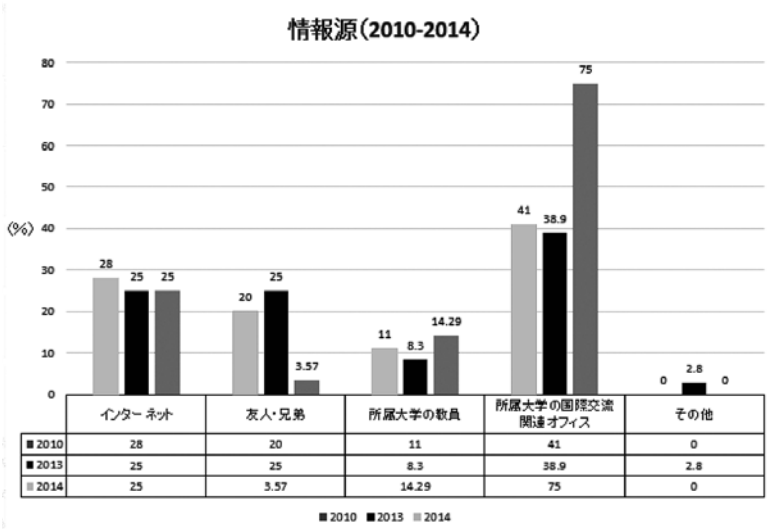
3．応募者数と参加者数の動向（2003 ～ 2014）

本プログラムへの応募者数は、2011年以降は30人～ 50人の範囲で推移しており[1]、その中から学業成績と英文エッセイ、及び推薦書を審査して毎年20人～ 30人程度を受入れている。応募者の ATW に関する情報源（＝どこで・どうやって ATW について知ったか）は、所属大学で「国際交流を担当する部署・オフィスを通じて」が最も多く、ついでインターネット（での検索）となっている。



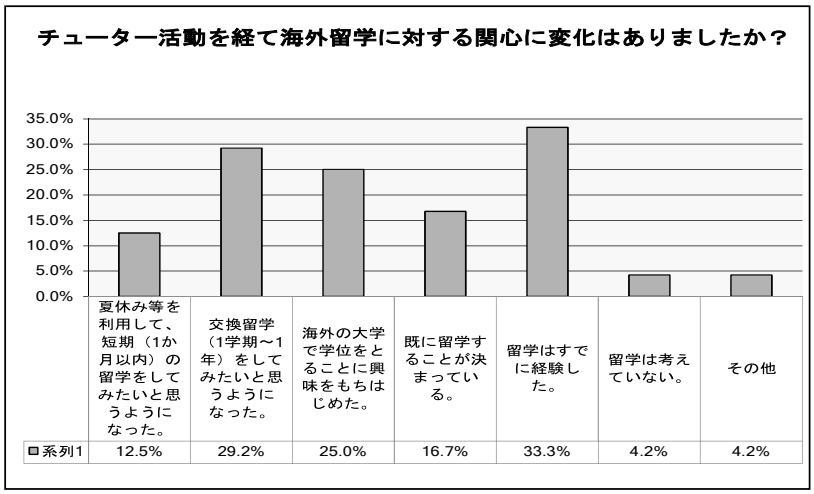
	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
申請者数	117	74	106	74	77	80	48	58	45	45	35	50
参加者数	20	46	43	55	49	63	34	39	23	34	29	31

1　2003年度は SARS 流行の影響で SARS の伝播が確認された国・地域からの受入れを中止したため、参加者数が大幅に減少した。

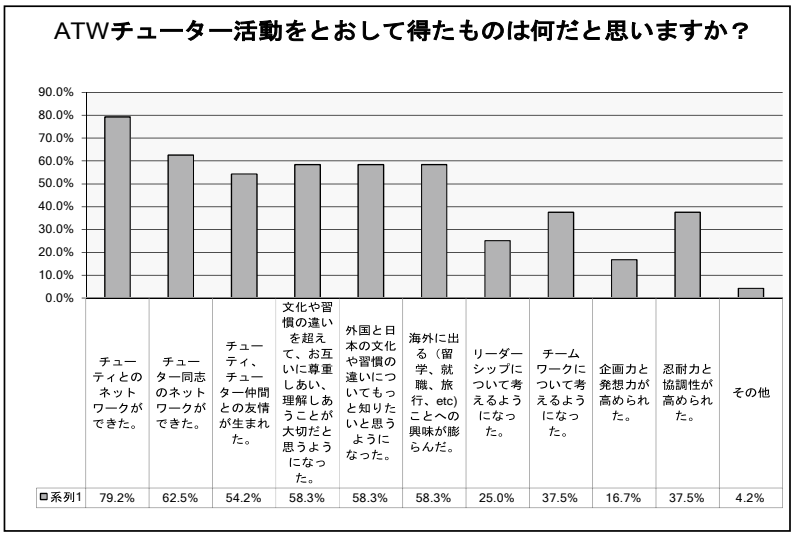


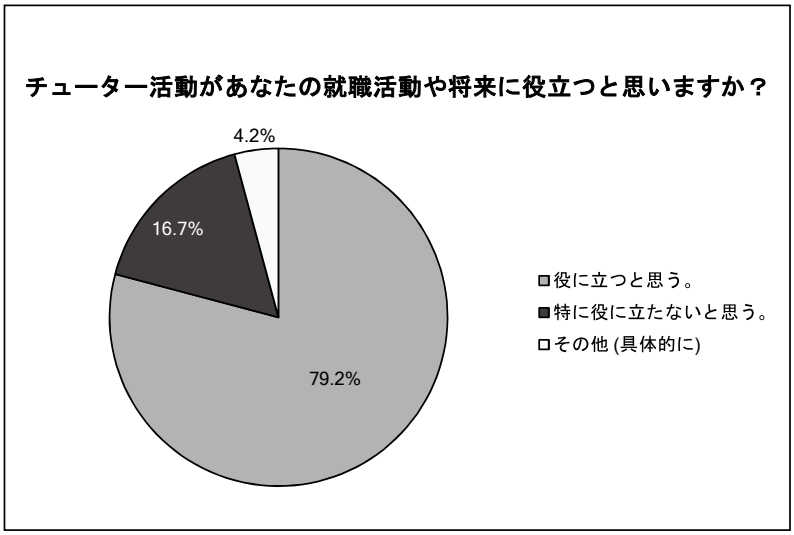
4．チューター活動を通じた日本人学生の海外留学に対する意識

今年のプログラムでチューター活動を行い、その経験を踏まえて、今後海外留学をしたいと考えるようになった学生は66.7％に上った。[2] 昨年の報告でも述べたことだが、ATW でのチューター活動を通じて海外の同年輩の学生と交流し、それが刺激となって自らも留学を希望、計画するようになる傾向が伺える。こうした点からして ATW もまた本学の「国際化」の一翼を担っていると言える。



2　１ヶ月以内の短期留学、１学期～１年間の交換留学、学位取得のための留学の合計


ATWチューター活動をとおして得たものは何だと思いますか？
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
チューティとのネットワークができた。
チューター同志のネットワークができた。
チューティ、チューター仲間との友情が生まれた。
文化や習慣の違いを超えて、お互いに尊重しあい、理解しあうことが大切だと思うようになった。
外国と日本の文化や習慣の違いについてもっと知りたいと思うようになった。
海外に出る（留学、就職、旅行、etc)ことへの興味が膨らんだ。
リーダーシップについて考えるようになった。
チームワークについて考えるようになった。
企画力と発想力が高められた。
忍耐力と協調性が高められた。
その他
系列1
79.2%
62.5%
54.2%
58.3%
58.3%
58.3%
25.0%
37.5%
16.7%
37.5%
4.2%


チューター活動があなたの就職活動や将来に役立つと思いますか？
4.2%
16.7%
79.2%
役に立つと思う。
特に役に立たないと思う。
その他 (具体的に)

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，313－322
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 313-322

International Student Issues in Adapting to Life at Kyushu University

Jordan Pollack *

International students engaged in short-term (one year or less) exchange study at Kyushu University (Kyudai), such as those participating in the *Japan in Today's World* (JTW) program,[1] typically face a number of adjustment issues often not fully understood or appreciated by faculty and administrative staff less involved with their supervision. What follows is a brief discussion of such issues as first inventoried in Pollack (2014).[2] Students of course differently experience and respond to the challenges of adapting to new conditions, and this may produce differing patterns of program success and satisfaction. Collectively the issues, given their recurrence, argue for a more sensitive, anticipatory, patient, and forgiving approach to assisting their acclimation. The more important areas of concern are reviewed in turn.

Arrival issues: Students typically reach campus excited, nervous, and tired. The cumulative demands and stresses of trip and program preparation (itinerary planning, dealing with separation worries, packing decisions, visa application procedures, home and host university paperwork, obtaining academic guidance and clearance), travel to Fukuoka (check-in and security procedures, immigration formalities, lengthy flights and connection waits), and first encounters with institutional hosts generate considerable anxiety over many uncertainties: logistics, personal safety, interruption of relationships, expenses, and an assortment of imagined obstacles (getting lost, being unable to communicate with home, running out of money, not knowing whom to turn to for help or how to find medical help if needed), causing sleeplessness, digestive irregularity, emotional swings, strains from disruptions to routine, disorganized behavior, and more. Once having reached their destination, students commonly display signs of relief and a happy embrace of welcoming staff, but may also exhibit continued unease: excessive enthusiasm at their deliverance, unseemly assertiveness in efforts to gain control over circumstances, indiscreet

*The author is a cultural anthropologist and professor of the Kyushu University International Student Center.

1 Established in 1994, JTW is a comprehensive, integrated, one or two semester-long, living-learning program for international students, mostly undergraduates. It offers a rigorous Japanese studies curriculum including language training at multiple levels, with an assortment of co-curricular activities that provide substantial opportunity for intercultural encounters. Core course instruction is in English. For further details, visit http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/; see also Pollack (2007, 2009, 2011, and 2014b).

2 This essay draws in part from the author's ten years of coordinating the JTW program.

speculation about host intentions when reception arrangements fall short of expectations, premature judging of material conditions or personalities, skeptical questioning of support strategies and style, and presumptuous or unwitting insistence on staff responses that may be inconvenient, inappropriate, or impossible. Hesitation, reticence, awkwardness, shyness, over-sensitivity, wariness, and confusion are also often observed, risking the creation of poor, though not necessarily representative, first impressions. "Bad landings" are a likely program start-up "hazard" which require flexible, empathetic responsiveness on the part of staff with whom students have early contact.

Attention issues: If anxiety, tiredness, indecision, euphoria, impaired judgment, and a host of other unstable states of mind govern the newly arrived student, compromised attention to instructions, reassurances, expressions of interest, demonstrations of support, and more can be expected. Distraction, for whatever reason, interferes with the proper absorption of advice from staff and teachers; guidance meticulously clarified and comprehensively provided in orientation events, briefing materials, syllabi, and the like, which is designed to make entry and acclimation easy and efficient, often fails to achieve intended results. Problems are likely in light of the sheer knowledge load involved with initial move-in and program familiarization. The rules and codes, both academic and practical, to be internalized—numerous and nuanced, diverse and decontextualized—are hard for students to prioritize, despite suggestions from coordinators and staff. Too much is simply too new to incorporate quickly into one's conduct. Questions previously addressed are asked again, sometimes several times over. Answers already available in writing may satisfy the doubtful, the quibbling, or the hyper-compliant only if provided also in person. Students accordingly require repeated, consistent exposure to formulations of program protocols and opportunities. Adjustment is a process of graduated accustomization to a normative structure. Recognition of and accommodation to the customary and the usual comes only in time; so, too, the ability to distinguish reliably and self-confidently between the obligatory and the optional. Staff and teachers therefore must anticipate, with both resignation and heroic patience, the probability that a number of students on a number of occasions will need clarifications, reminders, sustained encouragement, and confirmations. Steadiness of unambiguous messaging, however, will eventually bring calm to the program environment, as a shared sense of how things are done and to be takes hold. Complacency, though, is never to be enjoyed. Maintaining student attentiveness, because a moving target—focus may fade with growing self-reliance and the normal habituation to program-related communications—is an ongoing effort.

Environment issues: JTW students, like most international students, carry with them to Japan, along with their bags, certain worries, in some cases naïve and exaggerated, about assorted natural threats to their safety and well-being. Before coming, they have learned—thanks to a steady flow of (frequently horrific) images and reports through the news, social, and other familiar media—of the archipelago's susceptibility to earthquakes, tsunami, volcanic eruptions, typhoons, mudslides, and flooding, which together

contribute to an underlying apprehension, the fear of looming disaster, as they have yet to learn how to determine the level of risks actually faced. Once arrived, they are alerted to the dangerous presence of poisonous spiders (the potentially deadly redback, *seakagokegumo*, and the ubiquitous, far less noxious wood spider, *jorōgumo*, are the primary threats), toxic caterpillars (*kemushi*), and venomous snakes (*mamushi*) lurking where they live. The swelling, itching, oozing, and rashes associated with insect brushes and bites, an inevitable part of life during the warmer months, can trigger considerable alarm, particularly when the offending agent goes unidentified and the symptoms are previously unexperienced. Intensifying the uneasiness as well, and only adding to the entomophobic preoccupation, are the giant hornets (*ōsuzumebachi*), cockroaches (*gokikaburi*), centipedes (*mukade*), and cicadas (*semi*) that abound. Allergic or asthmatic reaction to the ever-present, humidity-related black mould (*kabi*), the seasonal plant and tree pollen dispersals, and the airborne dust of the urban atmosphere, some of which blows over from the Eurasian continent, may heighten feelings of discomfort. Autumn enrollees additionally must cope with the gradual lessening of daylight and the attendant dropping of temperatures, which some students (those from warmer latitudes as well as those bothered by seasonal affective disorder, SAD) struggle with more than others. In the wake of the Fukushima meltdowns, finally, and in the context of the intractable cleanup problems, ever in the news, dread of creeping radiation and contamination of water and food resources continues to unsettle those easily unnerved by the unknown.[3] A recent government decision to allow reactivation in Kyushu of reactors[4] shut down since spring, 2011, even if the facilities satisfy newer safety criteria, does little to quell suspicions.[5] Natural risk-related concerns are partially assuaged through the dissemination of relevant advisories and warnings, and by way of workshops, lectures, and site visits with hands-on activities that address questions and offer response guidelines.[6]

Housing issues: Residence hall living presents concerns for international students in several respects, many reflected in the occupancy guidelines they must observe, with each rule or standard implying an area of previous and anticipated noncompliance. Most difficult to follow are restrictions on noise levels, frequently exceeded during individual room parties and gatherings in kitchens and hallways.[7]

3 Student applications for JTW from certain partner institutions and countries dropped noticeably in number in the aftermath of the Great East Japan earthquake (http://www.kyushu-u.ac.jp/english/university/TEq.php), and are only now just rebounding.

4 See http://www.japantimes.co.jp/news/2014/07/27/national/kagoshima-residents-near-sendai-nuclear-plant-given-iodine-tablets/#.VGAH-_mUckA

5 For an example of the logic of concern, see http://www.japantimes.co.jp/opinion/2014/10/07/commentary/japan-commentary/tragic-wake-up-call-as-abe-pushes-reactor-restarts/#.VGAF5_mUckA

6 Kyudai international students, for example, have the opportunity to visit a municipal disaster response education center (http://www.fuku-bou.or.jp/pdf/tanken.pdf), where they experience the simulated strong winds of a typhoon and the shaking of a 7.0 magnitude earthquake, as well as learn how to use a fire extinguisher.

7 JTW students in their current facility are bound by a specific guideline stipulating that "Noise (…voices, music, and other sounds loud enough to disturb the sleep, study, and peace of other residents) is not permitted, regardless of time and place."

(More generally the relative quiet of public spaces in Fukuoka, and of the surrounding neighborhoods in particular, is initially not expected or appreciated by international students.) Transgressions prompt complaints from other residents and subsequent regulation enforcement visits from housing security personnel, creating encounters that invite resentment, tension, misunderstanding, and animosity on everyone's part. These can fester with repeated limit-violations, whether intentional or inadvertent, sometimes (mis)-perceived as a deliberate testing, disrespecting, and provoking of housing authorities.[8] The guidelines in place—a combination of strictures, expectations, and courtesies—includes smoking and alcohol use prohibitions; visitor and floor access limitations; the responsibility to keep facilities and equipment orderly, clean, and in good repair; the obligation to pay utility charges and rent on time and in full; and a variety of other checks on conduct. For some JTW students otherwise cooperative and grateful of their residential privilege, adherence may be compromised when the rules are viewed variously as unclear, underspecified, tedious to learn and remember, childish, intrusive, unjustified, over-reaching, petty, unmonitored, unevenly enforced, or just generally irksome. Immaturity and innocence, certainly factors in the choices of a few individuals, will give way typically, however, to accountability following the patient reiteration by program staff of policies and their rationales. It should be noted as well that many international students are living away from home, on their own, for the first time in their lives, an experience both exhilarating and stressful. If not fully accustomed at first to the requisites of independent existence—meal-planning, food-shopping, and cooking; laundering clothes and room-cleaning; monitoring and making timely payments for the use of utilities; scheduling of activities; budgeting of resources; self-care during illness, etc.—having to handle such routine requirements likely will help to generate the conscientiousness, proficiency in self-management, discipline, and other competencies for which study abroad is intended.

Dietary issues: Many international students fall under the spell of Japanese cuisine, *sushi* in its varieties especially, long before coming to the archipelago. But not all find they can tolerate raw delicacies or other intercultural litmus-test foods (*nato*, *umeboshi*, *ikizukuri*, *fugu*, etc.) and practices (alcohol consumption). This may trigger, particularly in the less adventurous or self-confident, larger doubts about one's ability to fit into local lifeways, to achieve competency through immersion experiences, to perform in socially favored ways, to manage relationships that are built or maintained partly through customary social dining and drinking. Additionally, those constrained by religious proscriptions (pork or beef aversion) or other ethical preferences (vegetarianism, revulsion to whale and dolphin flesh), or limited in their choices for medical reasons (allergies) or weight control purposes, may fret over the practical difficulties in adhering to principles or resent the guilt of sometimes unavoidable departures from guidelines. The unaccustomed foods and ingredient combinations, prepared in unfamiliar ways and offered in unfamiliar

8 These contingencies are addressed, too, in the residential guidelines: "At all times students must be considerate of co-residents and respectful of housing staff, facilities, and property"; and "Students must promptly follow any instructions of the [residence hall] manager or security staff."

tastes, portions, and sequences, try viscerally, and thus more profoundly than may be realized, self-expectations and the determination to flourish. Eating disorders travel, too, interfering potentially with acculturation, positive program involvement, and normal interaction with peers. Many JTW students, moreover, put on unwanted weight during their stay, indulging frequently in both celebratory feasting and nervous snacking while tempted often to rely on the prepared, high-caloric foods of 24/7 convenience stores—still another threat to self-contentment with interpersonal as well as health implications.

Communication issues: Little disheartens, when commencing a study experience abroad, as the inability to understand others or to be understood by them in the host country language. This applies obviously to the novice without prior training, but notably also, if not more so, to those arriving with self-determined or testing-assessed degrees of proficiency who then encounter, to their considerable surprise and dismay, early communicative difficulty. Yet JTW and other Kyudai international students have set themselves up for precisely those situations wherein expressive and interpretive skills may fail them. Sudden immersion in the new speech environment, with its prosody and propriety particulars, context-dependent nuances, and intentional ambiguities, leaves most more or less "lost in translation," whether reliance is upon English or Japanese, for many of the early weeks and months of accommodation to local lifeways. The formality and politeness codes especially— including the nonverbal vernaculars of gesture, facial expression, posture, attire, eye contact, proxemics, time management, and more—present distinct complexities, reflecting the emphases in Japanese exchanges on protocol and etiquette and the habitual resort to indirectness, intimation, and implicature. In dealing with this, students worry, hesitate to open up, feel shame and frustration, and berate themselves for their inadequacies, hiding misgivings and avoiding the risk of mistakes they do not realize they must commit to progress. Vexation precedes and disappointment follows many an encounter, inside and outside the classroom, with teachers, staff, friends, and others. Over the longer run, impatience and anger can attend the self-perception—often the consequence of unrealistic expectations of the acquisition process—that one's gains in skill have been too slow or unsteady. Individuals hardest on themselves, suspecting deficiencies in their aptitude or discipline, resort to self-rebuke (if not also program-disparaging), eroding further the confidence and determination to master the language. Discussing such issues openly with students is critical for their success; so, too, timely reassurances of progress and encouragements of effort at their more vulnerable moments, as well as reminders of the benefits of learning to function effectively and appropriately in natural language settings—presumably an important motivation for overseas study—despite the confusions and embarrassments that inevitably occur.

Cultural issues: Japanese conventional practices intimidate no less than fascinate international students. Eager to discover, (partially) internalize, and perform "Japaneseness"—here, normative patterns of purpose, meaning, and conduct that generally prevail across the archipelago—they nonetheless question

their preparedness for doing so. They doubt their readiness, on different levels, for successful enactment of cultural expectations. Suspending habitual modesty to bathe fully naked with strangers or new acquaintances in public baths (*onsen*, *sentō*), as occasional ritual intended to facilitate the building of social ties and trust; or learning to handle chopsticks without fumbling one's food, as marker of one's social training, attentiveness to detail, regard for presenting image, self-control, and even nimbleness of mind; or knowing how to bow to the proper degree, with the proper poise and posture, at the proper distance, for the proper length of time to fit the differential status conditions in play—these are for newcomers perhaps better known and anticipated examples of challenge. Less familiar if more exacting forms of cultural behavior, however—forms more significant and indispensable for their role in social success—include the requirements to select deftly between optional registers to achieve situationally suitable politeness; to employ apt expressions (words, gifts, gestures, etc.) of gratitude, acknowledgment, support, and the like in relationship-building, reciprocal exchanges; to choose how much to reveal of oneself and how much to probe others' sentiments and intentions in strategic and everyday interaction; to determine how assertively to participate in collective decision-making; to recognize and react adeptly—discriminatingly—to social code-shifting, as between mannerly, perfunctory, and disinterested locutions (*tatemae* or *omote* speech), on the one hand, and forthright, direct, and invested utterances (*honne* or *ura* speech) on the other. Such practices and many others involving *discernment*—sensitive, astute judgment, calculatedly tactful and moral in execution, labeled *wakimae* and *kejime*—demand daunting, seemingly unattainable proficiency. Normatively naïve and unsure, JTW and other international students understandably fear making mistakes, and so hesitate to act or, when they do, act awkwardly.

A further source of student limitation and awkwardness, stubborn and troublesome, often not grasped or resisted, is interpretive: the heritage of national, ethnic, and orientalist representations of Japanese, frequently formulated as self-serving binary distinctions, exaggerated and xenophobic, favoring the sojourner's home community and culture.[9] The stereotypes, caricatures, essentialisms, and prejudices that initially bias students' accounts of "what Japanese are like," that must and usually will be replaced later by more reliable, nuanced understandings and appreciations, confound their first efforts to make sense of and otherwise adapt to their new circumstances. More generally the elements of intercultural competency— reflexive self-monitoring, tolerance for ambiguity and difference, empathy, decorum and discretion in the face of uncertainty or unpleasantness, containment of ethnocentric presumption, alternation between interpretive detachment and immersive involvement, patience with one's inadequacies, postponement of judgment when contextually under-informed, the ability to see and critique one's conceits and to laugh at one's errors, respectfulness, and resilience in disappointment, among others—remain still to be made habitual in student behavior in most cases. Realizing that what one thinks one "knows" about people is incorrect, merely imaginary, over-generalized, outdated, undemonstrated,

9 These are well-documented in the Japanese studies literature, by Japanese and non-Japanese scholars alike. See McVeigh (2014) and Robertson (2005) for examples.

transitory, or contested can be disconcerting and confidence-upsetting. In some cases, enthusiasm for the broader encounter with Japan may be undermined, with dedication to studies and commitment to personal goals accordingly weakened.

Still another area of cultural issues derives from students' variable experiences of cultural "surprise," "stress," "annoyance," and "fatigue." Each is a milder form of culture "shock" (discussed below), in which, respectively, normative unexpectedness (rules that jolt, bewilder, disillusion, or unnerve), normative contradictions (inconsistencies among the rules to be internalized and reproduced), normative aggravations (rules which inconvenience, perplex, and exasperate), and normative overload (rules that, by their sheer number, encumber, strain, frustrate, and exhaust) can disturb and complicate the process of adjustment. Such concerns typically are self-resolving, however, as are most of the issues discussed above, with the developing of competency and growth of situational expertise. Programs like JTW assist this maturation through courses and co-curricular exercises that foster reflection on the goals and conditions of intercultural and cross-cultural learning. Students are reminded that the experience of adversity and successful coping enable the progressive mastery of skills and self.

Academic issues: In this area the challenge for instructors is to adapt their course content and pedagogy to the diversity of their classes; for students, it is to reconcile their variable states of preparedness to an academic culture initially, if necessarily, insensitive to their presenting differences in educational background, specific degree program needs, and individual learning style. The requirements and expectations, if previously not experienced, poorly explained, excessive given total student workload, or too advanced, will provoke anxiety, discouragement, frustration, delays with assignment completion, testing failures, and avoidance of productive solution-finding, whether motivated by shame or some other reluctance to approach the professor or confide in an advisor. Such risks imply the indispensability of well-conceived program admission criteria (defining a minimum level of ability and readiness), informed selection decisions (ensuring enrollment of only the genuinely eligible), and prospective student awareness of a program's curricular goals, standards, and training prerequisites (allowing the best academic fit). The classroom itself introduces further concerns, as students must adjust to teaching methods (some anticipating or preferring more active, and some more passive, approaches in class), speaking manners (with disparities in English proficiency posing serious constraints on the quality of exposition and discussion), and assessment modes (extended writing exercises and oral presentations, never attempted by some, are commonly assigned) to which they may be quite unaccustomed.[10] Students, moreover, routinely observe and evaluate each other, drawing conclusions as to the comparative talent, effort, participation style, and character of their peers. Such appraisals, often consistent with the national, ethnic, age-based, gendered, and other fault lines that hold within a given cohort, predictably, if differentially,

10 Kyudai's strict attendance policies, violations of which can result in denials of final exam participation privileges and course failures, come as a surprise to some, especially exchange students from universities which effectively lack such rules.

produce admiration, jealousy, disagreement, realignments, increased assertiveness, self-doubt, reticence, withdrawal, and much more, in a social dynamic that unpredictably impacts achievement. The above issues, needless to say, collectively comprise the sorting process that is education, for all of its other functions—a crucible that clarifies as it culls.

One further academic issue, and a perennial source and risk of potential irritation to exchange students, involves Japanese language course placement decisions following diagnostic testing. Differences in curricular and pedagogical strategies between Kyudai's institutional partners make it highly likely that some of their students will be assigned to courses with skills content below what those students expect or feel is appropriate to their ability level, or what their home universities will recognize with credit. This may cause embarrassment before their friends, despair for their degree completion prospects, resentment of the evaluation process, questions about test reliability, and gnawing doubts over their aptitude for language acquisition. Once instruction begins, however, students generally find themselves conceding the revealed weaknesses, allowing reconciliation to their location in the proficiency order.

Social issues: The splits and disparities previously identified resonate more generally in the groupings students develop gradually as study periods progress. Harmony, friendships, community, and overall morale are contingent outcomes; the play of personalities in a given cohort influences substantially what levels of contentment and fellowship students may experience at any moment in their common adjustment to Japan and each other. For students on living/learning programs such as JTW, though clearly less so for independently enrolled students, the experience of joint participation in a range of academic and co-curricular activities, sustained over time, with attendant shared emotional highs and lows generated through the pressures and pleasures of learning together, does, however, tend to contribute to the building of ties between them—a mutually respectful and supportive bonding Japanese educators call *nakama* and regard as an educational ideal essential to group-enabled learning. (Bonds of this sort in fact prove to endure well into the post-program period.) Still, the cultural differences students reflect in their more casual, less guarded comments and actions, if these offer important lessons in human possibility, also convey the reality of human limitations, in sensitivity, tact, modesty, acceptance, and admiration. Unfortunately divisions between them arise in response to perceived slights, some echoes of broader political antipathies in the relationships between states, nationalities, and ethnicities. Build-up of resentments over group exclusions, disregard for others' values, and indifference to or dismissal of alternative codes—privacy and propriety standards figuring importantly among them—whether inadvertent or intentional, is common. Competition is waged, and envy engaged, as students assess variance, on occasion embarrassing, in how culturally well-versed, and how linguistically proficient, they are upon arrival. Such petty contention is mischievous, coloring subsequent judgments and reinforcing misperceptions, aggravating animosity. Good will dissipates, undercutting the usual role of multicultural programs in fostering edifying enjoyment and exploration of lifeway variations. Additionally, difficulties of socializing with Japanese students,

stemming from language, circumspection, shyness, and other barriers, frequently not anticipated, often force international students to focus only upon each other, causing unhappiness over missed opportunities for integration into the society they have chosen, typically with career plans in mind, to know intimately and "expertly." Partner assignment programs, such as JTW's "tutor" system, which assist with adjustment to university life, pair Japanese and international students in durable arrangements that effectively address concerns about social isolation, but that also help to thwart the threats to conviviality identified above.

Health issues: The above considerations, and others related but not discussed, are each in their own way possible cause for illness and the interference with a smooth, desirable coming to terms with the demands of study in Japan. The likelihood of gastro-intestinal problems, due to starting a new diet and exposure to a new environment populated with assorted, previously unmet microbes has been mentioned. Reference, too, was made to the odds of asthmatic or allergic reaction. Very probable also are respiratory infections, within the first weeks of arrival, following introduction to unfamiliar viruses and bacteria, but also possibly contracted while traveling to and through Japan, in crowded terminals and stations, or during the long stretches spent in the closed atmospheres of airplanes, buses, and trains. Communal living in dormitories is similarly conducive to the spreading of infectious agents, with disruptive contagions an all-too-regular aspect of international student life. In recent years, norovirus' unpleasant symptoms have made their inexorable way through welcoming JTW and other international student hosts. More consequential for longer term adaptive success, however, are the mental health risks that typically accompany the sojourner, if to variable extent.[11] Among the milder concerns are states of felt disorientation, information and expectation overload, irritation, homesickness, disenchantment, and fatigue emerging in response to the strangeness, complexity, inscrutability, and unrelenting, overwhelming presence of features of the adopted cultural setting. The weightier, more worrisome conditions are the various states—collectively the forms of "culture shock"—of felt helplessness, dependency, isolation, panic, hostility, hypochondria, paranoia, depression, and anxiety. The latter two especially afflict international students, with four-to-six JTW participants annually requiring medical attention or counseling. (Usually these conditions are pre-existing, however, and brought to, not caused by living in, Japan, where the many stresses outlined above serve rather to exacerbate symptoms.) Sleeping and eating disorders, lack of focus, speech disturbances, social withdrawal, extreme mood swings, frequent and radical appearance changes, excessive drinking, and drug abuse are clear behavioral indicators of unusual distress that have been observed.[12] These conditions and symptoms will manifest at different stages, will affect some but not

11 This discussion is drawn partly from the very useful study abroad resource, "What's Up with Culture?" (http://www.pacific.edu/sis/culture/pub/CULTURE_ISSUES_2.htm), downloaded 11/10/13.

12 Suicidal ideation and feelings, and forms of self-harm (e.g., thigh and arm cutting, burning, scratching, hair-pulling, etc.) are rare but real threats demanding vigilance on the part of staff for warning signs.

others, and in most cases are remediable with counseling, medical support as needed, and self-management strategies. Instructors and staff should monitor for the signs of impairment and struggle, aware that the prospects of their occurrence with students away from home is high.

The foregoing is meant to highlight the rough patches of adjustment for non-native students, thereby to contribute to the preparation of faculty and staff who work with them. The assorted difficulties vary greatly across individuals in their incidence and intensity; some may never encounter them. But for those who do need additional time and support to adjust, mindfulness of the many issues that face them may help to ensure their success and well-being.

References:

McVeigh, Brian. 2014. *Interpreting Japan: Approaches and Applications for the Classroom*. New York, NY: Routledge.

Pollack, Jordan. 2014a. "International Students Adjusting," in Andrew Hall, ed. *How to Survive and Thrive in Higher Education: Practical Lessons from the Kyushu University International Faculty*. Fukuoka: Kyushu University G30 Project Office.

_____. 2014b. "Japanese Children's Books as Intercultural Learning Resource," *Kyushu University International Student Center Research Bulletin*, February, No. 21.

_____. 2011. "Unexpected Japan—First Impressions of Acclimating Exchange Students," *Kyushu University International Student Center Research Bulletin*, February, No. 19

_____. 2009. "Why They Come to Japan—Aspirations of JTW Participants," *Kyushu University International Student Center Research Bulletin*, February, No. 17.

_____. 2007. "Building Competency Through Study Abroad—The JTW Experience," *Kyushu University International Student Center Research Bulletin*, February, No. 15.

Robertson, Jennifer, ed. 2005. *A Companion to the Anthropology of Japan*. Oxford, UK: Blackwell Publishing.

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，323－330
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 323-330

2013年度　九州大学留学生センター・留学生指導部門報告

スカリー　悦　子*

白　土　　悟**

高　松　　里**

１．はじめに

2013年（５月１日現在）、九州大学の留学生数は、1,969人となり過去最高となった。全国で６番目に留学生の多い大学である。

九州大学留学生センター・留学生指導部門は、これらの留学生および留学生に関わる教職員・学生、さらには地域の人々を対象として、様々な活動を行っている。

留学生指導部門の活動は、①相談活動（アドバイジング＆カウンセリング）、②教育活動、③留学生への支援システムの形成、④研究・研修活動、⑤学内協力講座・委員会、⑥社会連携、である。

２．相談活動

（１）相談室および担当者

留学生センターは、センター本館がある箱崎キャンパスと伊都キャンパスに相談室を設けている。箱崎キャンパスではほぼ毎日、伊都キャンパスでは、週２回の相談活動を行っている。

また、国際交流会館（留学生宿舎）は、香椎浜会館（270室）と井尻会館（59室）があり、新入留学生対象のオリエンテーションやサポーターへの支援など、指導部門教員が関わっている。

担当者は、スカリー悦子、白土悟、高松里の３名で、分担して各キャンパスの相談室を運営している。

（２）来談状況

相談室における相談件数は表１の通りである。ここでいう相談件数には、数分で済むような簡単な情報提供は含まれていない。相談件数は、1,001件（延べ数、昨年度は986件）である。ほぼ例年と同じ数になっている。

---

*九州大学留学生センター教授
**九州大学留学生センター准教授

表1　九州大学留学生センター 2013年度相談件数

留学生からの相談　　2013年(2012年)

修　学	入学・進学関係	48(30)
	教育制度・内容	46(52)
	進路相談	56(54)
	研究室の人間関係	7(10)
生　活	法律的問題	7(7)
	経済的問題	4(2)
	宗教的問題	5(7)
	宿舎問題（国際交流会館）	68(74)
	宿舎問題（その他）	43(30)
	生活問題	8(15)
	事故病気等	7(13)
	渡日・滞日許可	8(14)
	人間関係	4(21)
	子弟の教育問題	0(0)
	帰国準備	0(6)
	メンタルヘルス	51(46)
	国保・一般保険	0(0)
その他	各留学生会	41(30)
	その他分類不可	11(15)
小　計		411(426)

その他の外国人からの相談

	入進学	31(38)
	その他	7(24)
小　計		38(62)

日本人からの相談

学　生	留学生とのトラブル	4(5)
	海外留学情報	21(14)
	国際親善会関係	20(14)
	その他	125(99)
教職員	入進学	7(8)
	奨学金	0(0)
	日本語関係	6(11)
	コンサルテーション	139(143)
	その他	65(48)
外　部	情報・コメント	57(47)
	イベント・講師依頼	42(51)
	入進学	2(2)
	苦情	4(4)
	その他	44(52)
小　計		552(498)
総　計		1001(986)

①「留学生からの相談」は411件（昨年度426件）であった。

「修学問題」は159件（昨年度149件）であり、進学や進路などの将来についての相談や、研究室における指導教員や他の学生との関係についての相談があった。

「生活問題」は205件（昨年度235件）であった。宿舎に関する相談が多く（111件）、留学生宿舎からの入退去に関するものが多かった。また、メンタルヘルスに関する相談も多い（51件）。不眠や鬱、発達障害疑いの学生の相談などがあった。留学生同士や日本人学生との「人間関係」についての相談も多かった（21件）。

「その他」は、51件（昨年度45件）であり、各留学生会の行事などについての相談、イスラム学生の礼拝場所についての相談などがあった。

②「その他の外国人からの相談」は38件（昨年度62件）であった。

毎年、大学院に入学を希望している学生（日本語学校の留学生や本国にいる学生）からのものが多い。まず研究生として入学したいが、その手続きが難しい、受け入れてくれる先生を探すのが大変、などの相談があった。

③「日本人からの相談」は、552件（昨年度498件）であった。

「日本人学生」からの相談としては、海外に留学を希望している、留学生の友人の問題、などの相談があった。その他、留学生センター教員が顧問をしている国際親善会の学生からのもの（国際交流行事に関するもの）があった。

「教職員」からの相談の中では昨年度に引き続き、「コンサルテーション」が最も多い（139件、昨年度は143件）。留学生を直接指導したりサポートをしている教職員からの相談である。留学生が増えていくが、教職員が必ずしも留学生について詳しいわけではない。様々な問題の解決について、一緒に考えている。

「外部」からの相談では、地域団体（国際化協会や警察など）への情報交換や情報提供が多かった。

３．教育活動

（１）オリエンテーション

留学生課が主催して、新入留学生が入学してくる直前の９月と３月に「サポートチームオリエンテーション」（高松担当）を実施し、入学後の４月と10月に、「新入留学生オリエンテーション」（スカリー担当）が遠隔会議システムを使って各キャンパスで実施された。

2013年３月に「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2013年版」を3,500部を印刷発行し、九州大学の入学式後のオリエンテーション等で配布した。

（２）授業

本年度は、昨年度と同様に、全学教育（主に学部１～２年生を対象）４コマ（昨年度は５コマ）、大学院４コマ（人間環境学府３コマ、大学院共通１コマ）、留学生センター１コマを担当した。その他、１回のみ担当した授業などもある。

表２　担当授業（2013年度）

	前　　期	後　　期
学部 （全学教育）	文系コア科目「教育学」（火曜日５限、スカリー） 総合科目「日本事情」（水曜日５限、高松） 総合科目「大学とは何か」 （水曜日５限、リレー講義１回、白土）	文系コア科目「心理学」（火曜日４限、高松） 総合科目「日本事情」（水曜日５限、白土）
大学院 （人間環境学府）	「留学生教育政策論」（金曜日６限、白土） 「教育学研究法－国際教育」 （リレー講義、１回、白土）	「留学生アドバイジング論」（集中、白土） 「異文化適応論」（集中、高松） 「教育学研究法」（リレー講義、１回、白土）
大学院 （大学院共通科目）		国際性領域「Intercultural Communication」 （火曜日３限、スカリー）
留学生センター	日本語研修コース「日本の人と話そう」 （１回、高松）	日韓共同理工系学部留学生予備教育「日本文化・日本事情」（木曜日３限、スカリー・白土・高松） 日本語研修コース「日本の人と話そう」 （１回、高松）

４．留学生に対する支援システムの形成

（１）サポートチーム・チューターへの支援

①学部サポートチーム

学部留学生（１年生）に対しては、指導部門教員がサポートチームの指導にあたった（高松）。

②大学院サポートチーム

「サポートチーム説明会（留学生課主催）」にて、９月と３月に講演を行った（高松）。

③日韓共同理工系学部留学生予備教育・チューター

10月に来日した予備教育留学生のためのチューター（６ヶ月）に対してオリエンテーションを行った。（高松）

（２）初期適応支援（４月と10月）

来日したばかりの留学生に対しての支援は、留学生課が中心となり、留学生指導部門教員も協力する形で、システマティックに行われている。

日本に着いたばかりの留学生は、事前に登録を行っておけば、九州大学のバスで、空港から寮までのピックアップサービスが受けられる。国際交流会館では、入館関連書類については会館サポーター（主に留学生の先輩）が担当し、続いて外国人登録や銀行口座開設などについては、留学生課サポートセンターの職員および九州大学国際親善会の学生が担当して、新入留学生の支援をしている。会館サポーターへの助言はスカリーが、国際親善会の学生への助言は高松が担当した。

その他、社会人ボランティア団体（そら）によって「市内ツアー」などが実施され、留学生が日本社会に適応しやすいように支援している。

留学生課主催の「新入留学生オリエンテーション」にて講演を行った（スカリー）。

（３）学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生の団体や、学生サークルの顧問となっている。九州大学留学生会は白土が、九州大学ムスリム学生会と九州大学国際親善会は主に高松が顧問として、様々な活動や要望に対して助言を行った。

①九州大学留学生会（KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association）

九大に所属する全留学生を代表する会である。４月に「スポンサーミーティング」が行われ、１年間の活動について、地域の支援団体と共に検討を行った。その他、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

②九州大学ムスリム学生会（KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association）

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生（約300人）の団体である。

４月にイスラムウィーク（パネル展示、イスラム衣装の紹介、アラビア書道、映画、講演、お菓子、各国の料理提供）が、九大ムスリム学生会が主催し、図書館、国際親善会、留学生センターが協力する形で実施された。

４月15日（月）：伊都キャンパスウエスト４号館２階ロビー
４月16日（火）：伊都キャンパスセンターゾーン、比較社会文化事務棟前
４月17日（水）：18日（木）：中央図書館内（タイアップ行事）
４月20日（土）：講演会およびフードフェスティバル

③九州大学国際親善会（KUIFA=Kyushu University International Friendship Association）

会員は年々増え、100名を超える大きなサークルとなっている。

毎年の活動としては、２月の「受験生案内」、４月と10月の「新入留学生支援」、５月から行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」などである。また、箱崎地区で毎週木曜日に「コーヒーアワー」、伊都地区では毎週火曜日に「全学コーヒーアワー」（センターゾーン）、毎週金曜日に「糸島コーヒーアワー」（ウェストゾーン）を行っている。

（4）ボランティア団体の指導・助言

①「福岡フレンドリークラブ」の活動への助言（白土）

九州大学には家族同伴の留学生が約400人いる。400人近くの夫人たちやその子どもたちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本婦人で構成される団体であり、会員数は約35人、九州大学教員の夫人も参加している。 留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業（毎週12:30 ～ 14:20）および交流会（月１回14:30 ～ 16:30）である。これらの活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。

②「九州大学留学生サポートネットワーク〈そら〉」の活動への助言（高松）

〈そら〉は、社会人を中心としているが、九大の学生（留学生）や他大学の学生も参加しているボランティア団体である。主な活動としては、新入留学生を対象とした４月と10月の市内ツアー、井尻国際交流会館における「日本語交流」、イベントの企画などの活動を行っている。

５．研究・研修活動

（1）著書・論文・報告

【2013年】

- 白土悟「中国の社会主義精神文明建設における大衆の文化建設に関する考察」『九州大学留学生センター紀要』第22号、2014年３月、69－174頁
- 白土悟「巻頭言：最近の留学生政策の動向」、九州シルクロード協会会報『シルクロード』2013年11月
- 白土悟「新中国初期の学校における思想政治教育の考察」『国際教育文化研究』第13号、2013年７月、15－61頁
- 高松里「セルフヘルプ・グループの機能と役割（２）」生活の発見（特定非営利活動法人生活の発見会発行）、No.636, 2-12.
- 高松里「セルフヘルプ・グループの機能と役割（３）」生活の発見（特定非営利活動法人生活の発見会発行）、No.637, 2-13.

【2014年】

- スカリー悦子・白土悟・高松里『2012年度九州大学留学生センター・指導部門報告』九州大学留学生センター紀要、21、117-124. 2013年
- 「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2014年度版」4,000部印刷発行（オリエンテーション等で配布）

（2）学会活動

【2013年】

- ５月：「人間性心理学研究」査読委員（高松）

- 6月7・8・9日（金・土・日）異文化間教育学会（日本大学、白土）
- 9月14日（土）～16日（月）：日本人間性心理学会にて、個人発表・座長・自主企画実施（東京、高松）
- 12月7日（土）：異文化間教育学会理事会（首都大学東京、白土）

（3）研究活動

【2013年】

- 5月10日（金）～13日（月）：スローエンカウンター・グループ in 沖縄（沖縄、高松）
- 7月7日（日）：沖縄エンカウンターグループスタッフミーティング（福岡、高松）
- 7月13日（土）：異文化間教育学会・大系編集委員会（龍谷大学、白土）
- 7月23日（火）～25日（木）：科研調査（白土）
- 7月27日（土）：研究会「ライフストーリーと音楽」（福岡、高松）
- 7月28日（日）：研究会「当事者性と臨床／研究」（福岡、高松）
- 9月25日（水）：文部科学省委託事業「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」の全体研究会（白土）
- 12月14日（土）：JAFSA フォーラム講演「中国の留学交流の最新動向と日本の課題」（名古屋大学、白土）
- 12月14日（土）：「スロー EG in 沖縄」スタッフミーティング（福岡市、高松）
- 12月22日（日）～23日（月）：EG プロジェクト（湯布院、高松）
- 12月25・26日（水・木）：文科省科研研究会「成長産業におけるグローバル人材の育成」（エルガーラ・オフィス、白土）
- 1月10日（金）～12日（日）：人間関係研究会年次ミーティング（福岡市、高松）
- 2月14日（金）：G30総括シンポジウム「国際化で大学は変わったか」（日航ホテル、白土）
- 2月22・23日（土・日）：文科省委託研究「国際シンポ：第三段階教育における質保証と学位・資格枠組み」（天神シティセンター、白土）
- 3月3日（月）～7日（金）：文科省委託事業「成長産業分野等における中核的専門人材養成に関する研究」にて中国調査（白土）
- 3月8日（土）9日（日）：「幸せな働き方ワークショップ」（創元社主催、大阪、高松）
- 3月10日（月）15日（土）：文科省科研費「地域活性化のための留学生受け入れ政策と社会統合に関する研究」にて韓国調査（白土）
- 3月22日（土）：「スロー EG in 沖縄」スタッフミーティング（福岡、高松）

※定例研究会（月1回）「異文化ナラティヴ研究会」（高松）

6．学内協力講座・委員会・その他

①留学生センター関係委員会

- 留学生センター委員会（スカリー）
- 国際交流専門委員会（スカリー）
- 国際交流会館サポーター会議（スカリー）
- 日韓共同理工系学部留学生コーディネーター会議（スカリー、白土、高松）
- 学生支援委員会（スカリー）
- 国際交流専門委員会ワーキンググループ（スカリー）

②学内協力講座関係

- 人間環境学府における研究指導（白土）
- 人間環境学府博士課程論文調査委員会（白土）
- 人間環境学府修士論文口述試験（白土）
- 人間環境学府修士課程（社会人特別選抜）前期・後期入試（白土）
- 人間環境学府修士課程（一般）前期・後期入試（白土）
- 人間環境学府附属総合臨床心理センター研究員（高松）
- 保健管理専門委員会（高松）
- キャンパスライフ・健康支援センター（2013年４月発足）センター委員会（高松）[1]
- キャンパスライフ・健康支援センター相談員会議（高松）
- 学生相談室会議（高松）
- 21世紀プログラム入試委員（高松）
- 学生相談地区別連絡会議（高松）
- 比較社会文化学府学生の博士論文予備調査委員および学位公開審査（副査、高松）

③学内 FD

- ３月14日（金）：理学府（化学）FD にて講演（留学生課、高松）

④外部非常勤等

- 佐賀大学医学部非常勤講師（高松）
- 九州産業大学国際文化研究科臨床心理センタースーパーバイザー（高松）

7．社会連携

【2013年】

- ４月４日（木）：九州留学生問題フォーラム事務局会議（於：九経連事務局、白土）

1　2013年４月から高松が臨床心理士として「キャンパスライフ・健康支援センター」の相談員（留学生担当）を兼務している。

- 4月13日（土）：福岡帰国留学生交流会・総会（白土）
- 4月18日（木）：市民ボランティア団体打ち合わせ（スカリー）
- 4月23日（火）：九州・シルクロード協会・運営委員会（白土）
- 5月7日（火）：佐賀大学医学部講義（非常勤講師）「労働とメンタルヘルス」（佐賀、高松）
- 5月9日（木）：福岡帰国留学生交流会役員会議（白土）
- 5月22日（木）：九州留学生問題フォーラム理事会・講演会（天神ビル11階会議室、白土）
- 5月23日（木）：西警察署にて講演「福岡県の留学生事情とイスラムについて」（西警察署、高松、KUMSAメンバー、日本人のイスラム教徒）
- 6月14日（金）：犯罪被害者直接支援員養成講座（山口県被害者支援センター主催）にて講演（山口、高松）
- 7月1日（月）：福岡・マレーシア友好協会理事会、マレーシア留学生との交流懇談（白土）
- 7月5日（金）：福岡帰国留学生交流会・役員会議（白土）
- 7月6日（土）：福岡国際育英会理事会・今宿国際交流会館（白土）
- 8月1日（木）2日（金）：「第2回親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」にて講演およびワークショップ担当（鹿児島、高松）
- 9月6日（金）：文化庁委託事業「生活者としての外国人」のための地域日本語教育実践プログラム運営委員会（白土）
- 9月13日（金）：福岡大学留学生別科にて講演「異文化ストレスとそのつきあい方」（福岡大学、高松）
- 9月26日（金）：文化庁委託事業「生活者としての外国人」のための地域日本語教育実践プログラム運営委員会（白土）
- 9月21・22日（土・日）：西日本国際財団「留学生の日本伝統芸能と日本文化・産業体験」研修プログラム（白土）
- 10月23日（水）：福岡市市役所職員との話し合い（留学生状況について）（スカリー）
- 11月27日（水）：九州国際学生支援協会の講演会「留学生支援活動を考える」（天神ビル11階、事務局長・白土）
- 11月6日（水）：福岡フレンドリークラブによる留学生支援バザー開催（センター分室、白土）

【2014年】

- 1月17日（金）：文化庁・地域日本語教育プログラム委員会（白土）
- 1月31日（金）：海の中道海浜公園UD委員会（白土）
- 1月18日（土）：福岡帰国留学生交流会・役員会（白土）
- 2月17日（月）：雑誌「福岡経済」の取材（イスラムについて、留学生課、高松）
- 2月18日（火）：九大学研都市・外国人の住みやすい地域作り会議（市役所、白土）
- 3月27日（木）：福岡産業振興協議会（約100社）と留学生との交流懇談会（於：西南学院大学クロスプラザ、白土）